

岩手県文化財調査報告書第33集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— I —

昭和 54 年 3 月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工事局

岩手県文化財調査報告書第33集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— I —

昭和 54 年 3 月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工事局

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— I —

序

本県には、はるか数万年前から人間の営みがあり、その後たゆまぬ先人の努力と叡智によりすぐれた郷土の文化が現代の生活に受けつがれています。その先人の文化遺産を保存、保護し活用すると共に未来へと伝えることが私たちの責務でもあります。

全国新幹線鉄道整備法にもとづき遺跡の豊庫といわれる北上川流域を縦貫する東北新幹線工事実施計画が昭和46年10月に認可されました。

これに関連し、失われようとする埋蔵文化財の取り扱いについて慎重な配慮のもとに、可能な限り保存するための協議がおこなわれましたが、最終的には48遺跡について記録保存を前提とした発掘調査を実施することになり、文化庁と日本国有鉄道との覚え書きにもとづき、日本国有鉄道盛岡工務局からの委託事業として岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年10月から昭和52年12月まで5年3ヶ月にわたる発掘調査を実施してまいりました。

この調査により宮城県境より盛岡市に至る地域の原始・古代から近世における歴史を解明する貴重な資料の数々を加えることができました。

本報告書は、調査した48遺跡のうち一関市、江刺市に関係した10遺跡について第1分冊として刊行するはこびとなったものでありますが、いささかでも埋蔵文化財の活用と学術研究のために役立つことができれば幸いです。

最後にこの調査について長期間にわたりいろいろ御援助、御協力いただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和 54 年 3 月

岩手県教育委員会

教育長 畑 山 新 信

例 言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書7分冊の中の第1分冊として、昭和48年度から昭和49年度に発掘調査を実施した一関市、江刺市所在の10遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南（一関市）から順に編集した。
3. 本書収録遺跡の発掘調査、および調査資料の整理において次の方々からご指導、ご助言を賜わった。（敬称略）

- ・岩手大学名誉教授 板橋 源
- ・岩手大学教授 草間 俊一
- ・北海道大学助教授 林 謙作
- ・岩手県文化財審議会委員 司 東 真雄
- ・江刺市文化財調査委員 佐嶋与四右エ門

4. 本書における資料の鑑定、分析などについては、次の方々からご教示、ご協力を賜わった。（敬称略）

・石材鑑定

岩手県立杜陵高等学校教諭 佐藤 二郎

・炭化材樹種鑑定

岩手大学農学部助教授 吉田 栄一

・種子鑑定

東北林業試験場東北支場研究顧問 村井 三郎

・陶磁器鑑定

東京国立博物館学芸部東洋課課長 長谷部 楽爾

〃 工芸課技官 矢部 良明

5. 本書に掲載した地形図、空中写真は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図、20万分の1地勢図、2万分の1空中写真を使用したものである。
6. グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。
7. 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料等を参考にした。
8. 本書の観察表、図版は、次の要項に従って作成されている。
 - (1) 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山・竹原編著『新版・標準土色帖』日本色研事業(株)を使用した。
 - (2) 遺構・遺物の実測図は、原則として統一した縮尺になるよう努めた。
9. 方向は、新平面直角座標第X系（東北）による座標北を矢印で示してある。

原点（経度 140°50′00″000）

(緯度 40°00' 00" 000)

各遺跡の基準線と座標北との方向角は別表(第I表)のとおりである。

10. 遺物、写真、実測図等の資料は、岩手県教育委員会文化課において保管している。

11. 調査主体者

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局

12. 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

(昭和53年度)

文化課長 菅原 一郎

課長補佐 小野寺 昭吾 同 小野寺 登

庶務係長 加藤 勝男

主事 鈴木 喜代治 同 佐藤 伸一郎

(埋蔵文化財班)

主任文化財主査 嶋 千秋

文化財主査 菊地 郁雄

技 師 国生 尚

。新幹線調査班

文化財主査 菅原 弘太郎 同 細谷 英男 同 朴沢 正耕

社会教育主事補 鈴木 隆英

技 師 佐々木 勝

13. 本書の執筆のまとめは次のとおりである。

- ・調査の経過……………嶋 千秋
- ・調査の方法、整理の方法……………朴 沢 正 耕
- ・機織山I遺跡、鶴羽衣台遺跡、瀬谷子遺跡
五十瀬神社前遺跡、谷地遺跡……………菅 原 弘太郎
- ・機織山II遺跡、鶴羽衣遺跡……………細 谷 英 男
- ・中屋敷遺跡、落合I遺跡……………鈴 木 隆 英
- ・力石遺跡……………佐々木 勝

なお遺物、図面の整理、実測、および写真の撮影などは次のものがあつた。

(期限付臨時職員)

坂川 進 齊藤 孝 鈴木 優子 古沢 友治 佐藤 正彦 熊谷由美子
浅利 孝子 伊東由美子 小林 史子 中ノ目真弓 村上 良子 下村奈々子
屋和田恵子

14. 各遺跡の執筆にあたっては、つとめて文中の記述の統一に心がけたが、十分な検討を欠いた向きもある。

目 次

序文

1. 調査の経過 (1)
2. 調査の方法 (4)
3. 整理の方法 (5)
4. 遺物保存処理の方法 (6)
5. 広報活動の実施 (6)
 - 東北新幹線関係遺跡一覧
 - 東北新幹線関係遺跡位置図

本文

一関地区の概観

1. 一関地区の地形と地質 (11)
2. 周辺の遺跡 (12)

機織山Ⅰ遺跡

1. 遺跡の位置と環境 (17)
2. 調査に至る経過 (17)
3. 調査の方法と経過 (19)
4. 調査の結果 (19)
5. 考察とまとめ (20)

機織山Ⅱ遺跡

1. 遺跡の位置と環境 (29)
2. 調査の方法と経過 (29)
3. 調査の結果 (29)
4. まとめ (45)

江刺地区の概観

1. 江刺地区の位置および地形と地質 (49)

2. 周辺の遺跡	(52)
----------------	--------

中屋敷遺跡

1. 位置と地形	(59)
2. 調査の方法と経過	(59)
3. 調査の結果	(60)
4. まとめ	(68)

力石遺跡

1. 遺跡の位置と立地	(73)
2. 調査の経過	(73)
3. 調査の結果	(75)
4. まとめ	(78)

落合Ⅰ遺跡

I. 落合Ⅰ遺跡の位置と地形	(81)
II. 調査の方法と経過	(81)
III. 調査の結果	(82)
1. 基本層位	(82)
2. 発見された遺構と遺物	(85)
IV. まとめと考察	(143)
1. 遺構について	(143)
2. 土器類について	(148)
3. まとめ	(149)

鶴羽衣遺跡

1. 遺跡の位置と環境	(157)
2. 調査の方法と経過	(157)
3. 調査の結果	(158)
4. まとめ	(173)

鶴羽衣台遺跡

1. 遺跡の位置と環境 (177)
2. 調査の方法と経過 (178)
3. 調査の結果 (178)
4. まとめ (182)

瀬谷子遺跡

1. 遺跡の位置と環境 (185)
2. 調査の方法と経過 (185)
3. 調査の結果 (185)
4. まとめ (192)

五十瀬神社前遺跡

1. 遺跡の位置と立地 (197)
2. 調査の方法と基本層位 (197)
3. 発見された遺構と出土遺物 (199)
4. 遺物 (214)
5. 考察 (237)

谷地遺跡

1. 遺跡の位置と環境 (245)
2. 調査の方法と経過 (245)
3. 調査の結果 (245)
4. 考察とまとめ (264)

写真図版

- 一関、江刺地区空中写真 (267)
- 機織山Ⅰ遺跡 (271)
- 機織山Ⅱ遺跡 (279)
- 中屋敷遺跡 (289)
- 力石遺跡 (295)

落合 I 遺跡	(299)
鶴羽衣遺跡	(323)
鶴羽衣台遺跡	(333)
瀬谷子遺跡	(339)
五十瀬神社前遺跡	(345)
谷地遺跡	(357)
• 発掘調査担当者および協力機関	(365)
• 発掘調査地元作業員名簿	(365)
• 整理作業員名簿	(366)

序 文

1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関係する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約101 kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議・分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは、1. 発掘調査実施前の経過、2. 年度別発掘調査の経過、3. 整理・報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめた。

(1) 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年5月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工事事務局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連する範囲内での遺跡についての情報を提出することとした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱をし市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約101 kmを巾2 kmの範囲で実施することとし、11月20日より約2ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として嶋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当たった。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に20 m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査を嶋・菊地文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2) 発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障がある

ということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入っても発掘調査を継続せざる得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多々あった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2ケ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工事局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月18日 3遺跡

矢巾町所在の下赤林Ⅰ遺跡、下赤林Ⅲ遺跡、高畑遺跡を調査した。この調査は用地未買収地の調査であり国鉄が地権者より発掘承諾書を得ての調査であった。

昭和48年度 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日 8遺跡

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るため新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員、岩手大学生、京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼失竪穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、降雪と炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となった。

昭和49年度 調査員8名、補助員5名、調査期間4月8日～12月20日 17遺跡

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区の調査は北上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間どり多くの時間を費やした。

昭和50年度 調査員8名、補助員7名、調査期間4月10日～2月21日 15遺跡

調査地区が、一関市、江刺市、北上市、花巻市、紫波郡紫波町、都南村、盛岡市と広範囲となり調査班相互の連絡、調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町町分の新幹線建設予定地内にあったイチヨウの大木の根元から一字一石経を地元民である佐藤忠二・佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代・平安時代・近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落跡となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒中で2月末までの調査となり、遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確証はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもったこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリッド方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代、早期・中期、平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。なお、年度末人事異動で48年度より調査を担当した蜂谷艸平氏が陸前高田市立高田小学校へ転勤された。

昭和51年度 調査員7名、補助員8名、調査期間4月9日～12月23日 9遺跡

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓壙群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないこととなった。48年度から新幹線班で調査担当した穴倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

昭和52年度 調査員6名、補助員7名、調査期間4月11日～12月15日 1遺跡

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓壙群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において、図面、写真、遺物等の整理を一部実施した。

(3) 整理、報告書作成の経過

昭和53年度 調査員6名、補助員12名

53、54年度の2年度にわたる本格的な整理事業に入った。本年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施した。報告書は3分冊とし、1分冊は一関、江刺地区（10遺跡）、2分冊は北上、花巻、石鳥谷地区（11遺跡）、3分冊には紫波、矢巾、都南、盛岡地区（19遺跡）を収録した。

2. 調査の方法

各遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

調査対象範囲の選定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の2点（東京基点の距離程が明示してあるもの）を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし、3 m単位に割付け、30 mで1地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せで呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

発掘の方法

(1) 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるため、原則として3 m × 3 mのグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的内容と分布関係などを究明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

(2) 遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

(3) 遺物の取り上げ

a 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

b 出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものについては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

(4) 実測図の作成

断面図 断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は $1/20$ であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて $1/10$ などの縮尺を用いた。各層における土色、土性、混入物、堅さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図 平面図は調査区全域を表現したもの、遺構や遺物包含層での遺物の出土状況を記録

するための部分的なものがある。原図の縮尺は $\frac{1}{20}$ を原則としたが、必要に応じて $\frac{1}{10}$ などの縮尺を用いた。測量方法は、遣り方測量により作図した。

(5) 写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真（スライド用）、6×7cmモノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

(6) その他の記録

調査記録として、調査日誌、業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌、作業記録、遺構カードを備え、記録した。

(第I表) 第1分冊収録遺跡基準線方向角

(N…座標北)

遺 跡 名	原 点 距 離 程	原 点 間 方 向 角
機織山Ⅰ遺跡	402.398 km - 402.420 km	N - E 19° 00' 00"
機織山Ⅱ遺跡	402.520 km - 402.559 km	N - E 19° 00' 00"
中屋敷遺跡	429.960 km - 430.000 km	N - W 15° 48' 13"
力石遺跡	430.860 km - 430.960 km	N - W 18° 46' 57"
落合Ⅰ遺跡	431.500 km - 431.600 km	N - W 27° 56' 43"
鶴羽衣遺跡	437.580 km - 437.620 km	N - W 37° 07' 17"
鶴羽衣台遺跡	437.900 km - 437.940 km	"
瀬谷子遺跡	438.060 km - 438.080 km	"
五十瀬神社前遺跡	438.280 km - 438.300 km	"
谷地遺跡	438.680 km - 438.700 km	"

3. 整理の方法

(1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。

第一原図は、点検、修正の上、登録番号を付し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

(2) 遺物整理の方法

遺物のうち、発掘現場で接合作業まで進んだものもあるが、ほとんどは分室で進めた。これらの遺物は、洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構、地区名、層位、遺物番号を付し、接合、復元作業を進めた。その後、分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本の作成をし、写真撮影をした。

(3) 写真整理の方法

写真は遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

4. 遺物保存処理の方法

本書収録の遺物のうち、鉄製品（鋤先、紡錘車など）は、奈良市元興寺文化財研究所に委託し、樹脂含浸による保存処理をおこなった。

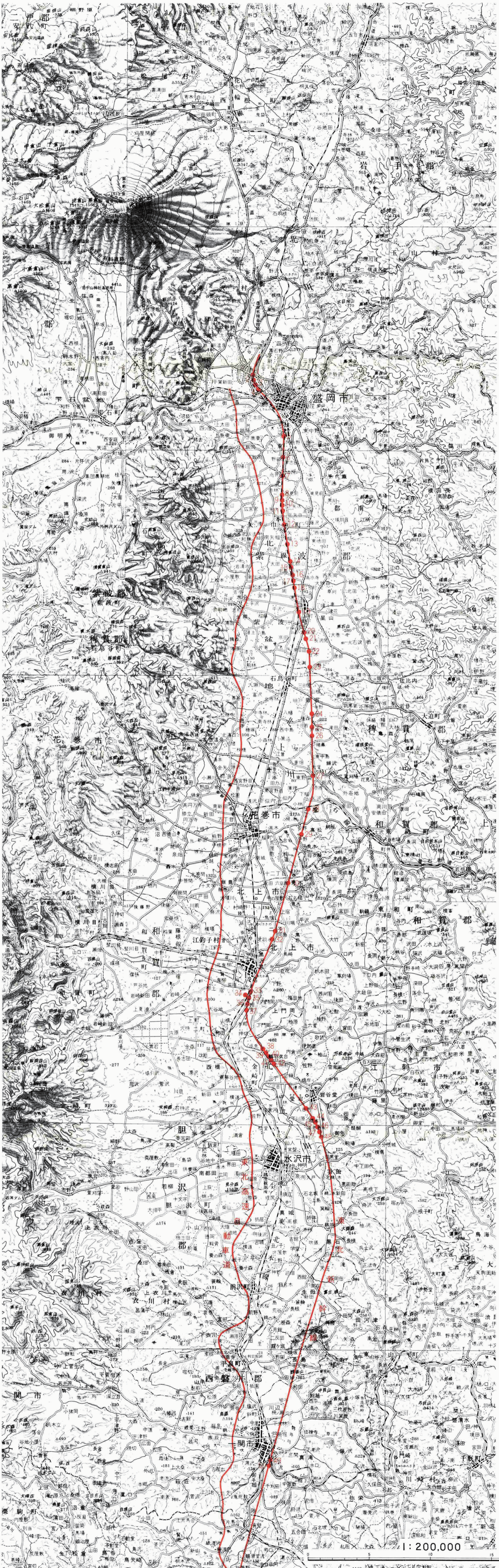
5. 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

- ・ 現地説明会
- ・ 現場だよりの発行
- ・ 関係機関への資料提供

所在地	遺跡名	調査対象面積	調査期間	記録報告書 No
一 関市	機織山 I 遺跡	3,500 ㎡	50. 9. 30 ~ 50. 11. 29	I
"	機織山 II 遺跡	1,470	50. 9. 22 ~ 50. 11. 11	"
江 刺市	中屋敷 遺跡	5,000	48. 12. 10 ~ 48. 12. 22	"
"	鴻ノ果館 遺跡	6,400	49. 6. 24 ~ 49. 10. 23	V
"	力石 遺跡	2,240	49. 4. 8 ~ 49. 4. 18	I
"	落合 I 遺跡	2,560	49. 4. 18 ~ 49. 8. 6	"
"	落合 II 遺跡	2,420	49. 4. 8 ~ 49. 8. 8	VI
"	宮地 遺跡	3,600	50. 9. 1 ~ 51. 7. 26	IV
"	鶴羽衣 遺跡	1,280	49. 4. 9 ~ 49. 5. 14	I
"	鶴羽衣台 遺跡	960	49. 4. 19 ~ 49. 5. 10	"
"	瀬谷子 遺跡	2,400	49. 5. 8 ~ 49. 6. 19	"
"	五十瀬神社前 遺跡	1,600	49. 6. 4 ~ 49. 7. 30	"
"	谷地 遺跡	2,720	49. 7. 25 ~ 49. 9. 3	"
北上市	八木畑 遺跡	800	49. 11. 28 ~ 49. 12. 9	II
"	松ノ木 遺跡	480	50. 12. 16 ~ 50. 12. 25	"
"	西野 遺跡	5,000	50. 9. 1 ~ 50. 12. 25	"
"	南館 遺跡	4,660	48. 5. 1 ~ 48. 7. 26	VI
"	鬼柳西裏 遺跡	4,400	50. 9. 3 ~ 51. 12. 15	"
"	野田 I 遺跡	3,000	51. 8. 6 ~ 51. 8. 28	II
"	野田 II 遺跡	1,920	50. 9. 1 ~ 50. 9. 19	"
"	堀ノ内 遺跡	2,400	50. 7. 7 ~ 50. 8. 30	"
花巻市	高松 遺跡	2,000	50. 6. 4 ~ 50. 7. 9	"
"	八幡 遺跡	1,800	51. 10. 7 ~ 51. 11. 25	"
石鳥谷町	高畑 遺跡	2,720	49. 10. 25 ~ 49. 12. 20	V
"	大明神 遺跡	3,680	49. 10. 25 ~ 49. 11. 22	II
"	大曲 遺跡	1,920	49. 10. 25 ~ 49. 12. 12	"
"	幅 遺跡	2,400	49. 11. 18 ~ 49. 11. 29	"
紫波町	野上 遺跡	2,400	49. 10. 17 ~ 49. 10. 29	III
"	西田 遺跡	29,600	50. 4. 26 ~ 52. 12. 15	VII
"	大銀 遺跡	960	50. 4. 10 ~ 50. 4. 26	III
"	大日堂 遺跡	2,240	50. 5. 16 ~ 50. 6. 10	"
"	田頭 遺跡	1,760	49. 9. 5 ~ 49. 10. 16	"
"	杉ノ上 III 遺跡	3,402	48. 10. 16 ~ 48. 12. 28	"
"	杉ノ上 II 遺跡	4,276	48. 10. 16 ~ 49. 1. 29	"
"	杉ノ上 I 遺跡	7,200	48. 7. 18 ~ 48. 10. 16	"
"	古館駅前 遺跡	3,360	48. 10. 1 ~ 48. 11. 30	"
"	古館橋 遺跡	4,200	48. 9. 18 ~ 48. 12. 8	"
矢巾町	白沢 遺跡	3,726	48. 7. 20 ~ 48. 9. 29	V
"	又兵衛新田 遺跡	2,080	49. 10. 18	III
"	高畑 遺跡	640	47. 11. 24 ~ 47. 12. 2	"
"	下赤林 I 遺跡	2,720	47. 10. 25 ~ 47. 12. 16	"
"	下赤林 II 遺跡	3,200	48. 11. 13 ~ 48. 12. 19	"
"	下赤林 III 遺跡	2,560	47. 12. 2 ~ 47. 12. 18	"
都南村	下永井 遺跡	1,760	50. 4. 10 ~ 50. 4. 24	"
"	津志田 遺跡	4,800	50. 4. 23 ~ 50. 5. 15	"
盛岡市	南仙北 遺跡	800	50. 4. 10 ~ 50. 4. 25	"
"	厨川柵擬定地	4,600	51. 5. 17 ~ 51. 10. 16	"
"	前九年 I 遺跡	5,150	51. 4. 23 ~ 51. 6. 3	"
"	前九年 II 遺跡	3,400	51. 4. 19 ~ 51. 6. 2	"
"	長畑 遺跡	6,370	51. 4. 9 ~ 51. 5. 15	"

* 杉ノ上 I、II、III 遺跡は I 遺跡として登録してある。



- 1.長 畑遺跡
- 2.前九年・Ⅱ遺跡
- 3.前九年・Ⅰ遺跡
- 4.厨川柵跡遺跡
- 5.南仙北遺跡
- 6.津志田遺跡
- 7.下永井遺跡
- 8.下赤林・Ⅲ遺跡
- 9.下赤林・Ⅱ遺跡
- 10.下赤林・Ⅰ遺跡
- 11.高 畑遺跡
- 12.又兵衛新田遺跡
- 13.白 沢遺跡
- 14.古館橋遺跡
- 15.古館駅前遺跡
- 16.杉ノ上・Ⅰ遺跡
- 17.杉ノ上・Ⅱ遺跡
- 18.杉ノ上・Ⅲ遺跡
- 19.田 頭遺跡
- 20.大 堂遺跡
- 21.大 銀遺跡
- 22.西 田遺跡
- 23.野 上遺跡
- 24.幅 遺跡
- 25.大 曲遺跡
- 26.大明神遺跡
- 27.高 畑遺跡
- 28.八 幡遺跡
- 29.高 松遺跡
- 30.堀ノ内遺跡
- 31.野田・Ⅱ遺跡
- 32.野田・Ⅰ遺跡
- 33.鬼柳西裏遺跡
- 34.南 館遺跡
- 35.西 野遺跡
- 36.松ノ木遺跡
- 37.八 木畑遺跡
- 38.谷 地遺跡
- 39.五十瀬神社前遺跡
- 40.瀬 谷子遺跡
- 41.鶴羽衣台遺跡
- 42.鶴 羽衣遺跡
- 43.宮 地遺跡
- 44.落合・Ⅱ遺跡
- 45.落合・Ⅰ遺跡
- 46.力 石遺跡
- 47.鴻ノ巣館遺跡
- 48.中 屋敷遺跡
- 49.機織山・Ⅱ遺跡
- 50.機織山・Ⅰ遺跡

(第1図) 東北新幹線関係遺跡位置図

1 : 200,000

20 キロメートル

本 文

一 関 地 区 の 概 観

1 一関地区の地形と地質

機織山(I)、(II)遺跡は一関市機織山地内にある。一関市は北上川の支流磐井川の流域に位置し宮城県と隣接する。

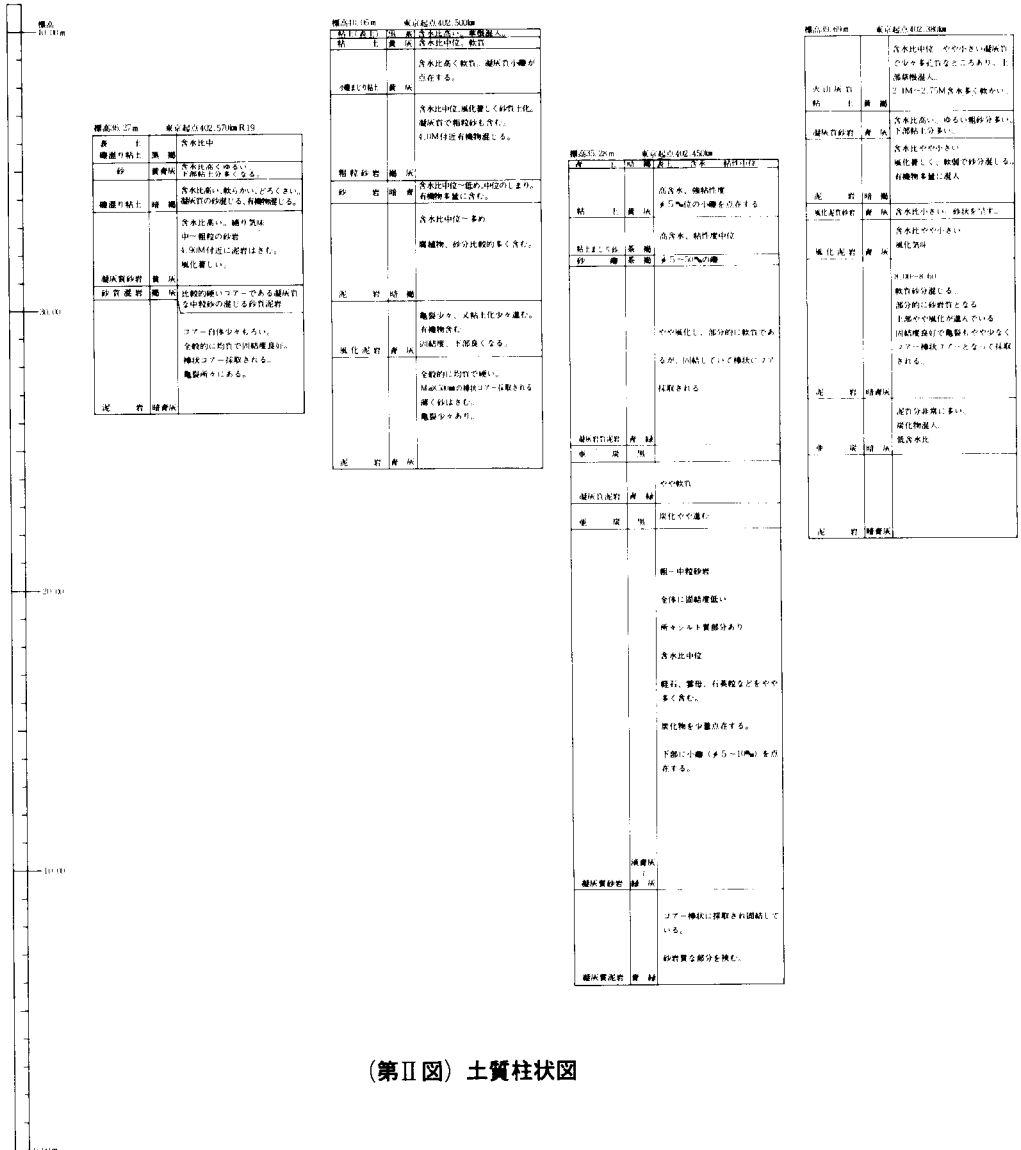
北上川は大小河川を支流にもち岩手県の中央部を蛇行しながら南流し、衣川を過ぎたところから大きく東へと曲流しやがて一関の東北、柵ノ瀬へと達する。この付近で西方からの磐井川を合流した北上川は狐禅寺狭窄部へと突入し、丘陵地を深く掘りこんだ形で南下する。北上川と磐井川の合流点附近は海拔僅か17m程と低く、下流は狭窄部があるため洪水の常襲地帯であり、そのため一関の市街は磐井川を3～4km程さかのぼった所にある。

この磐井川に沿っては段丘が形成されており、市街地の西方では最も広い磐井川段丘があり、この地表面は北上川低地面に連続してしまい、明瞭な境界は認められない。これ等の低地、段丘を取りまくようにして幾つかの丘陵や山地が広がる。このうち一関の市街地の南側に広がる有壁丘陵は最も広い範囲を占め、宮城県との県境をなしている。

この丘陵は100～200mの高度を保ち、定高性はかなりよい。起伏量は小さく、特に東部程小さい。従って緩斜面域も広く耕地として利用されているところが多い。有壁丘陵の特徴は東西方向に伸びる主分水界が著しく南に片寄っており、分水界から北に伸びる谷は南に比してはるかに長い。水系の点から考えると、この有壁丘陵はほぼ一連の地形区のようにみえるが、起伏量、斜面型等からみると宮城県境にその源をもち、北上川に注ぐ吸川により東西に細分される。国鉄東北線も又ここを走る。起伏量は西部は100～200mであり、これに対して東部は、100m前後と小さく谷底平野の占める割合も大きい。東部丘陵は開析が進んでおり、西部の丘陵は現在開析中の段階である。

機織山の遺跡はこの有壁東部丘陵の西端部に立地し、国鉄東北線を臨んだところに位置している。遺跡の立地するこの丘陵を構成するのは第三紀の金沢層であり、凝灰岩、砂岩、亜炭を主体に構成され、一部に礫岩層を挟在する。この第三紀層を覆って沢部では崖錐性堆積物層および河床堆積物層、表土層より構成され、又丘陵部では崖錐性堆積物層、表土層より構成されている。

なお、国鉄が新幹線工事のため実施したボーリング結果による遺跡附近の上質柱状図は別表の通りである(第Ⅱ図)。

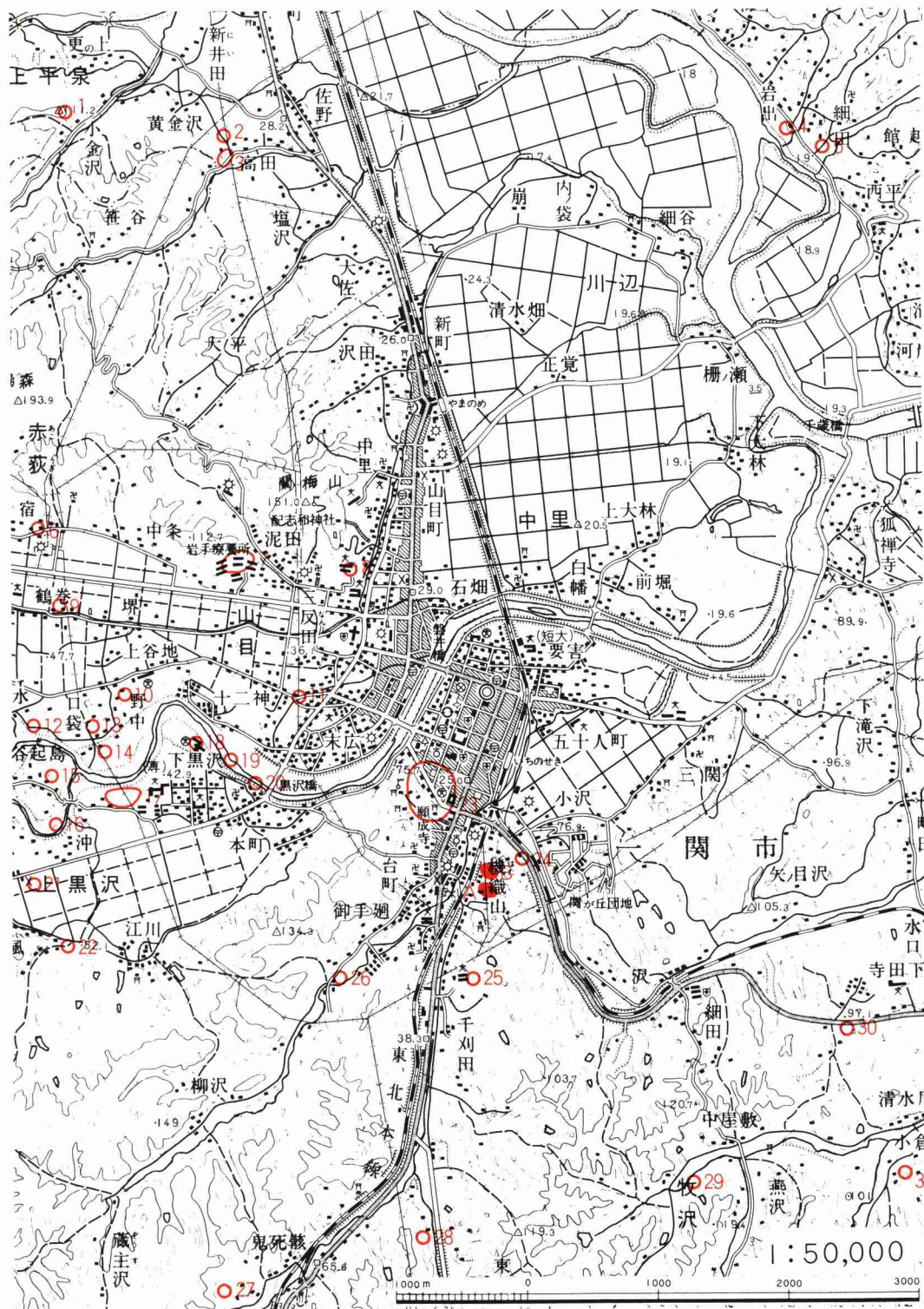


(第II図) 土質柱状図

2 周辺の遺跡 (第III図)

機織山地内に所在する周知の遺跡としては、機織山(I)遺跡、(II)、(III)の3遺跡であり、機織山(I)遺跡より南1 kmには土師器、須恵器の出土をみる中田遺跡がある。

一関周辺においては磐井川に沿った段丘上に遺跡が集中する。このなかでは縄文時代晚期より弥生時代にかけての遺跡が目立ち、晩期の土器を出土する十二神遺跡、晩期から弥生時代の



A.機織山I遺跡 B.機織山II遺跡

(第Ⅲ図) 遺跡の位置と周辺の遺跡

谷起島遺跡、更には弥生式土器と土師器の出土をみる野中遺跡、口袋遺跡等がある。特に谷起島出土の土器は「谷起島式土器」の名で知られ、一関市教育委員会の手で発掘調査もされている。^{注1)}

以上の他に機織山遺跡群の立地している有壁丘陵には中世の館跡も幾つか知られており、一部は東北自動車道関連遺跡として調査されている。^{注2)} また山目の国立岩手療養所地内には昭和29年、岩手県の指定史跡となった泥田廃寺跡があり、昭和48～50年にかけての三次に亘る調査の結果、礎石建物、堀立建物跡の遺構が確認され、土師器、須恵器、布目瓦等の遺物も出土している。^{注3)} なお、市街地の中心部には一関城址がある。

(第Ⅲ表) 機織山Ⅰ、Ⅱ遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	小金沢ヒクニ寺跡		17	下モ下釜遺跡	
2	片岡遺跡	奈良	18	釜淵遺跡	
3	白幡神社遺跡	平安	19	工業高校隣接遺跡	
4	和田遺跡	縄文(晩期)	20	西光寺哀遺跡	縄文(中期)
5	細田遺跡	弥生	21	萩馬場遺跡	
6	磐基駅遺跡		22	鈴ヶ沢館遺跡	
7	泥田廃寺遺跡	平安	23	一関城跡	
8	臥牛館遺跡		24	機織山Ⅲ遺跡	平安
9	弥悦塔遺跡		25	中田遺跡	平安
10	野中遺跡	弥生、奈良?	26	宮沢遺跡	縄文
11	十二神遺跡	縄文(晩期)	27	西沢遺跡	平安
12	松ノ木遺跡		28	内野館遺跡	
13	日町遺跡		29	井戸沢Ⅱ遺跡	縄文(晩期)
14	口袋遺跡	弥生	30	水口遺跡	
15	小松柵遺跡		31	柴沢遺跡	平安
16	谷起島遺跡	縄文(晩期)弥生			

注 泥田廃寺遺跡：昭29県指定、昭48(第一次調査)、昭49(第二次)、昭50(第三次)
 谷起島遺跡：昭51(第一次発掘調査)

注1) 林謙作 他「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」一関市教育委員会 昭52
 小田野哲憲

注2) 「鈴ヶ沢遺跡」昭51年岩手県教育委員会発掘調査現地説明会資料

注3) 国生尚「泥田廃寺第一次調査概報」一関教育委員会 昭49

” ” 昭50

” ” 昭51

参考文献

岩手県教育委員会(昭49) 埋蔵文化財分布地図

岩手県(1978) 土地分類基本調査(一関)

国鉄盛岡工事局(昭48) 東北新幹線東京起点 自399 K 960 M 間地質調査報告書
 至402 K 650 M

はた おり やま
機 織 山 I 遺 跡

遺 跡 記 号 : HOI

所 在 地 : 一 関 市 機 織 山 92-5 他

調 査 期 間 : 昭 和 50 年 9 月 30 日 ~ 11 月 29 日

調 査 対 象 面 積 : 3500m²

平 面 測 量 基 準 点

東 京 基 点 : 402.420km (BA50)

基 準 高 : 海 抜 41.00m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅲ図P.13）

機織山 I 遺跡は一関市機織山地内に所在し、国鉄東北本線一関駅より南約 1 km の本線東側の丘陵の一部に位置する。

本遺跡の標高は約 39～40 m で、現地形は東から西に向かって緩傾斜を示し、西端は崖となって低地面に接続する。低地面との比高は約 10 m を測る。遺跡の周辺は吸川に注ぐ数多くの小さな沢により開析されている。遺跡の地目は草地、畑それに一部宅地となっている。しかし近年は宅地造成等の開発により、地形の変容が激しい。

なお、遺跡からは一関の市街地が眼下に一望でき、西向い約 1 km に一関城跡をみる。

2. 調査に至る経過

この遺跡は慶長 12 年（1607 年）、当時一関の城主であった留守家 15 代伊達宗利が、父政景の遺命により、一関機織山に創建した大安寺跡といわれるものである。大安寺は元和元年（1615 年）留守家の移封に従って金ヶ崎に移り、その後水沢に移転している。しかし文政 4 年から、安政 6 年までに三度も火災にあい、古文書等の記録を失い、過去帳までも焼失している。^{注 1)} このような事から大安寺の創建当時を知る資料は何一つ現存せず、「伝大安寺跡」と称される所以もここにある。場所についても機織山の西麓^{注 2)}と記録されているだけで建物等については一切記されていない。

大安寺の創建を命じた政景は伊達 15 代晴宗の三男で、政宗の叔父に当たる。永録 10 年（1567 年）3 月、19 歳で留守家を継ぎ、高森城に居た。慶長 9 年（1604 年）10 月、清水館より一関城主に所替えとなり、一関在城中の慶長 12 年 2 月 3 日、59 歳で逝去した。遺言により機織山の麓^{注 3)}に葬られ、大安寺殿と号し、法名を「高嶽玄登大居士」と称し、その時殉死者 4 人あった。

国鉄東北線東側の小高い丘に墓碑と五輪塔が建つ留守政景と殉死者の墓地があり、その東側の平坦地が寺跡と伝えられ、現在畑と宅地になっている。この墓地の部分を残して東側が新幹線ルート^{注 3)}の範囲になったため今回の調査に至った。

なお、昭和 46 年のルート内の遺跡分布調査の際、当遺跡からは遺物等の表面採集はなかった。

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅲ図P.13）

機織山 I 遺跡は一関市機織山地内に所在し、国鉄東北本線一関駅より南約 1 km の本線東側の丘陵の一部に位置する。

本遺跡の標高は約 39～40 m で、現地形は東から西に向かって緩傾斜を示し、西端は崖となって低地面に接続する。低地面との比高は約 10 m を測る。遺跡の周辺は吸川に注ぐ数多くの小さな沢により開析されている。遺跡の地目は草地、畑それに一部宅地となっている。しかし近年は宅地造成等の開発により、地形の変容が激しい。

なお、遺跡からは一関の市街地が眼下に一望でき、西向い約 1 km に一関城跡をみる。

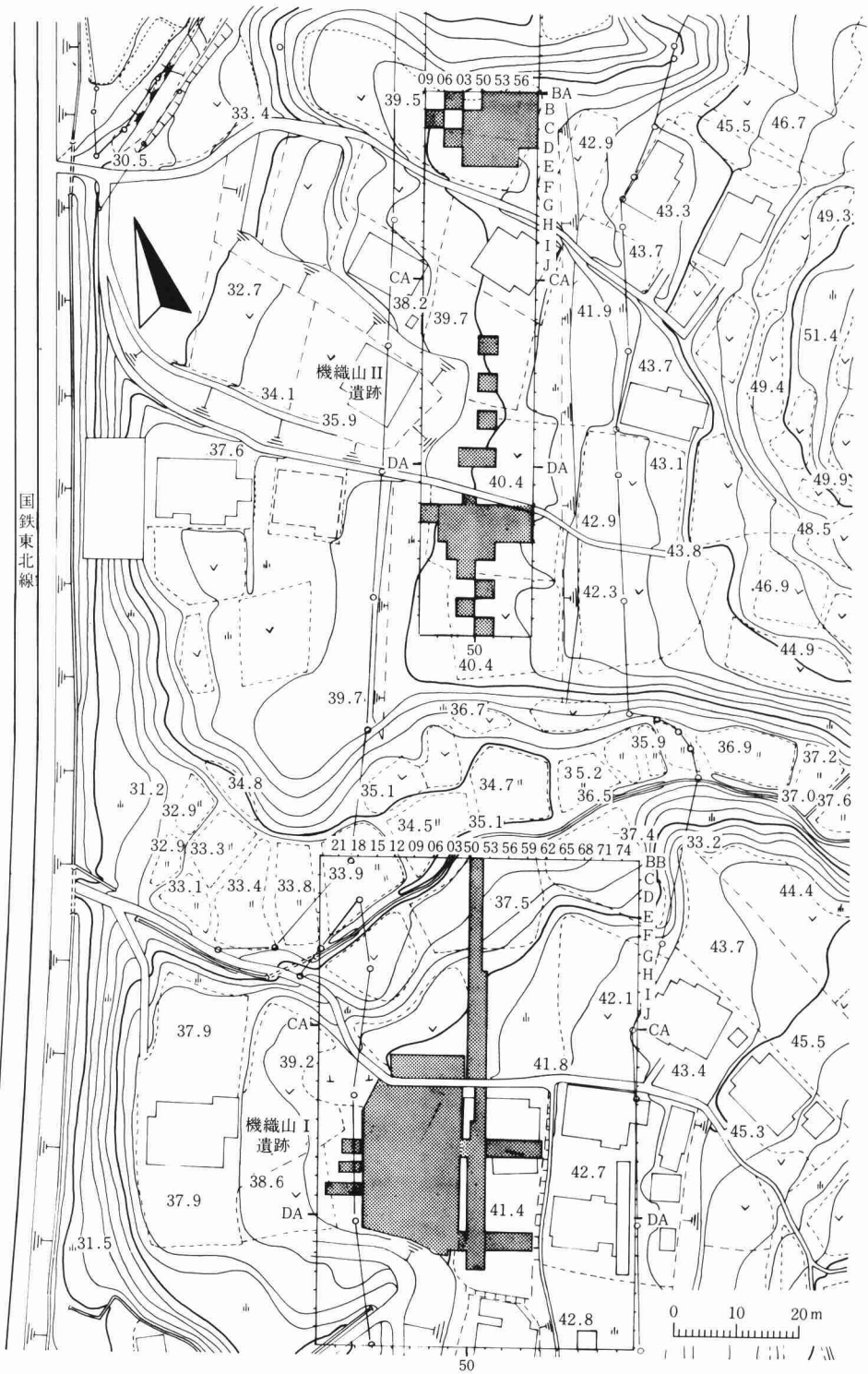
2. 調査に至る経過

この遺跡は慶長 12 年（1607 年）、当時一関の城主であった留守家 15 代伊達宗利が、父政景の遺命により、一関機織山に創建した大安寺跡といわれるものである。大安寺は元和元年（1615 年）留守家の移封に従って金ヶ崎に移り、その後水沢に移転している。しかし文政 4 年から、安政 6 年までに三度も火災にあい、古文書等の記録を失い、過去帳までも焼失している。^{注 1)} このような事から大安寺の創建当時を知る資料は何一つ現存せず、「伝大安寺跡」と称される所以もここにある。場所についても機織山の西麓^{注 2)}と記録されているだけで建物等については一切記されていない。

大安寺の創建を命じた政景は伊達 15 代晴宗の三男で、政宗の叔父に当たる。永禄 10 年（1567 年）3 月、19 歳で留守家を継ぎ、高森城に居た。慶長 9 年（1604 年）10 月、清水館より一関城主に所替えとなり、一関在城中の慶長 12 年 2 月 3 日、59 歳で逝去した。遺言により機織山の麓^{注 3)}に葬られ、大安寺殿と号し、法名を「高嶽玄登大居士」と称し、その時殉死者 4 人あった。

国鉄東北線東側の小高い丘に墓碑と五輪塔が建つ留守政景と殉死者の墓地があり、その東側の平坦地が寺跡と伝えられ、現在畑と宅地になっている。この墓地の部分を残して東側が新幹線ルート^{注 3)}の範囲になったため今回の調査に至った。

なお、昭和 46 年のルート内の遺跡分布調査の際、当遺跡からは遺物等の表面採集はなかった。



(第1図) 機織山(I), (II)遺跡グリッド配置図

3. 調査の方法と経過（第1図）

調査は雑物撤去とグリッド設定にかかわる測量より着手した。グリッド設定に関しては新幹線の中心杭東京起点 402.398 kmと 402.420 kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、402.420 kmを本遺跡の基準点（BA50）とした。このBA50を基点にして北にA、南にB、Cの3ブロックを設定し、一辺3mのグリッドを定めた。

遺跡の現状は寺院跡を残す遺構は認めたいが、調査区の西に接して盛土があり、政景の法名が刻字されている墓石と五輪塔3基が現存している。調査は大安寺にかかわる建物跡の確認にその視点をおき、調査の方法はグリッド方式を基本にして、一部トレンチ方式を併用した。

まず東側の一段高い整地面（一部宅地跡）に南北30m、巾3mのトレンチ1本、それに直交する長さ13m、巾3mの東西トレンチ2本を入れ、寺院建築に伴う資料を得るべくつとめた。しかし基壇版築等にかかわるものとはなり得ず、後世における宅地造成時の整地層であった。次にA～Bブロックにかけての北斜面には長さ30m、巾3mのトレンチを入れ、Cブロックの平坦地はグリッド方式により調査を進行した。

その結果、北側斜面は自然の崖で何等人為的なものは認められず、結局平坦面に多くのピットを検出し、結果的にはCブロックは全面発掘となった。なお、作業は機織山Ⅱ遺跡と一部並行して実施し、地権者の了解を得て西側の一部ルート外も調査した。

4. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位

層位については宅地造成等に伴う削平や盛土等による移動が激しく一様ではないが、一応の標準的なものとしては次のようになる。

第Ⅰ層．表土で砂粒を若干含んだ粘土質シルトで草根混入。

第Ⅱ層（褐色土）．粘土質シルトで炭化粒子を少量含む。

第Ⅲ層（黄褐色土）．火山灰質粘土、凝灰質で小礫が点在する。

このうち第Ⅱ層が遺構の検出面であるが、削平や耕作等のため第Ⅱ層を残す部分が少なく、第Ⅲ層（地山面）が遺構検出面となっている。

〔2〕 発見された遺構と遺物（第2図）

調査の結果発見された遺構は多数のピット群と溝2本である。

（1） ピット群

B区の南半分からC区の北半分の長さ25m、巾20m程の範囲に約130個余りのピットが検出された。平面形はいずれも35×45cm程のやや隅丸方形で、検出面からの深さは約10～15cmを測る。埋土は褐色の単層で地山の黄褐色土、更には若干の炭化物粒子の混入がみられる。

これ等のピット群は南北方向は約0.9m（3尺）の間隔ではほぼ直線的に並ぶが、東西方向はかなりのばらつきがあり、並びからはずれる。ピット群の一部は溝と重複しているが、その新旧関係は不明である。ピット群相互の重複はない。出土遺物は埋土より須恵器の小破片1、それに陶器の細片3片を数える。

（2） 溝

B G 03溝

B G 03溝はピット群の東端の列に並行、又は一部重複して南北に走り、C E 03グリッドで自然に消滅していく。全長24m、巾1m内外で検出面からの深さは約20cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は褐色の単層で、遺物は皆無である。

B F 15溝

B F 15溝はピット群の北西の隅に検出され、カーブを描きながらB H 18グリッドから調査区域外へと延びている。検出された全長は約8m、巾1.5m内外、検出面からの深さは25～30cm程で皿状の断面を呈する。遺物は全く出土しない。

5. 考察とまとめ

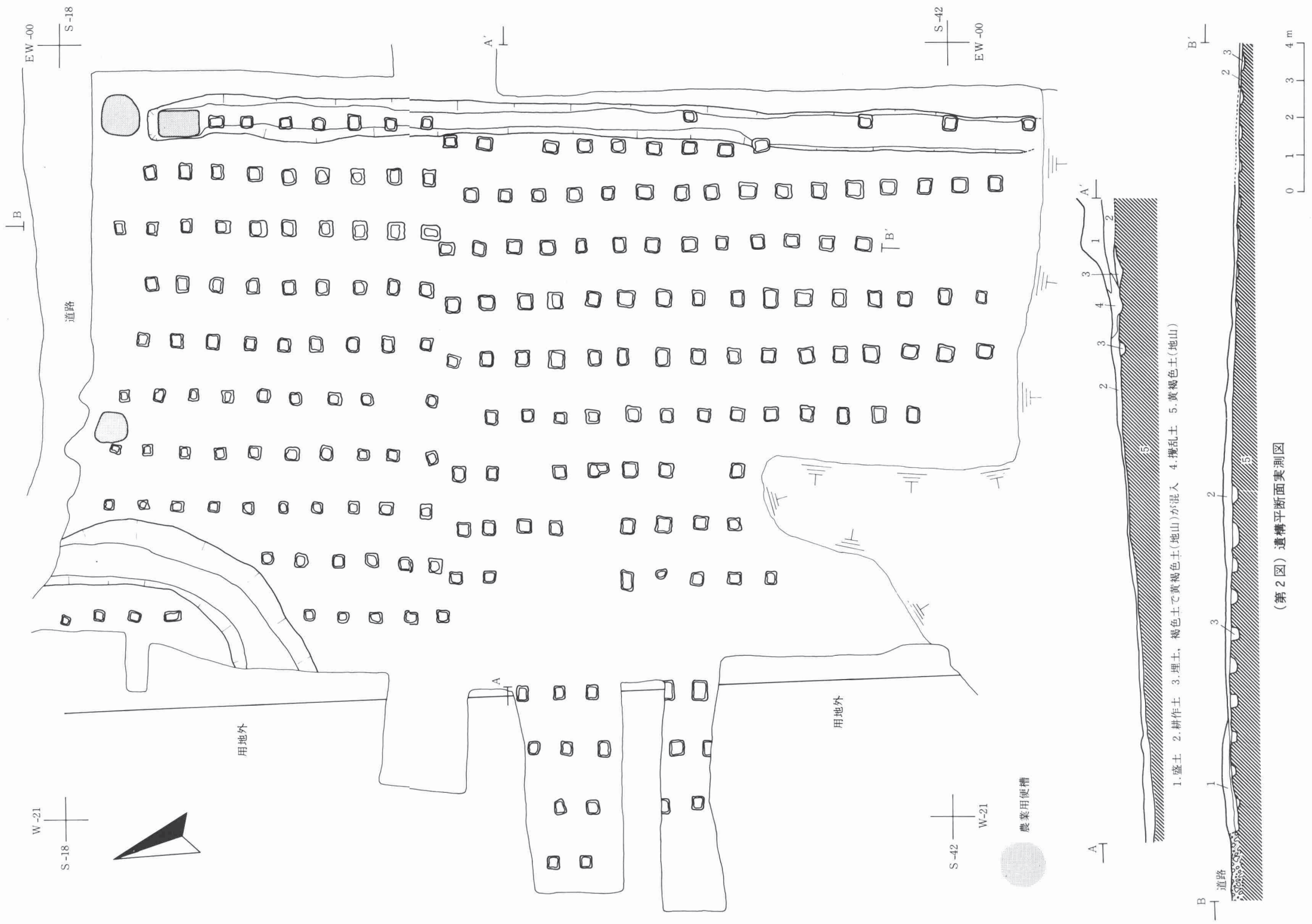
検出された約130個余りのピット群は南北方向は約3尺間隔ではほぼ直線的に並ぶが、東西方向は雑然として、ばらつきが目立つ。これ等のピット群を間尺及びその並び方等の相互関係から若干の吟味を加えると次の6つにグルーピングが可能である（第3図）。

第1. 北東隅で東西6m、南北7.5m（4×8間）の範囲におさまるもの。

第2. 第1の西側に東西4.5m、南北8.4m（3×9間）の範囲におさまるもの。

第3. 第2の南で南西の一部が崖で欠けてはいるが、東西7.8m、南北14.2m（5×15間）の範囲におさまるもの。

第4. 第3の東側とB G 03溝の間のピット群で、南北方向は直線的に並ぶが、東西は並ばない。

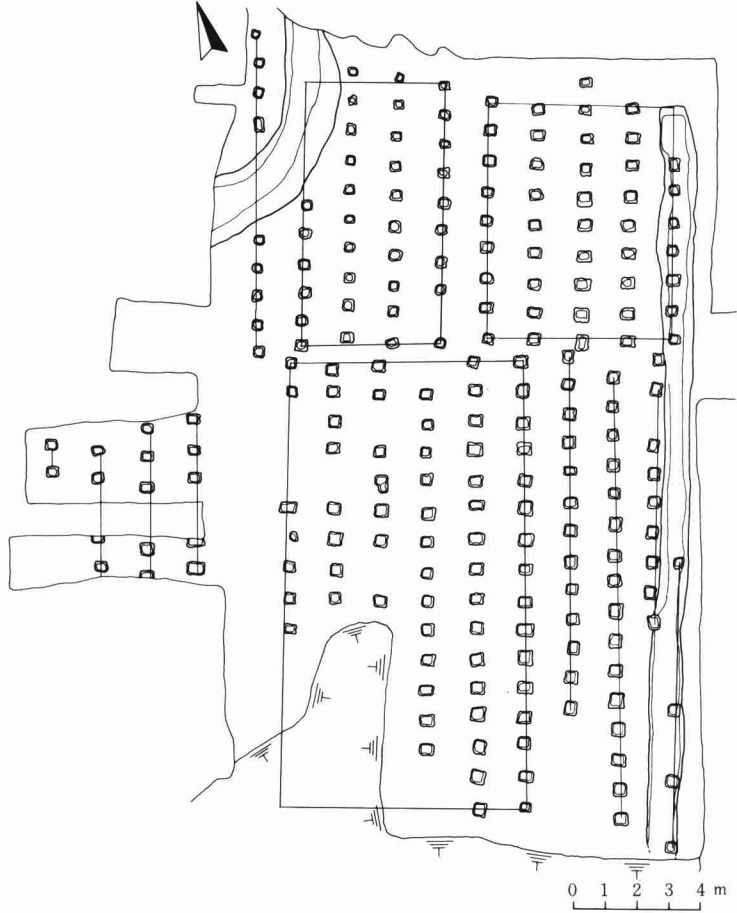


(第2図) 遺構断面実測図

第5. 第3の西側で一部調査区域外に延びているもので、これも南北方向だけが並ぶ。

第6. 一部BF15溝と重複している9個のピットで、南北1例だけのもの。

次にこのピットの間隔から考えてみる。一部欠損しているピットも考え合せると東西約1.5m(約5尺)、南北0.9m(約3尺)に統一される。即ちこれ等ピット間の間尺がほぼ一定になる。



(第3図) ピット群の配列関係図

以上の結果をまとめると次のようになる。

- a. 調査結果は基壇らしきものも認められず、礎石、根石等の存在も全くなくその痕跡もなかった。
- b. 検出されたピットの掘り込みは約15cmと極めて浅く、掘立の建物ともいえない。
- c. 仮に浅い柱穴とすると、全てが束柱程度しか考えられず、中心になる柱穴は不明であり建造物として成り立つには問題がある。
- d. 仮に何等かの建物跡とすると4～5棟の南北棟となり、時期的な差が考えられる。
- e. 時期決定資料がない。

次に当遺跡調査の視点である大安寺との関連で若干の考察を加えてみたい。大安寺は慶長12年(1607年)機織山地内に建てられた禅宗寺院であり、政景がこの地に葬られた。大安寺由緒^{注4)}によれば、

宗旨、 臨済宗派、本山は京都花園の勅願寺正法山妙心寺。

—機織山 I 遺跡—

本尊、寺号 観世音菩薩像を本尊とし寺号機織山^{キシヨクザン}大安寺と称した。

開基、開山 慶長12年春留守家15代宗利公の開基になり、松島端巖円福寺の実堂中禪師を請うて開山した。

墓地 慶長12年2月留守家14代政景公逝去せられ、同地に葬る。(以下略)

とある。

墓地といわれる場所には政景の法名が刻字された碑と五輪塔が現存する。しかしこの墓碑の建立については明確でない。大安寺由緒によれば第八世芝巖茲靈禪師が元禄16年(1703年)一関機織山の開山塔を拝請しており、現存する墓碑はこの時に建てられたものと考えられる。^{注5)}政景が葬られてからおよそ100年後である。

墓地と建物については記録による資料は焼失により現存せず、知る事はできないが、墓は原則として寺院の北側に設け、南側や前面には建てない。現在墓碑のある場所と併せ地形的に考えるなら、今回の調査区域を含め、それに続く西緩斜面、更に南側の平坦地には建物跡の存在が可能な場所ではある。然るに当調査区に検出されたピット群は前述の如く大安寺の建物の一部にするには問題がある。たとえ簡単な建物を想定しても南北棟となり、墓地は建物の前面になる。

政景は19歳で留守家を相続して以来、59歳で死去するまで、その殆どが戦陣に明け暮れた一生と云ってもよい。世の中が安泰になってきたとはいってもまだ争いの絶えない時代であった。従って最初から伽藍配置の整然としたものではなかったかも知れない。しかし伊達一門である城主を考えると、基壇の版築、礎石等の使用は当然である。大安寺と同じ京都妙心寺の末寺といわれる遠野の東禅寺も基壇を築き、根石、礎石をおいた伽藍配置である。^{注6)}

たしかに大安寺の一関での存続期間は8年と短い。移転の折には取りこわしたと考えられるが、その痕跡は残るはずである。しかるに今回の調査ではそれを立証する資料は得られなかった。一関町誌によれば大安寺の跡は明和7年(1770年)に鉄砲の場を築き足軽の射的場となったとあるが、これ等のピット群はこれに結びつく遺構とも即断できかねる。

一方2本の溝については遺物が全く出土せず、又ピットとの前後関係も明確でなく、その性格、時期共に不明である。ただBF15溝は墓碑のある盛土部分を回るようにもみえ、或はこれに関係する溝なのかもしれない。

いずれこの機織山の西麓一帯は戦後の宅地造成、土地造成等により地形がかなり変容している場所であり、遺構の保存は良好でない。今後の周辺の調査、研究を待ちたい。

- 注1) 水沢町役場「水沢町誌」(昭6)
注2) 一関町役場「一関沿革史談」(一関町誌に合本)
注3) 留守家系図及び略事歴(長田勝郎氏教示による)
注4) 長田勝郎氏教示による
注5) 一関市「一関市史」第4巻(昭52)
注6) 遠野市「遠野市史」第1巻(昭49)

参考文献

一関町役場(大5)	一関町誌
〃	一関沿革史談
水沢町役場(昭6)	水沢町誌
一関市(昭53)	一関市史(第1巻)
一関市(昭52)	一関市史(第4巻)
水沢市(昭51)	水沢市史(第2巻)
遠野市(昭49)	遠野市史(第1巻)
岩手県(昭38)	岩手県史(第4巻)

はた おり やま
機 織 山 II 遺 跡

遺 跡 記 号：HO II

所 在 地：一関市機織山57-5他

調 査 期 間：昭和50年9月22日～11月11日

調 査 対 象 面 積：1470m²

平 面 測 量 基 準 点

東 京 基 点：402.559km (BA50)

基 準 高：海 拔 41.60m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅲ図P.13）

機織山Ⅱ遺跡は、一関市機織山57の5番地に所在し、国鉄東北本線一関駅より南約800mの本線東側の丘陵西端に位置する。

本遺跡の標高は約39～40m前後で、遺跡周辺の微地形は傾斜度15°以上20°未満の東から西へなだれる緩斜面となっており、かつ数多くの小さな沢により開析されている。現状は草地であるが一部畑地としても利用されている。近年宅地造成等の開発が盛んとなり本遺跡周辺も現地地形がかなり変容してきている。また、本遺跡と機織山Ⅰ遺跡とは吸川に注ぐ沢によって二分され相対している。

2. 調査の経過と方法（第Ⅰ図P.18）

本遺跡は東北新幹線建設事業の施行に伴って昭和46年度に実施した遺跡分布調査の結果発見された遺跡である。

調査は東京起点402.520kmから402.559kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に設定し、402.559kmを本遺跡の基準点としBA50と呼称し測量の基準点とした。この基準点を基に1辺3mを単位とするグリッドを設定した。表土剥ぎはこのグリッドを市松状にあげ遺構の検出につとめた。なおグリッドは遺構の発見に伴い拡張していった。グリッドの中心軸の方向角はN-19°00'00"-Eである。

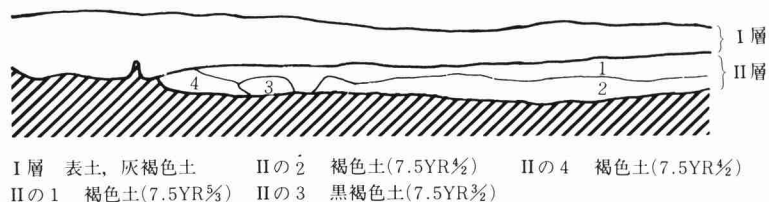
3. 調査結果

〔1〕 遺跡の基本層位

本遺跡は緩傾斜地のため土砂の流失及び人工的攪乱等によって表土は一般に薄くところによっては地山を露出する場所もあった。表土の第Ⅰ層は粘土質で含水比が高く10YR 5/2（灰褐色）の耕作土である。第Ⅲ層の地山層を掘り込んで住居跡が構築さ

注記

I 層	10Y R 5/2（灰褐色）耕作土
II 層	1 7.5 Y R 5/3（にぶい褐色）埋土
	2 7.5 Y R 4/2（灰褐色）埋土
	3 7.5 Y R 3/2（黒褐色）埋土
	4 7.5 Y R 4/2（灰褐色）埋土
III 層	10Y R 7/6（明黄褐色）地山シルト質に細かい砂礫を包含



(第2図) 土層セクション図

れている。遺構は第Ⅰ層の下、第Ⅲ層のシルト質上面で検出された。なお遺跡の位置と環境で述べたごとく、東高西低の緩傾斜地形のための遺構の保存状況も西辺ほど削平が著しく良好とは云えない。

〔2〕 発見された遺構と遺物

(1) 堅穴住居跡とその出土遺物

B A 50住居跡 (第3図)

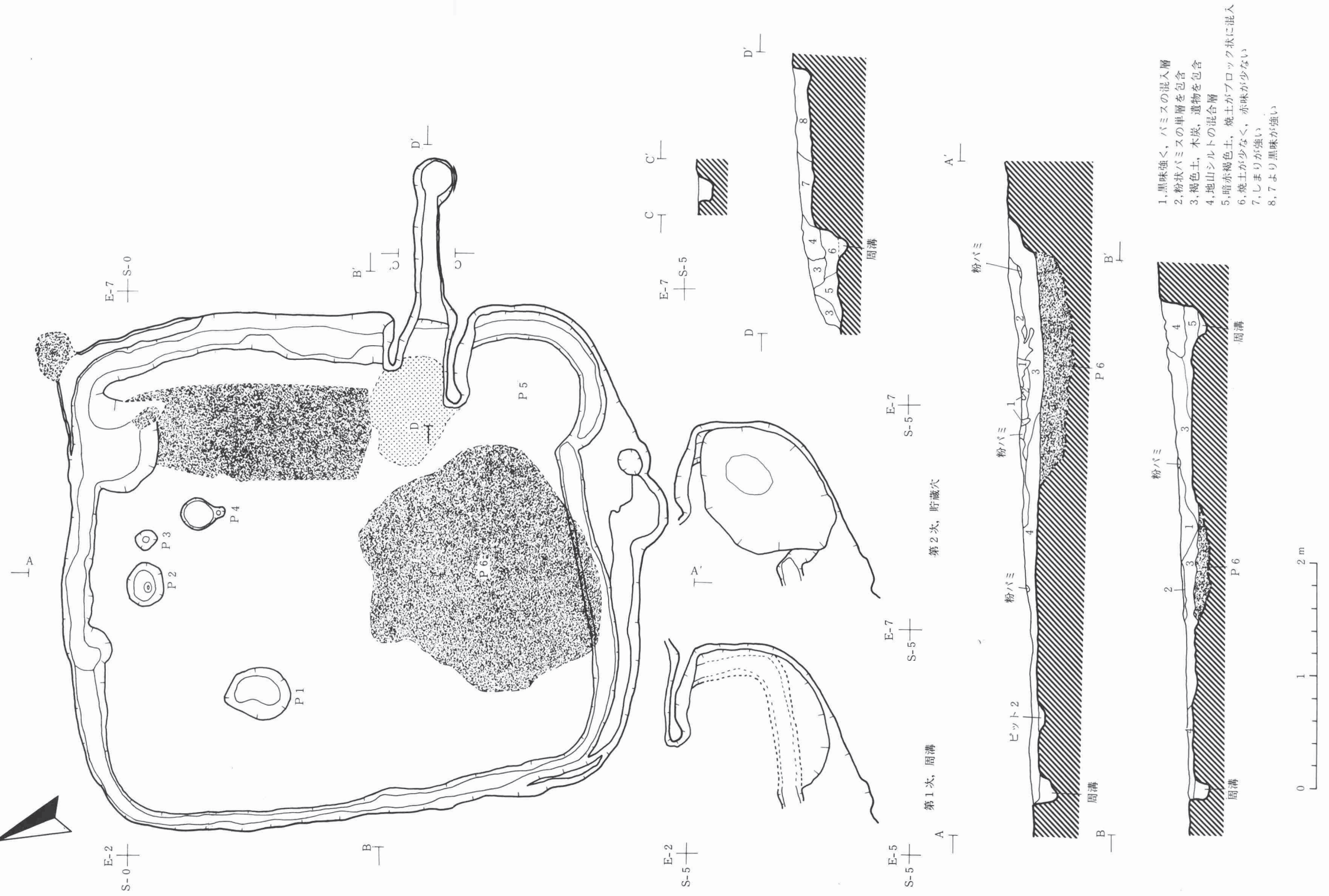
〔遺構の確認〕 本住居跡はB A 50グリッドからB C 53グリッドにかけて検出された住居跡である。検出面は第Ⅲ層の明黄褐色の粘土質シルト層の上部から掘り込まれている。

〔平面形・方向〕 南北約5.2 m、東西約4.5 mで長方形プランである。長軸方向は南北にあり床面積は約23.4 m²である。

〔壁・床〕 壁高は西で約15cm、東は約40cmを計り、東が深く西が浅くなっている。本住居跡の位置する微地形も東に高く西に低い緩斜面となっており自然地形に準じている。床は貼床の痕跡が認められないが部分的に土壇⑥の部分のみ固くつき固められている。

〔堆積土〕 埋土は1・2・3・4の4層から成り、1層中には粉状パミスが所々に単層または塊状に入り込んでいる。2層は1層の粉状パミスの混合土層である。3層が遺物包含層となっており黒褐色土、4層は地山のシルトの流れこみの強い混合層となっている。

〔周溝〕 住居壁下を周溝が1周する。周溝の深さは約8 cmで、一般に東辺が深く、西辺が浅い傾向をみせる。この周溝は土壇⑤との切り合い等から第3次にわたり改修された痕跡をと



- 1, 黒味強く、バミスの混入層
- 2, 粉状バミスの単層を包含
- 3, 褐色土、木炭、遺物を包含
- 4, 地山シルトの混合層
- 5, 暗赤褐色土、焼土がブロック状に混入
- 6, 焼土が少なく、赤味が少ない
- 7, しまりが強い
- 8, 7より黒味が強い

(第3図) B A 50住居跡平面断面図

どめている。第1次は壁下を1周させたが、次に南辺隅に貯蔵穴状の土壌を掘り、周溝は土壌によって寸断された。第3次は前記土壌を埋め戻し再度周溝を一巡させ機能の回復をはかった。

〔柱穴〕 本住居跡では5個のピットを検出したが柱穴と想定されるものはなかった。

〔カマド〕 カマドは東辺やや南寄りに構築され、袖、煙道、煙出し等が残存していた。煙道は屋外に約1.4 m伸びている。袖の基底部に周溝の掘削痕が残されていることから袖は地山を利用したものとは考えられない。また補強に芯として石を用いている。焚口部には長径約1.5 mの範囲で焼土及び木炭の散布が認められた。煙道の傾斜角はほぼ水平で煙出部に至り若干の落ち込みをみせる。煙出しはほぼ垂直に立ち上がり円筒状を呈す。

〔出土遺物〕 本住居跡の出土遺物は、土師器、須恵器、その他の土器、鉄製品等である。土器では坏、長頸瓶、鉄製品は用途不明のもの1点を出土している。以上はいずれも住居跡の埋土中に含まれるものである。

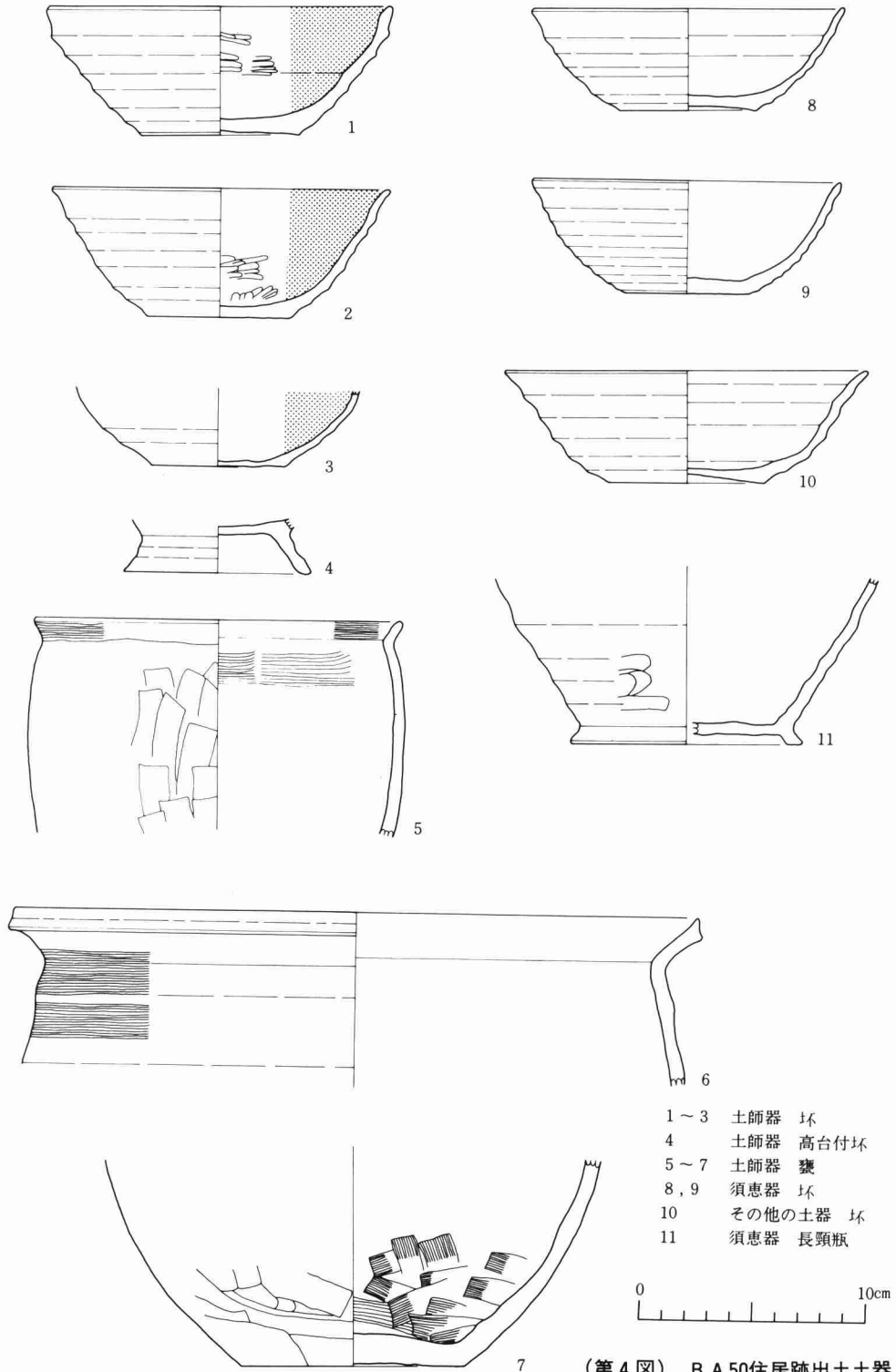
A：土器 （第4図）

土師器

坏 本住居跡出土の坏は第4図1～3の3点である。図1は成形にロクロを使用しているが体部のロクロ痕が顕著で器厚もやや厚手の感がある。器形は内彎気味に外傾、口縁部はほぼ直立する。底部切離技法は回転糸切りである。調整は内面のみで口縁部から体部上半にかけヘラミガキで底部は磨滅が著しく不明、また内黒処理が施されている。図2は、ロクロ成形で底部切離は回転糸切りである。調整は底部から体部下半にかけヘラミガキ痕を有し内黒処理が施されている。一部にかさね焼痕の痕跡が認められる。器形は体部がほぼ直線的に外傾し口縁部が外反する。口径に比し器高の高い坏である。図3も成形等は前者に類似するが、外面底部に一部手持ちヘラケズリ調整が施されている。また器形は強く内彎しながら外傾する。口縁部は欠損のため不明。

高台付坏 図4の1点のみである。坏部を欠損し脚部のみ残存。ロクロ成形によるもので胎土は均質で焼成も良好である。坏部の底部内面は黒色処理されているが調整痕はみられない。脚部は大きくハの字状に開き先端は丸味をもっている。

甕（第4図5～7） いずれも完形品がなく器形全体を知ることができない。5は最大径を胴部にもちほぼ垂直に立ち上がるが口縁部は極端に短かく、くの字状に外反する。調整は内外ともに認められヘラケズリとヘラナデによるものである。6は大形の甕の口縁部であり残存部は口縁部付近のみである。口縁部はくの字状に大きく外反し口唇部が垂直に引き出され断面が三角形状となっている。調整痕は外面にナデの痕跡をとどめる。7は胴部下半から底部にかけて残存するものである。成形は巻上げ法で最終的にロクロ成形で形を整えている。調整は内外面ともあり外面はヘラケズリ内面はヘラナデによっている。また底部はオサエによるものと見



- 1～3 土師器 坏
- 4 土師器 高台付坏
- 5～7 土師器 甕
- 8, 9 須恵器 坏
- 10 その他の土器 坏
- 11 須恵器 長頸瓶

0 10cm

(第4図) BA 50住居跡出土土器

られる。

(第8図11) 拓影図 BA50住居跡出土の甕の底部で木葉の圧痕を残したものである。ほぼ円形で胴部接合面で剥離、最大径7.9cm、厚さ1.7cmで部厚い感じの底部破片である。断面形は台形を呈し、胎土は石英、雲母の微粒子を多く含み、色調は浅黄橙色であり外面は二次的加熱を受け一部赤橙色に変色している。広葉樹の葉脈の圧痕が明瞭である。また底部内面調整は指頭によるナデ調整が行なわれた痕跡をとどめる。即ち底部に指頭の圧痕が凹凸となって残り数個の指紋の圧痕も残されている。また指紋とともに三日月状の爪の圧痕も数条にわたりみられる。ロクロ末使用の巻き上げ法による成形法をとったものと考えられる。

須恵器

坏(第4図8～9) ロクロ成形で底部切り離しは回転糸切りである。器形は内彎しながら外傾するもので調整は一切認められない。器壁は薄手である。色調は一部赤褐色を呈するが焼成は硬質である。

甕(第8図1)は大形甕の胴部破片と思われる。外面調整は平行叩き目を横方向あるいは斜方向に交錯させている。内面は横方向の叩き目と弧状のハケ目による調整が行なわれている。また外面に一部自然釉がかかっている。(第8図2)は平行叩き目が交錯したものであろう。甕の一部分と考えられる。(第8図3)は長頸瓶の底部から胴部にかけての破片と思われるが高台付となっている。調整はロクロ調整のみである。(第8図4)は平行叩き目を角度を変えて行ったもので全体に波状の文様になっている。内面は叩きか、当て板によるものと思われるが菊花状の圧痕が強く残されている。器種は甕の胴部破片と思われる。(第8図5)は壺か長頸瓶の肩部付近の破片で、ロクロ調整のあと、工具によるカキ目痕が放射状に上から下に向け施されている。また内面にはロクロによる調整痕がみられる。(第8図9)は前記2に類似するものである。

長頸瓶(第4図11) 脚部約 $\frac{1}{2}$ と体部下半の一部を残し他を欠損している。ロクロ成形によるもので薄手のつくりである。底部内面にヘラナデの調整痕を残す。底部は低い高台付となっておりハの字状に外傾している。色調は灰褐色を呈し極めて硬質である。

その他の土器

坏(第4図10) 住居内ピット5の埋土中より出土したもので、約 $\frac{1}{2}$ を残存している。成形はロクロにより、底部は回転糸切り、内外無調整である。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含んでいる。焼成は軟質で手でさわると粉状の胎土が付着する。器形は底部から内彎しながら外傾し、口縁部でやや外反の傾向をみせている。

BC50住居跡(第5図)

〔遺構の確認〕 本住居跡はBA50住居跡の南隣りわずか2mを隔てて検出された。遺構検

—機織山Ⅱ遺跡—

出面は第Ⅲ層の地山（粘土質シルト層）面である。

〔平面形・方向〕 南北約3.7 m、東西約4.2 mの隅丸長方形を呈し長軸方向は東西にあり床面積は約15.54 m²のやや小型の住居跡である。

〔壁・床〕 壁高は西辺で約3 cm、東辺で約26cmを計る。BA50住居跡同様に北東から南西方向にかけて浅くなる傾向を示している。床面は明黄褐色のシルト質で凹凸が少なくやや平坦である。また貼床状の痕跡は認められなかった。

〔堆積土〕 住居跡の堆積土は1層から4層によって構成され、2層が遺物、炭化材等の包含層である。

〔周溝〕 周溝は北壁に沿って構築され床面を東西に二分する形となっている。

〔柱穴〕 本住居跡の主柱

穴として4個を検出した。第

4図のピット4・5・7・9

がそれである。柱間寸法は東

西約1.5 m、南北約2.3 mを

計る。各柱穴の形状、測定値

等は別表第1表に示したとお

りである。本住居跡のプラン

からみると柱穴はやや南に片寄って構築されている。

〔かまど〕 かまどは南壁の東コーナー付近に設けられている。焚口部は右袖を残し左袖は原形をとどめないほどピット1によって破壊されている。また煙道部、煙出部は耕作及び削平により検出はできなかった。焼土木炭の広がりのかまどを中心に長径約60cm、短径約40cmの範囲でほぼ楕円状に散布していた。

〔その他〕 焼土、木炭の散布はかまど付近と住居跡中央部の2カ所に認められた。また性格不明の小ピット数個を検出した。

〔出土遺物〕 本住居跡の出土遺物は土器、鉄製品、植物種子の炭化物及び炭化材等である。土器は土師器、須恵器の完形、復元可能土器及び破片等となっている。鉄製品では紡錘車、刀子及び釘状のものの出土がみられた。遺物包含層は埋土内で散布範囲は東壁寄りに偏在する傾向をみせている。

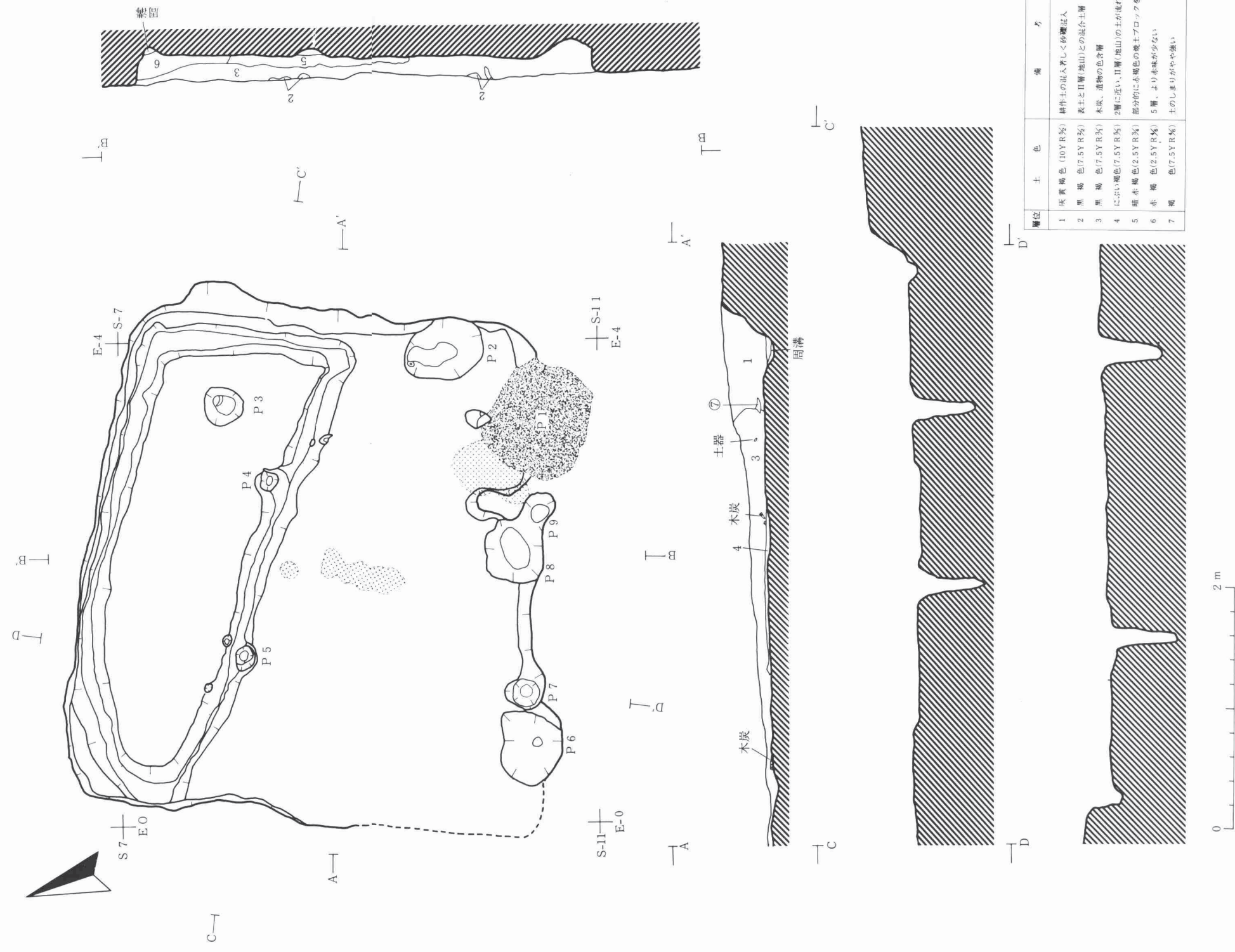
A：土器（第6図、第7図）

土師器

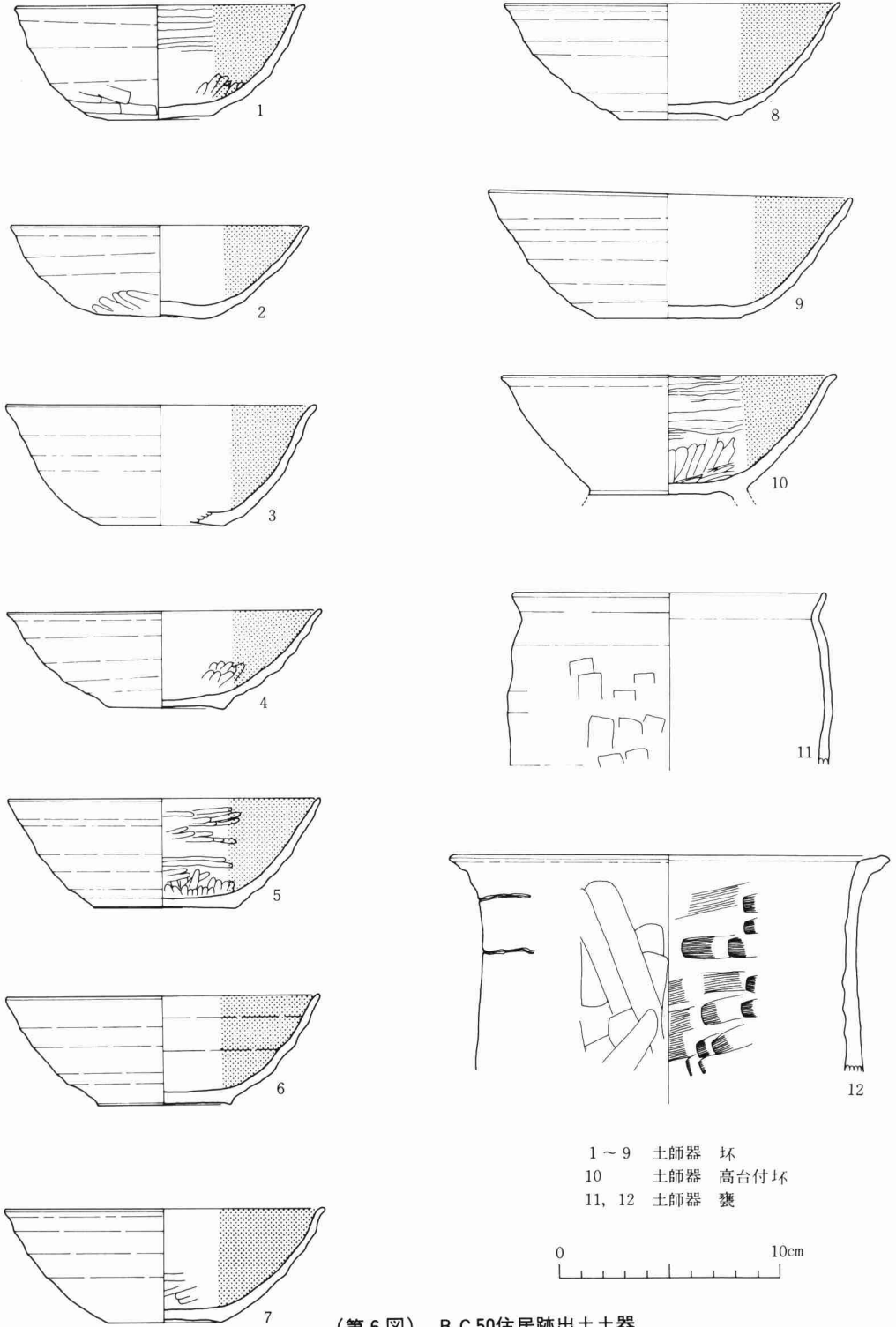
坏 本住居跡出土の坏は全てロクロ成形によるものであり、調整はケズリ、ミガキが一般的で黒色処理が施されている。焼成はややあまく軟質の傾向がある。また保存状況は良好と云え

第1表 BC50住主柱穴測定表

主柱穴No	形状	上端径 (cm)	下端径 (cm)	深さ (cm)
P.4	楕円形	20	7	50
P.5	楕円形	30	8	56
P.7	円形	40	7	38
P.9	楕円形	34	10	45

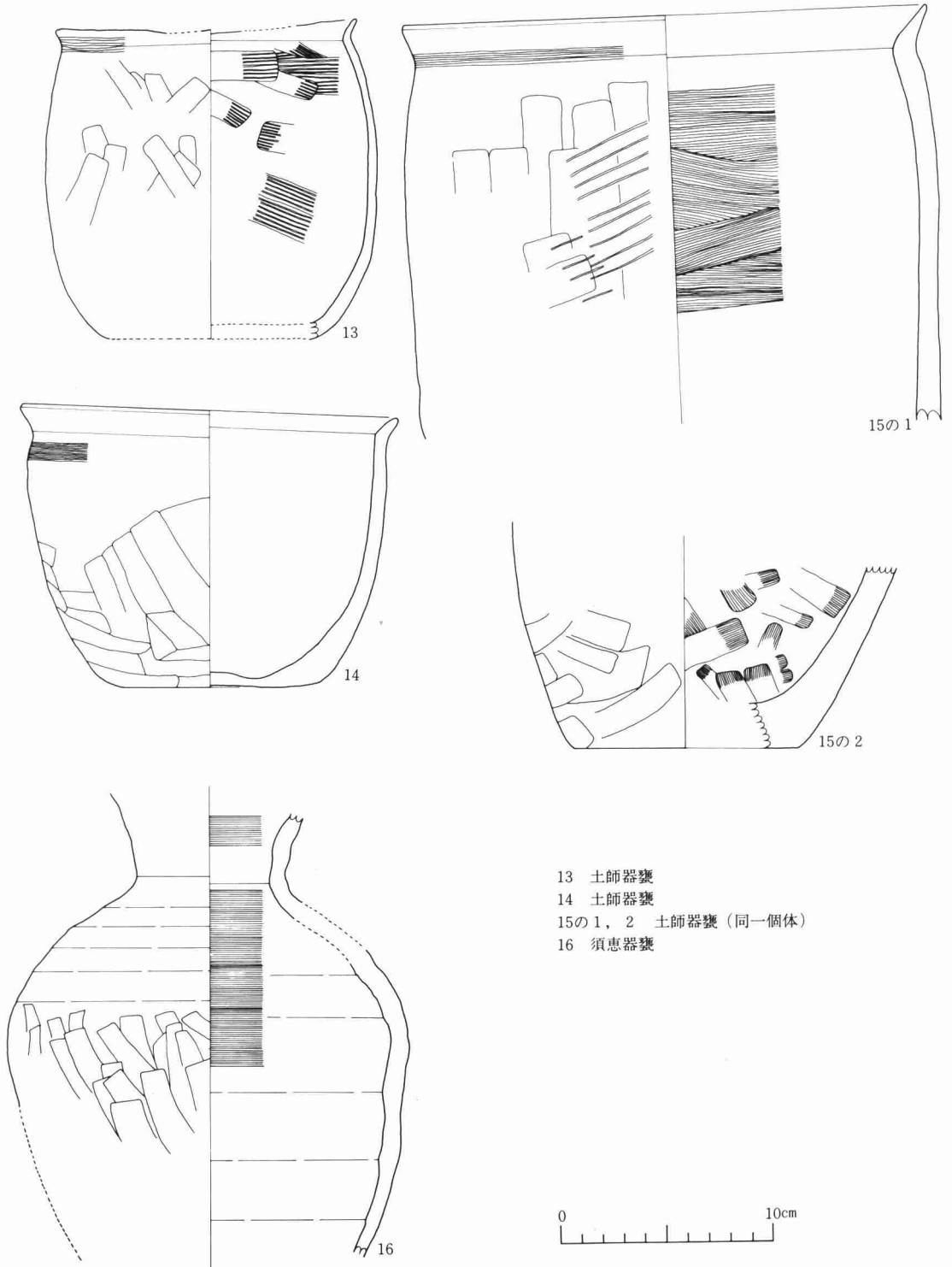


(第5図) B C 50住居跡平面断面図



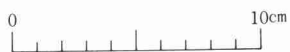
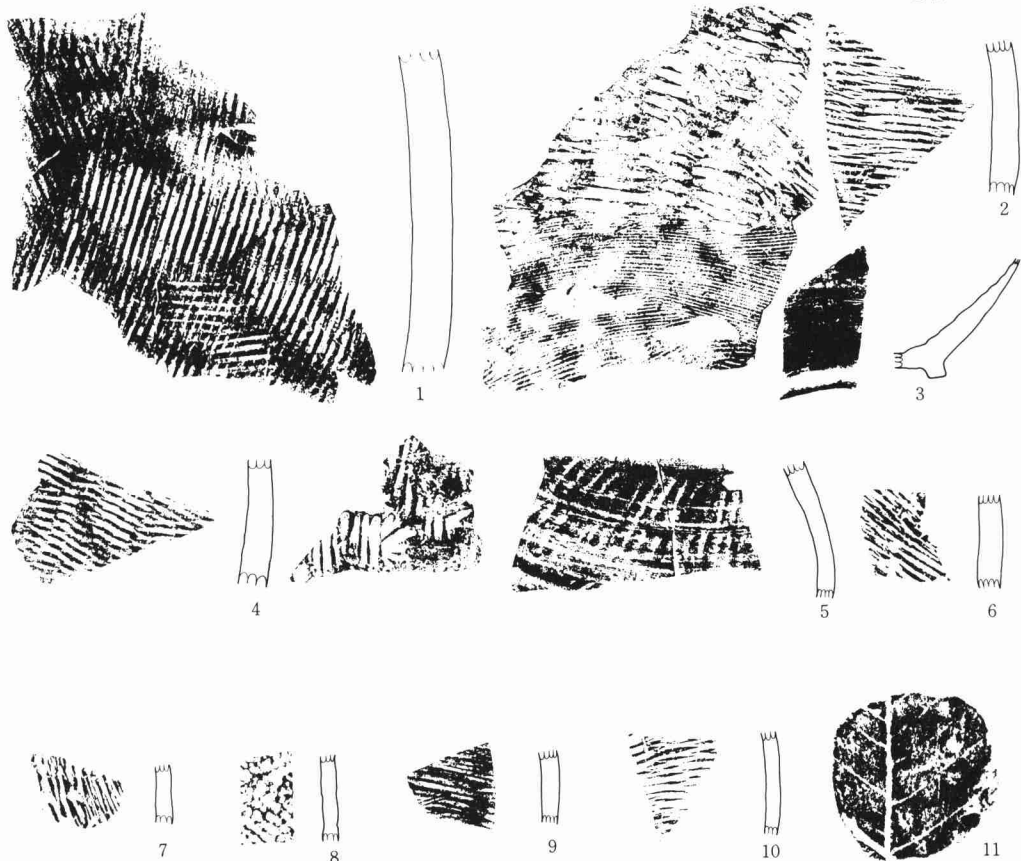
(第6图) BC 50住居跡出土土器

—機織山Ⅱ遺跡—



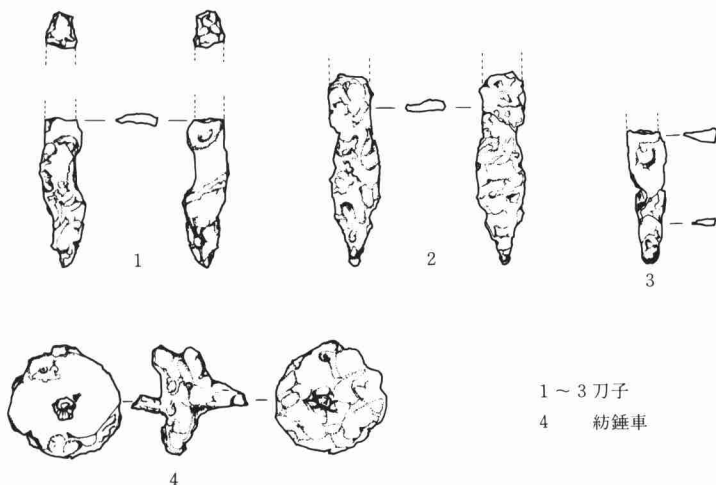
- 13 土師器甕
- 14 土師器甕
- 15の1, 2 土師器甕 (同一個体)
- 16 須恵器甕

(第7図) BC50住居跡出土土器



- | | | |
|-------------|---------|------------|
| 1, 2, 4, 9 | B A 50住 | 須惠器甕 |
| 3, 5 | B A 50住 | 須惠器長頸瓶 |
| 6, 7, 8, 10 | B C 50住 | 須惠器甕 |
| 11, | B A 50住 | 土師器甕 (木葉底) |

(第8圖) 土器破片拓影圖



- | | |
|-------|-----|
| 1 ~ 3 | 刀子 |
| 4 | 紡錘車 |

(第9圖) B C 50住居跡出土鉄製品



ず磨滅が著しい。(第6図1)は器形全体が円みをおび底部切離技法は回転糸切りによるものである。外底部付近はヘラケズリによる再調整がなされ体下半部まで及んでいる。内面は底部に放射状のヘラミガキを施し口縁部付近は横方向のミガキとなっている。体部は内彎しながら外傾し口縁部でわずかに外反する。(第6図2)は前記に類似するが器形の点で若干趣きを異にし、体部の立ち上がりやや直線的である。(第6図3～6)は口径約13cmのやや小型の群に属する坏である。3と6は内黒処理がなされているが調整の施されないもの、4・5は内黒処理がなされ、特に4は底部を中心に放射状のヘラミガキが、また5では底部のミガキが4に似るが体部にやや斜傾のミガキが加味されている。且つミガキを全面に施し製作が念入りである。以上の群の中で3の坏が口径に比して器高が高いものである。(第6図7～9)この群の坏は口径15cm～16cm前後とやや大型の坏類である。器形はいずれも内彎しながら外傾する。7・8は口縁端が外反するが9はほぼ直線的である。また7は調整として体部下半に横方向のミガキが施されていることと、8・9に比べ口径に対して底径が極端に小さくなっている。

高台付坏 (第6図10)は脚部を欠損している高台付坏である。成形にロクロを用い体部は内彎しながら立ち上がり口縁端で強く外反する。外面の調整は認められないが内面はほぼ全面にわたっての調整がみられる。底部には放射状のヘラミガキがなされ体部から口縁端にかけては横方向のヘラミガキ痕がみられる。黒色処理は内面にのみ施されている。坏部と脚部の接合は剥離面から推測すると両者は別個に作られ後で接合したと考えられる。脚部は外方に八字状に広がる。

甕 (第6図11～12) 成形にロクロを用いず巻き上げ法によったものである。11は胴部に不規則の凹凸があり、口縁部が短く「く」の字状に外反する。また口縁端は円味をもっている。調整は外面に縦方向のヘラケズリ痕を残す。12は成形法が前者と同様であるが特に肩付近に二条の亀裂状の接合面をみせている。体部は直線的に立ち上がり口縁部で強く外反、また口縁部は極端に厚く口縁端はほぼ水平に近く外方に伸びている。調整は外面が粗いヘラケズリで内面はナデツケで器壁は波状を呈する。概ね胎土は粗く且つ厚手作りである。(第7図13～14)は小型甕で13はロクロ未使用のものである。成形は巻き上げ法を用い、器形は不整形で底部を欠損しているが最大部位を胴部中央に持つ。器壁はゆるく円味をもって立ち上がり、口縁部は極端に短く「く」の字状に外反する。また口縁端の凹凸が著しい。調整は外面口縁部付近はユビナデ体部はヘラケズリが施されている。内面調整は肩部で横方向のハケ目が、中央部では斜方向に同様の調整痕が認められる。なお口縁部から肩部にかけカーボンの付着がある。同図版14は口径に対し器高の低い即ち底部から口縁部に向けて逆台形状に開く甕である。成形にはロクロを用い完形品である。出土地点は本住居跡かまど袖付近から出土したもので、ほとんど床面と考えられる。底部はわりあい薄手であり、底部から胴部へ内彎気味にやや直立している口縁部

は前者同様きわめて短くゆるく外反する。調整は外面のみで肩部付近に横方向のユビナデ痕がまた胴部中央から下端にかけヘラケズリ痕を認める。胎土は良好とは云えず細砂を多量に含む。特に外面は磨滅が著しく粒子が浮いている。なおこの甕の中から植物種子の炭化したものが多量に出土している。種子については後述する。(第7図15の1～15の2)は同一個体であるが胴部中央部が欠損し接合復元の不可能なやや大型の長胴甕である。成形にロクロを使用せず巻き上げを行っている。胎土も極めて粗く脆い。器壁は直立気味で肩部がやや内彎し口縁部がゆるく外反している。口縁部の断面型は三角形状を呈する。調整は胴部と頸部の屈折点で横方向のナデが施され、肩部から胴上半にかけて上下方向のヘラケズリ痕が認められる。更にヘラケズリ後右上方から左下方向に向けて叩き目が数条ずつ数ヶ所に残されている。底部付近はヘラケズリで再調整を行っている。内面は、胴部上方は横方向のナデがまた下半部はヘラナデが不定方向に施されている。底部は欠損のため明らかにできない。全体に厚手で胎土が粗く脆い作りとなっている。

須恵器

甕(第8図6～8・10) 拓影図 6は平行叩き目の小破片で7も同様と考えられる。8は網目状の叩き目がみられ外面に一部自然釉がかかっている。

長頸瓶(第7図16) BC50住居跡埋土中より出土の長頸瓶である。頸部上端から口縁部を欠損。また胴下半部から底部を欠損するものである。成形はロクロ成形で胴部上半から回転によるロクロ痕が残る。調整は胴部外面にヘラケズリ痕が上下方向に施され、内面に横方向のナデがほぼ全面にわたり行なわれている。焼成は良好で灰褐色を呈する。

B: 鉄製品(第9図)

紡錘車(第9図4) BC50住居跡床面から出土、全面にわたり酸化の進行がみられ、特に、円盤部分の酸化が著しく、軸部にまでふくれ上がり、且つ錆を除去することにより本体を破損する危険性があり、原型に近い形にまでしか錆の除去ができなかった。紡錘車は円盤状部分の直径約5cm、厚さ0.3cm、軸残存長約5.5cmで軸部直径は約0.4cmである。

刀子(第9図1～3) BC50住居跡の東壁寄り床面より土師器片と共伴して出土したものである。いずれも完形品はなく折損している。1は柄先端部と身部と考えられる部分を残し他を欠損している。腐蝕が著しく身部の原形を中央部にわずかに残すのみである。2は身部を残したものであると思われるが明らかでない。3は刀子の柄から身部中央までで他を欠損したものと考えられる。断面形がほぼ二等辺三角形の形状を呈しており、また刀子の残痕をとどめている箇所があり、柄の木質部が残ったものでないかと考えられる。いずれ3点とも錆が強く残り原形に復すことが困難であった。

釘状鉄片 2～3cmの鉄片数片が出土しているが錆が著しく釘であるか否かは判別できない。

C：炭化物（写真図版7、6～7）

炭化材 BA50住居跡ピット6第Ⅱ層より集中的に出土した。但し本ピットは住居跡に伴うものでなく、住居跡構築前に掘削した土壌で埋土の埋没も自然的なものである。炭化材の樹種は、ケヤキ、ヒバの二種類である。

BC50住居跡出土、埋土から出土した炭化材はクリ及びケヤキであった。また塊状の炭化物は鑑定の結果^{注1)} 籾の米であることが判明した。形状は丸型でありいわゆる「日本型」と称されるものであろう。これらの中に籾の表皮がはっきり観察されるものもあるが塊状のため1粒毎に分離することは不可能である。一方本住居跡かまど袖付近から土師器甕（第7図14）（図版3、3）の中から一括出土した種子炭化物は多量の小豆であることが判明した。色調は7.5 Y R 4/1 灰褐色で完全なもの、あるいは半分に分割されたもの等いろいろである。この小豆粒を無作為抽出し長径の大小順に配列し測定したのが別表第2表である。

最大のものは長径8.7mm、最小は5.3mmを計り、短径では最大5.7mm、最小3.9mmであり粒のばらつきが目だつ。いずれにせよ、本住居跡は焼失家屋とは考えられないので、かまど近辺において何らかの火を受け炭化したものと考えられる。且つまた、これら穀類の炭化物は、この時期の食生活の一端が伺える貴重な資料と思われる。

注1、2） 東北林業試験場 村井三郎氏鑑定による。

第2表（小豆計測表）

No.	長径 (mm)	短径 (mm)
1	8.7	4.9
2	8	5
3	7.3	5.2
4	7	5.7
5	7.2	4.7
6	7.2	5
7	7.5	4
8	7.2	4.2
9	6.5	4.2
10	6.5	4.9
11	7.2	4.6
12	5.9	4.2
13	7	4.1
14	6.7	4
15	5.9	3.9
16	6.5	4.1
17	6.2	4.1
18	6.3	4
19	5.9	4
20	5.3	4
平均	6.8	4.4

(2) 考察

本遺跡で2棟の堅穴住居跡から完形、復元可能土器、及び多量の土器破片の出土をみた。これら遺物の観察をもとに大略次のように類別を試みた。

A類：成形、調整にロクロを全く使用しない土器群。

B類：成形、調整にロクロを使用した土器群。

土師器（杯）

B₁類：ロクロ成形で、外底部ケズリ調整、内面ミガキ、黒色処理されているもの。

B₂類：ロクロ成形で、底部回転糸切りで無調整、内面ミガキ、黒色処理のなされているもの。

（甕）

A類：肩部に段がなく、外面口頸部横ナデ、体部縦位ハケ目、あるいはヘラケズリ等により体部と頸部が区画されているものを含む。

B類：ロクロ成形で頸部が比較的短かく口縁部が「く」の字状に外反、体部内外面にナデによる再調整のみられるもの。

須恵器（杯）

B類：外底部回転糸切り、無調整。

（長頸瓶）

B類：ロクロ使用 外面ヘラケズリ、内面ユビナデによる再調整を施したもの。

その他の土器（坏）

B類：土師器にも須恵器にも属さない一群の土器、成形にロクロを使用、底部切り離し技法は回転糸切り、内外面とも無調整で黒色処理も行なわれない。色調は概ね明黄褐色、灰白色を呈する。器種は坏のみとなっている。

以上の分類基準にしたがって類別したのが第5表である。（BA50住居跡）の出土遺物で土師器は7点を数えるがA類は1点で他は全てB類である。杯はB₁類とB₂類の比が1：2である。

比率的にはロクロによる回転糸切り無調整が優位を占める。土師器全体ではロクロ未使用のものが甕に1点だけみられる。須恵器、その他の土器は出土例が少ない傾向にある。全般的に云えることはB類の占める割合が高い。（BC50住居跡）では土師器がほとんどを占める結果となる。坏、高台付坏はB類に属し、B₁とB₂の比は4：6で底部回転糸切りの無調整が6割を占めておりBA50住居跡の出土例に酷似している。甕はA類とB類が4：1でロクロ未使用がB類を圧倒している。

4. まとめ

第3表 出土土器破片一らん表

B A 50 住 居 跡		B C 50 住 居 跡		遺 構 外		計
土器区分・器種	数量(片)	土器区分・器種	数量(片)	土器区分・器種	数量(片)	
土師器 坏	73	土師器 坏	69	土師器 坏	8	150
” 甕	177	” 甕	76	” 甕	81	334
須恵器 坏	0	須恵器 坏	12	須恵器 坏	0	12
” 甕	16	” 甕	3	” 甕	5	24
その他 坏	42	その他 坏	44	その他 坏	26	112
” 高台付坏	1					1
合 計	309	合 計	204	合 計	120	633

第 4 表 出 土

遺 構	実 測 図 番 号	写 真 番 号	種 別	器 種	寸 法				調		
					口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口 縁 (頸) 部		体 部
									外	内	外
B A 50 住 居 跡	No. 1	図 4.1	土 師 器	坏	15.2		7.0	5.7		ヘラミガキ	
	2	2	土 師 器	坏	13.8		6.0	4.5			
	3	3	土 師 器	坏			5.8				
	4	4	土 師 器	高台付坏 脚部							
	5		土 師 器	甕	16.2				横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ
	6		土 師 器	甕	30.1						
	7	9	土 師 器	甕			10.0				
	8	5	そ の 他	坏	13.8		6.0	4.5			
	9	6	そ の 他	坏	13.7		5.7	5.0			
	10	7	そ の 他	坏	16.0		6.8	5.0			
	11	10	須 恵 器	長 頸 瓶			9.5				
B C 50 住 居 跡	No. 1	図 5	土 師 器	坏	13.3		5.0	5.2			
	2		土 師 器	坏	13.6		5.4	4.2			
	3		土 師 器	坏	14.2		5.6	5.5			
	4		土 師 器	坏	14.2		5.2	4.4		ヘラミガキ	
	5		土 師 器	坏	14.2		6.5	5.0		ヘラミガキ	
	6		土 師 器	坏	14.3		6.0	5.0		不明	
	7		土 師 器	坏	14.7		5.2	5.2			
	8		土 師 器	坏	15.3		4.8	5.3			
	9		土 師 器	坏	16.5		6.6	5.7		横方向 ヘラミガキ	
	10	9	土 師 器	高台付坏	15.3		7.0	5.1			
	11		土 師 器	甕	14.2						ヘラケズリ
	12		土 師 器	甕	20.0				ヘラケズリ		ヘラケズリ
	13	3	土 師 器	甕	14.0		9.6	14.5	ユビナデ		ヘラミガキ
	14	4	土 師 器	甕	17.8		8.0	13.1			
	15 (1.2)	5.6	土 師 器	長 胴 甕	24.8		10.6		ヨコナデ		ヘラケズリ タタキ
	16	7	須 恵 器	長 頸 瓶	18.9						横ナデ

土 器 一 覧 表

整					類 別	付 記
上 半	体 部 下 半		底 部			
内	外	内	外	内		
へらミガキ 横方向に調整 横ナデ	へラケズリ	不明 へらミガキ 横方向に調整	一部手持ち へラケズリ	不明 へらミガキ	B ₂ B ₂ B ₁ B ₂ A B B B B B	} 坏 } 高台 } カメ } 坏 } その他坏 } 長頸瓶
		へラナデ		へラナデ	へラナデ へラナデ	
へらミガキ へらミガキ へらミガキ 横方向 へらミガキ 横方向 へらミガキ ナデツケ ハケ目 へラナデ へラナデ	手持ちへラケズリ 手持ちへラケズリ	へらミガキ 縦方向の へらミガキ へらミガキ へらミガキ へらミガキ 横斜方向に へらミガキ 横方向 へらミガキ	手持ちへラケズリ 手持ちへラケズリ 周辺部にへラケ ズリの痕跡あり へラケズリ	へらミガキ 不明 不明 へらミガキ 縦斜方向に へらミガキ 放射状 へらミガキ	B ₁ B ₁ B ₂ B ₁ B ₂ B ₂ B ₂ B ₁ B ₂ A A A A B B	} 坏 } 高台 } カメ } 長頸瓶

—機織山Ⅱ遺跡—

1. 本遺跡は機織山西側の緩傾斜面を占地した遺跡である。
2. 遺構として堅穴住居跡2棟を検出。両住居跡は近接し、ともに周溝、かまど等の施設を伴う。特にBC50住居跡の周溝は床面を東西に二分するものである。この形は宮前遺跡の第8号住居跡^{注1)}に類似している。また本住居跡では4本の主柱穴を確認した。
3. 出土遺物は、土器、金属器、植物種子の炭化物、炭化材等々にわたる。土器観察から本遺跡の坏形土器は、北上市相去遺跡A^{注2)}類に酷似するものである。したがって年代的には10世紀代に相当する遺跡といえる。

注1) 宮城県教育委員会「宮前遺跡—巨理町における古代集落跡の発掘調査概報」(1975)

注2) 考古風土記「岩手県のロクロ使用土師器について」高橋信雄(1977)

参考文献

1. 北上市史刊行会「北上市史第1巻」(1968)
2. 北上市教育委員会「尻引遺跡調査報告書」(1977)

江 刺 地 区 の 概 観

1. 江刺地区の位置および地形と地質

<位置>

江刺市は岩手県南のほぼ中央部に位置する人口約36,000の小都市である。その市域は北上川東岸の平野部とその東側に続く丘陵地および山地一帯に広がっている。市域の範囲は旧江刺郡内の1町9ヶ村を含む南北約28km、東西約24kmの地域にまたがり、その総面積は360.77 km⁽¹⁾に及んでいる。

この市に隣接する市町村としては丘陵地や山地などを境にして、北側に北上市、和賀郡東和町、東側に遠野市、気仙郡住田町があり、南側には東磐井郡大東町がある。また西側には北上川、伊手川などを境に胆沢郡金ヶ崎町、水沢市が隣り合っている。

市の中心街は市域の西寄りの岩谷堂地区にあり、ここから県庁所在地の盛岡市までは北に約57km離れている。また隣接する水沢市の中心街までは南西に約7 km、北上市の中心街までは北北西に約12km、それぞれ離れている。

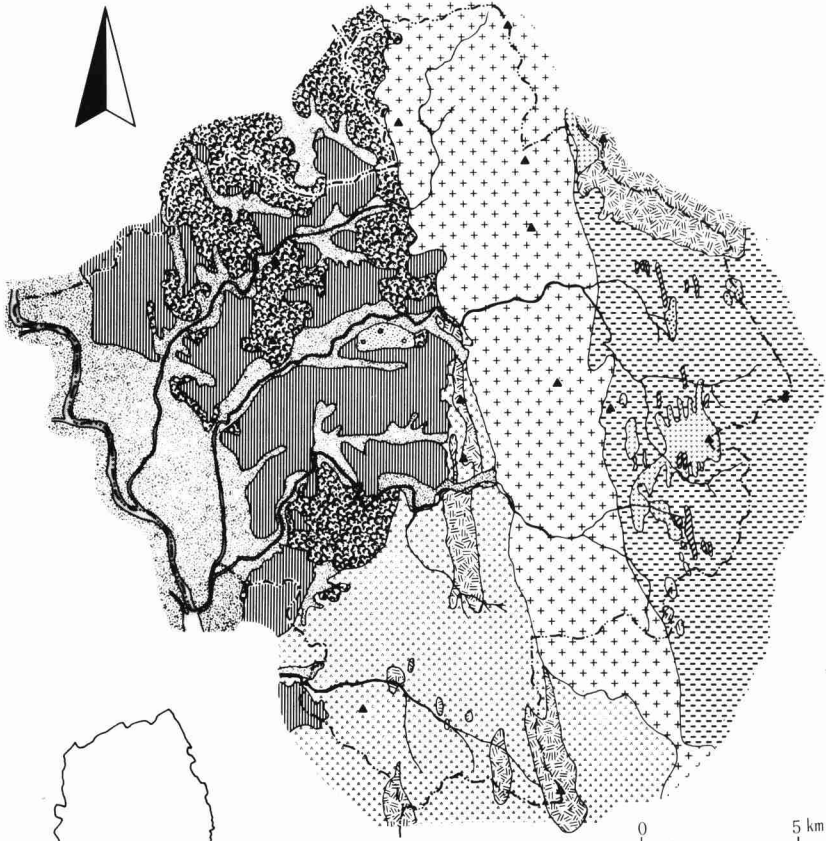
今回報告される中屋敷、力石、落合Ⅰ、鶴羽衣、鶴羽衣台、瀬谷子、五十瀬神社前、谷地の各遺跡は全て市域西辺部の稲瀬、愛宕両地区内に位置している。これらの地区で東北新幹線は北上川東岸の平野部を通過するが、上記の各遺跡はこのルート沿いに南東から北東方向に並んで分布している。なお、このルート沿いにはその他に後日報告になる宮地、落合Ⅱ、鴻之巣館の3遺跡が知られている。

<地形>

先に述べた各遺跡は全て北上川の河谷平野に散らばる比高1～2 mの島状の微高地上に立地している。

岩手県北の山地に源を発する北上川は北上盆地の東辺部を緩く蛇行しながら南下を続け、やがて江刺市西辺部にさしかかる。ここで北上川は、それまで南々西方向に流れていた向きを大きく変え、金ヶ崎町三ヶ尻方面から東方の江刺市稲瀬字三照方面に向かって流れる。川はその後も蛇行を繰り返しながら、全体として水沢市と江刺市の境界部を南々東方向に流れ、前沢町方面に抜けている。

蛇行する川の両岸河谷部には沖積平野が発達しているが、その発達は東岸部の江刺市側で特に著しい。この江刺市側の平野は、俗に江刺平野と呼ばれている。江刺平野は、市域の大半が丘陵地と山地で占められる江刺市にあっては最大の平野部になっている。その海拔高度は35～45 mを測り、大部分が水田化されており、西岸の平野部や扇状地、その他の台地とともに県内

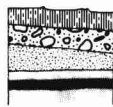


「江刺市の地学」より引用、一部加筆

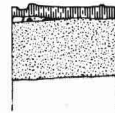
- | | | |
|------------|----------------|-------|
| 新生界 第四系 | 沖積統=沖積層 | 蛇紋岩 |
| 同 | 更新統=扇状地堆積物 | 花崗岩 |
| 新生界 第三系 | 鮮新統=真流層
金沢層 | 石英斑岩 |
| 同 | 中新統=稲瀬層 | ハンレイ岩 |
| 古生界二疊, 石炭系 | 叶倉層, 坂本層 | 石灰岩 |
| 同 | デボン系 鶯ヶ森層, 母体層 | 珩岩 |

- 粘性土
- 砂礫
- 砂質土
- 泥岩
- 砂岩
- 亜炭
- 安山岩

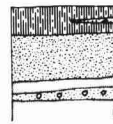
水平距離：高さ=1:30



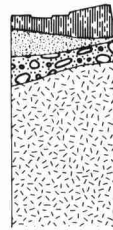
中屋敷



力石



落合1



鶴羽衣台




-50
-45
-40
-35
-30
-25m

「東北新幹線東京起点429km—441km間地質調査報告書」より引用




(第IV図) 江刺市の位置図, 地質概念図および平野部の地質柱状図



-  砂礫段丘
-  丘陵地
-  山地
-  自然堤防

-  沖積段丘
-  扇状地
-  緩斜面

▲ 新幹線ルートにかかる遺跡

-  旧河道
-  河原
-  谷底平野および泥濘原

5万分の1地形分類図「水沢」
「北上」より合成、一部加算

(第V図) 江刺平野付近の地形分類図

有数の米穀生産地になっている。

江刺平野の東辺部は崖になり、その東側には海拔100 m内外～140 m内外の低平な丘陵地が続いている。この丘陵地の辺縁部には河岸段丘性の台地状地形が部分的に見られるが、地形の発達には北上川西岸部と比べて著しく貧弱である。丘陵地は、主として新世代第3紀鮮新統の真滝夾炭層や金沢夾炭層の堆積物によって構成されている。これらの地層は県南地方の北上盆地一帯に広く分布し、盆地辺縁部では各所に丘陵地を構成し、台地部や沖積平野部ではその主要な基底岩盤層をなしている⁽²⁾。この事は江刺平野の新幹線ルート内のボーリング調査⁽³⁾によっても確かめられている。

江刺市付近ではこの第3紀鮮新統の地層の下に第3紀中新統の火山岩類や火山噴出物を主体とする稲瀬層が広がっている。稲瀬層は丘陵地の東側では各所に露出し、海拔150 m内外～400 m内外の低い丘陵性の山地を形成している。

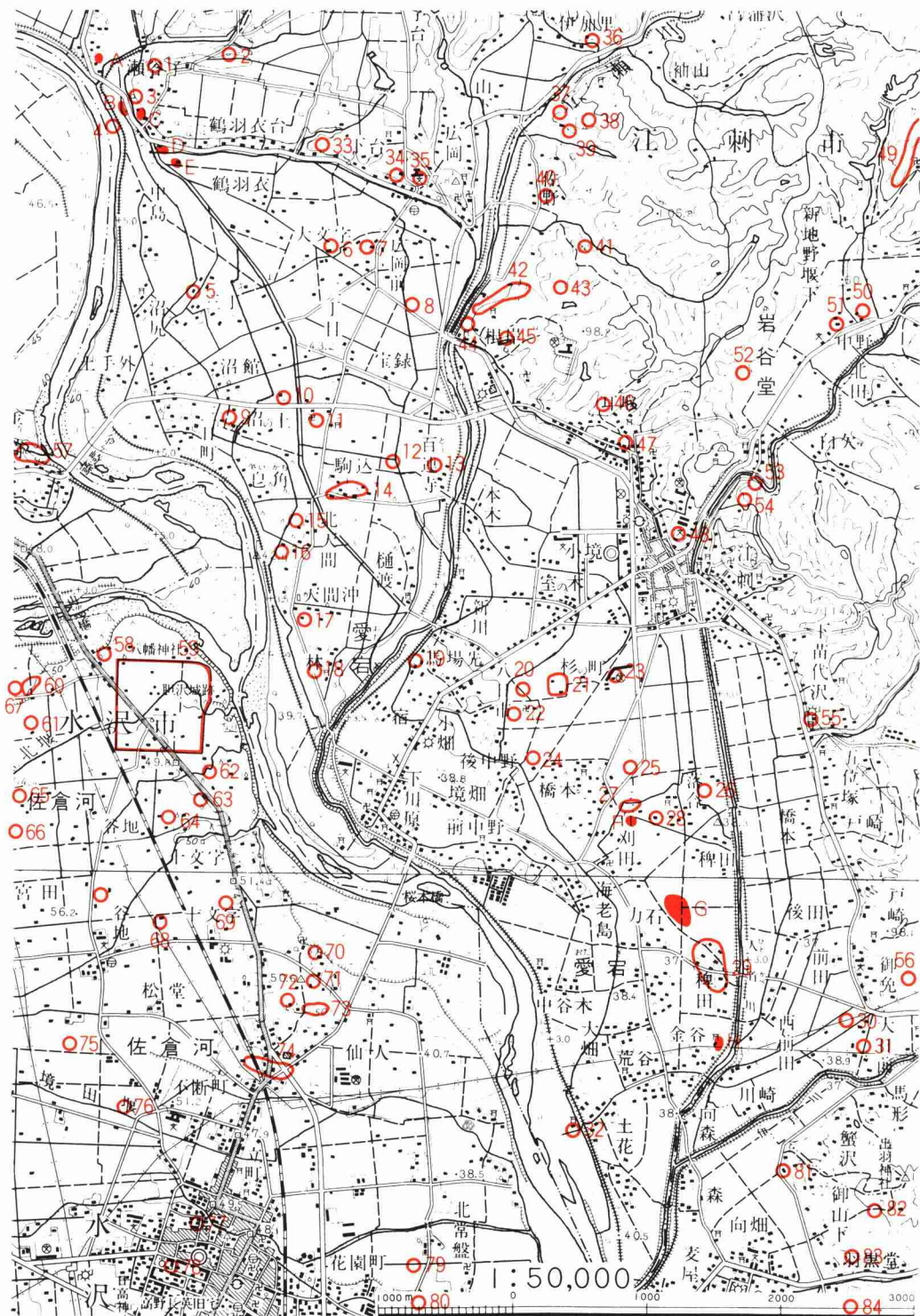
これらの山地の東側や南側には主として古生層、中世代の花崗岩類からなる海拔500 m～800 m内外の山々が尾根を連ね、隣接市町村との境界部をなしている。その最高部は住田町との境に位置する物見山で、その海拔は870.6 mを測る。

以上概観したように、江刺平野東方の地形は西から東に向って高まっている。この山地・丘陵地を開析して、広瀬川、人首川、伊手川などの小河川が西に流れ、北上川に注いでいるが、その河谷部には狭小な平野が形成されている。江刺平野にはこれらの川や胆沢川、および北上川の氾濫によって形成された比高1～2 mの微高地が各所に散らばっている。それに伴うように周辺の水田地帯の中には旧河道が、周囲の水田面より1 m内外低まった帯状の低地になって残っている。

微高地上は一部水田化しているが、大部分は宅地や畑地として利用されている。特に宅地は大半が微高地上に集中し、各集落の中心部を形成している。

2. 周辺の遺跡

江刺平野一帯は近年までしばしば水害に見舞われた地域である。したがって、このような平野の各所に散らばる微高地は、冠水する機会も少なく、古くから人間活動の場として、広く利用されてきたものと思われる。ここには39ヶ所にのぼる原始・古代の遺跡が知られているが、そのうちでも最も古い遺跡は今回報告される五十瀬神社前遺跡で、縄文時代中期の遺物が出土している。今までのところ、それより古い時期の遺跡は江刺平野の微高地上には知られていない。それ以降の遺跡としては沼の上などに弥生時代の遺跡が2～3知られているものの、大部分は奈良時代後半期以降、特に平安時代に中心を置く遺跡である。今回報告される遺跡もほとんどがこの時期に中心を置く遺跡である。



- A. 谷地遺跡 B. 五十瀬神社前遺跡 C. 瀬谷子遺跡 D. 鶴羽衣台遺跡
 E. 鶴羽衣遺跡 F. 落合I遺跡 G. 力石遺跡 H. 中屋敷遺跡

(第VI図) 遺跡の位置と周辺の遺跡

(第IV表) 遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	瀬谷子窯跡	平安	44	根岸	縄文・平安
2	稲瀬古墳	不明	45	宝性寺跡	縄文中～晩期
3	葛ノ木	縄文・平安	46	耳取	平安
4	中島	平安	47	男館	"
5	沼尻	"	48	館下	不明
6	十大	"	49	万松寺	平安
7	大宝文	不明	50	金打	"
8	宝録	平安	51	中野	縄文晩期
9	沼の上	縄文晩・弥生	52	四天坊古墳	不明
10	沼別館	中世	53	裏手丘上古墳	"
11	別当	平安	54	重染寺古墳	"
12	東間	"	55	豊田館跡	平安
13	百蓮寺	縄文	56	石山	"
14	駒込	平安・中世	57	白糸遺跡	不明
15	北天間(1)	平安	58	八ツ口	平安
16	"(2)	"	59	胆沢城跡	"
17	阿称陀堂跡	"	60	玉膳貫	"
18	阿称陀堂跡	"	61	膳權	"
19	馬観音堂	"	62	權竈	奈良・平安
20	馬観音堂	"	63	竈	"
21	宮観音堂	"	64	伯濟寺跡	不明
22	宮観音堂	"	65	獅子鼻跡	縄文
23	杉谷城跡	縄文後・平安	66	"	縄文・平安
24	田橋	中世	67	玉東	平安
25	橋	平安	68	八幡	"
26	鬼合	弥生・平安	69	八幡原	不明
27	落見	平安	70	下河原	縄文晩期
28	見	不明	71	根	"
29	鴻ノ巣	平安・中世	72	瓦ヶ	"
30	御免川	不明	73	桐	"
31	松川	縄文	74	下河原釜	不明
32	四丑	平安	75	幅里	縄文中期
33	鶴羽衣柵跡	"	76	里	縄文晩期
34	稲瀬中學校	"	77	水沢商業跡	平安
35	稲瀬小學校	不明	78	新常盤広	縄文晩期
36	大迫山	平安	79	常盤広	弥生
37	佐野山古墳	不明	80	蛇鹿	不明
38	寺岡	縄文・平安	81	鹿野	縄文・平安
39	神明館古墳	不明	82	愛宕神社	不明
40	板橋	縄文	83	羽黒	不明
41	古兵衛乱塔	不明	84	和	不明
42	根岸洞窟	縄文中	85	大曾	不明
43	庚甲	不明			

江刺平野の対岸部の水沢市や金ヶ崎町方面にも、奈良時代から平安時代に含まれる遺跡が数多く知られている。そのうちでも特に代表的な遺跡は胆沢城跡⁽⁶⁾である。胆沢城跡は胆沢川と北上川との合流点の南西岸に位置しているが、江刺平野の遺跡は大部分、この胆沢城跡から半径5kmの範囲内の場所に立地している。この5kmの範囲の北限域付近には今回報告される谷地、五十瀬神社前など稲瀬地区の遺跡が隣接し合いながら分布している。これらの遺跡のそのすぐ東方の台地一帯には瀬谷子古窯跡群が存在している⁽⁷⁾。この古窯跡群は県内で最大の規模を有し、主として胆沢城およびその近隣の集落に瓦や須恵器などを供給した生産遺跡である。

この遺跡の他にも、江刺市付近の北上川河谷周辺の台地や丘陵の上には多くの遺跡が知られている。その中には藤原清衡が一時本拠を置いたとされる岩谷堂地区餅田⁽⁸⁾の豊田館擬定地や縄文中期の大集落跡である北上市稲瀬町の樺山遺跡⁽⁹⁾、定額寺「極楽寺」跡と推定される同町内門岡の極楽寺遺跡群⁽¹⁰⁾などの著名な遺跡も含まれている。

また対岸の水沢市、胆沢町方面の平野や台地上には胆沢城が築かれる以前の遺跡も多く⁽¹¹⁾、その代表的な遺跡としては、水沢市常盤広町⁽¹²⁾、橋本⁽¹³⁾などの弥生時代の遺跡や最北の前方後円墳として有名な胆沢町南都田の角塚古墳⁽¹⁴⁾が知られている。

参考文献

- (1) 岩手県教育会江刺郡部会編「江刺郡志」編者発行 1925
市勢要覧「えさし」1975年版 江刺市 1975
岩手日報社編「岩手年鑑」昭和52年度版 岩手日報社 1977
20万分の1地図 「岩手県」 岩手県 1976
5万分の1地形図 「北上」 建設省国土地理院 1976
" " 「水沢」 " 1969
" " 「人首」 " 1974
" " 「陸中平原」 " 1974
- (2) (1)で引用した20万分の1地図および5万分の1各地形図
5万分の1地形分類図 「水沢」および地形説明書 『土地分類基本調査「水沢」』
経済企画庁 1963
5万分の1表層地質図 「水沢」および地質説明書 同上 1963
5万分の1地形分類図 「北上」および説明書『土地分類基本調査「北上」』岩手県 1975
5万分の1表層地質図 「北上」および説明書 同上 1975
佐嶋与四右衛門ほか「北上川」第一輯 東北地方建設局岩手工事事務所 1973
佐嶋与四右衛門「胆沢之賊と北上川」『奥羽史談』第68号号 奥羽史談会 1978
佐嶋与四右衛門ほか「北上川」第六輯 東北地方建設局岩手工事事務所 1977

- 江刺市理科教育研究会他編 「江刺市の地学」 江刺市教育委員会 1971
- 中川ほか「北上川中流沿岸の第四系および地形 —北上川流域の第四紀地史(2)—」
『地質学雑誌』第69巻 第812号 日本地質学会 1963
- 「北上川低地帯の鮮新統 第四系地形」日本地質学会 1973
- 20万分の1 土地分類図 「岩手県」 経済企画庁 1974
- (3)『東北新幹線地質調査報告書 「東京起点 429 K 000 M～441 K 000 M間」』川崎地質株式会社 1972
(国鉄盛岡工事局蔵本)
- (4) {「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」 岩手県教育委員会 1973
「岩手県遺跡地図」 " 1974
「全国遺跡地図(岩手県)」 文化財保護委員会 1966
- (5) 伊藤鉄男 「沼ノ上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会 1973
山口了紀 「江刺市沼の上遺跡」 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第5集 1978
- (6) 板橋源ほか 「胆沢城跡」 岩手県文化財調査報告第4集 岩手県教育委員会 1957
その他 1974年度以降 各年度調査年報
- (7) 大川清ほか 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報」 江刺市教育委員会 1969
" 「 " 第2次緊急調査概報」 " 1970
草間俊一編 「瀬谷子遺跡 第3次緊急調査報告」 " 1972
- (8) (1)で引用した「江刺郡志」 P 270～271
- (9) 北上市 「北上市史」第一巻 原始 古代(1) 北上市史刊行会 1968
江坂輝弥 菊池啓次郎 司東真雄 「江刺郡稲瀬村樺山遺跡調査予報」文化財調査報告第二集
岩手県教育委員会 1952
江坂輝弥 菊池啓次郎 司東真雄 渡辺直経 「江刺郡稲瀬村樺山遺跡」文化財調査報告第三集
岩手県教育委員会 1954
草間俊一 江坂輝弥 斉藤尚己 鈴木孝志 「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査中間報告」
文化財調査報告第三集 北上市教育委員会 1968
- (10)「北上市史」第一巻 原始 古代(1) P 348～377
- (11) 草間俊一 伊藤鉄男 及川二男 菊地郁雄 「水沢の原始・古代遺跡」 水沢市教育委員会 1960
- (12) 水沢市 「水沢市史」第一巻
- (13) 水沢市 「水沢市史」第一巻
- (14) 小岩末治 「角塚古墳を語る」『奥羽史談』第2巻1号 第4号 奥羽史談会 1951
林謙作ほか 「角塚古墳」 胆沢町教育委員会 1976
- (15) その他
全般的なものとして
岩手県 「岩手県史」第一巻 上古篇、上代篇 1961
岩手県教育会江刺郡部会編 「江刺郡志」 編者発行 1925

なか や しき
中 屋 敷 遺 跡

遺 跡 記 号 : NY

所 在 地 : 江 刺 市 愛 宕 字 金 谷 264 他

調 査 期 間 : 昭 和 48 年 12 月 10 日 ~ 12 月 22 日

調 査 対 象 面 積 : 5000m²

平 面 測 量 基 準 点

東 京 基 点 : 430.000km (F A 50)

基 準 高 : 海 拔 36.00m

1. 位置と地形（第Ⅴ図P. 51、第Ⅵ図P. 53）

中屋敷遺跡は江刺市愛宕^{おだか}字金谷地内の微高地上に立地している。遺跡所在地は市の中心街から約3.7 km南に離れ、北上川と人首川の合流点からは北々東に約2.25 km離れている。

遺跡の所在する微高地は、人首川の西岸部に沿って南北に長く延びている。その原地形は人首川の改修工事や水田の区画整理工事でかなり大きく損われている。しかし、最近は大きな地形の変更が見られない。

微高地の高さは海拔36.5 m内外で、まわりの低地水田面より0.4～1.5 mほど高まっている。この微高地上は現在、大部分水田化され、一部、宅地や畑地として利用されている。

2. 調査の方法と経過

〈調査範囲〉 この遺跡は1972年の分布調査の際、発見され、遺跡台帳に登録された平安時代の遺跡である。今回の調査はこの遺跡の範囲のうち、東北新幹線工事に関わる中央部分の南北250 m、東西20 m、総面積約5,000 m²の区域を対象に実施した。

〈測量方法〉 調査時の測量は主として遣り方測量法によって行なった。その際、平面測量原点は新幹線ルート中軸線上の東京起点より430 km 000 mの地点に設け、F A 50と名付けた。このF A 50を通過し、同時に中軸線上の東京起点より429 km 960 mの地点を通過する直線を想定し、この直線を平面測量の基準経線とした。さらに、F A 50地点で基準経線と直交する直線を想定し、この直線を平面測量の基準緯線とした。以下、序文2で述べた方法で調査区全体を3 m×3 m単位で方眼区分し、さらに経線方向に30 m毎の小地区割りを設定した。なお各方眼、および遺構の記名も序文2で述べた方法に準じて行なう事にした。

また調査区内の遣り方測量の基準高度は、できる限り海拔36.00 mに統一するように努めた。

〈発掘〉 今回の調査では遺構検出のために調査区の全域にわたって、方眼区分一単位ないし南北二単位大のツボ掘りを市松状に行なった。ツボ掘りの結果、遺構の存在が予想された場所については発掘区域を拡大し、遺構の検出を行なうよう努めた。調査の記録は序文2に記述した方法で行なった。

〈調査の経過〉 この遺跡の調査は1973年12月10日から12月22日までの約2週間の予定で行なった。調査期間中は天候が不順で、しばしば降雪や雨に悩まされ、作業が難行した。しかし、12月11日から19日まで調査区域全域に対して行なった粗掘りの結果、出土遺物が少なく、遺構

も検出されなかったため、当初予定していた期間内で調査を終了した。

3. 調査の結果

〔1〕 基本的層位⁽¹⁾

本遺跡の標準的な土層堆積は第1図に示すようになっていいる。層の構成や厚さは場所によって幾分異なるものの、基本的な層序はこの図によって説明できるであろう

図中の第1層は遺跡付近を広く被う表土層である。この土層は耕作によってしばしば攪乱を受けており、層のしまりは粗で、植生根が多く含まれている。層の厚さは0.1～0.2 m内外で、土のしまりや色は場所によって幾分変化が見られるが、その土性は基本的には軽埴土である。

第2層も軽埴土であるが 耕作による攪乱は余り受けていない。層を構成する土の粘りは上部と下部では幾分異なり、下部にゆくに従って粘性が増す傾向が見られる。この層の厚さ0.2 m内外を測る。

第3層は砂土層である。その砂の粒子は上部でやや粗く、下で細くなる傾向が見られるものの全体的に細かな粒子の砂からなる層である。層厚は0.2～0.25 m内外を測る。

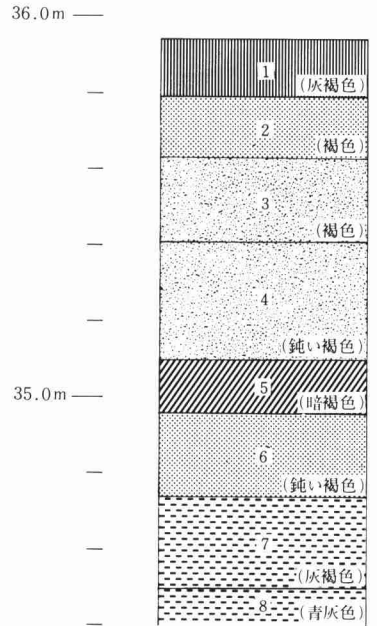
第4層は第3層よりもさらに粒子の細かな砂の層である。その層厚は0.25～0.4 m内外で、色調は第2層とほとんど同じであるが、2層よりもやや暗くなっている。

第5層は、ほとんどシルトからなる土層である。この層は水辺草木の根部の遺体を含み、それらの腐植により一部黒変している。地下水の浸透が著しい層で、その層厚は0.1～0.2 mを測る。

第6層はシルト質埴土層である。この層は水分を多く含み、全体的に柔らかで、下にゆくほど粘性が強くなる。第7層との境界部は漸移的であり明瞭ではない。この層の厚さは0.55～0.2 mを測る。

第7層は粘土層であるが若干のシルトを混えている。この層もかなりの水分を含んでいるが、第6層よりも硬く、粘りも強い。層厚は0.15～0.28 mを測る。

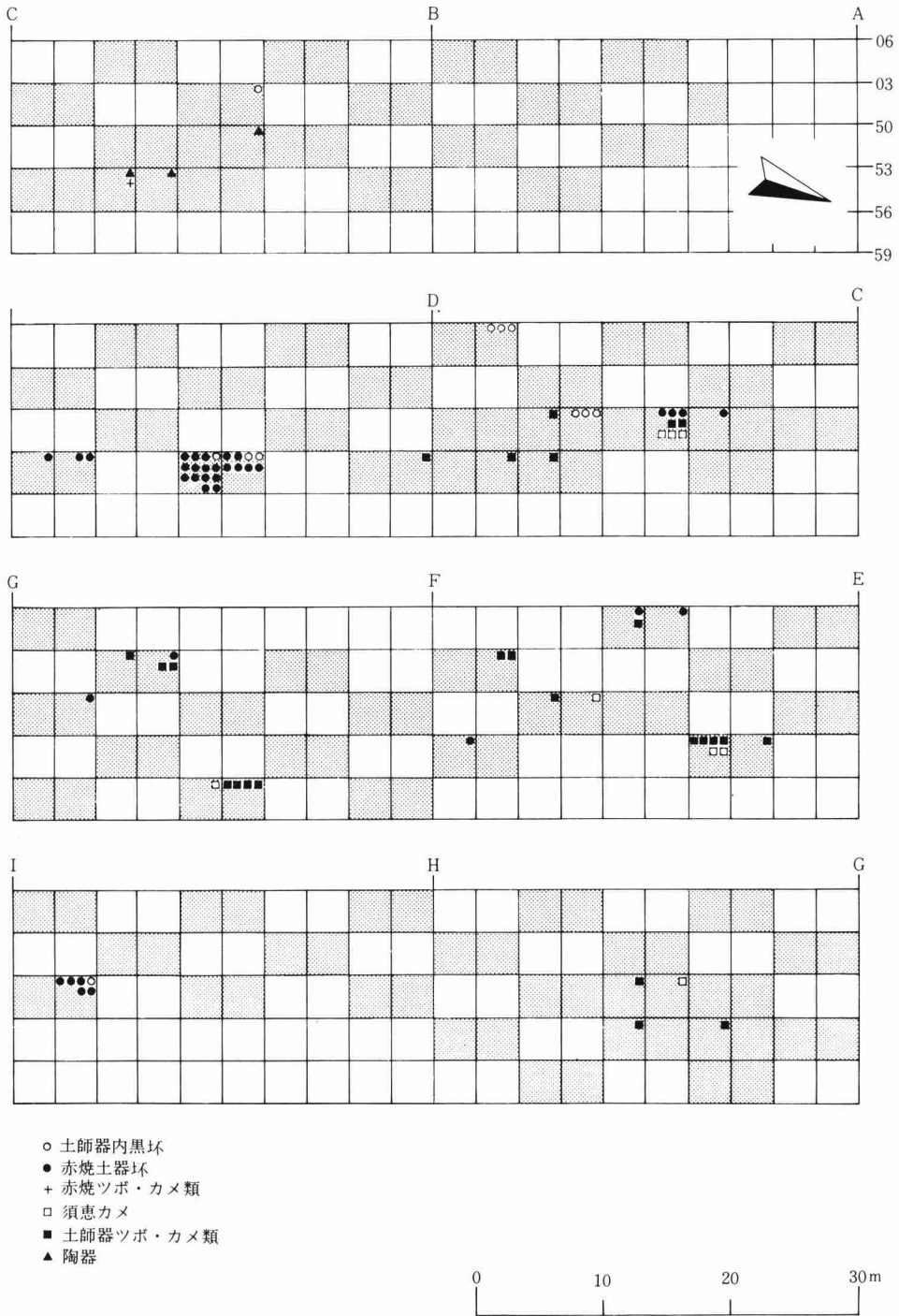
第8層は粘土層であるが還元されているため青灰色を帯びている。この層は第7層の下にはほぼ平坦に堆積している模様である。その層厚は0.1 m以上あるらしいが、地下1.4 mまで実施



(CE 50 グリッド付近)

(第1図) 基準土層図





(第3図) グリッドの遺物出土状況図

した深掘りの範囲では層厚を確認できなかった。

以上の堆積土層中、人工遺物の含まれている層は主として2層と3層である。この2つの層中には土師器片や須恵器片、陶器片が含まれている。これらの遺物は第2層では上下部を問わず全層に渡って含まれているが、第3層では上部に集中して含まれる傾向が見られる。このような事実から、この遺跡の営まれた時期の生活面は、これらの層中にあると考えられる。

〔2〕 発見された遺構と遺物

(1) 遺 構

今回の調査では遺構の存在を確認することはできなかった。発見された遺物の総数は84点であるが、これらの遺物は調査区の全域から分散した形で出土した。その出土状況は第3図に示す通りである。図でも解るように一部には何らかの遺構の存在を予想させるような遺物分布が見られた。しかし調査の過程では明瞭な遺構の発見はできず、遺構と遺物の関連を明らかにする事はできなかった。

(2) 遺 物

今回の調査で発見された人工遺物の総数は84点である。84点の遺物の内わけを見ると、第一表からも解るように、近世の陶器3点を除いては全て平安時代の土器類で占められている。これらの遺物は大部分が細片で、その全形を直接知り得る資料はほとんどない。

(a) 平安時代の土器類

出土した土器類はほとんど従来「ロクロ使用後の土器類」として分類され、平安時代に位置づけられている土器類である。この土器類はさらに焼成技法および色調などの特徴によって以下の3群に区分される。

A群 爪と同じか、それより軟らかいくらいの硬さの素焼き土器で、色調は黒、黒褐、

第1表 出土遺物一覧表

平	上	内黒 坏	口辺部	1	復元可、実測1	
			体部	5		
			底部	5		
		計	11			
		土師 器類	ツボ・ カメ	口辺部	0	
				体部	18	
	底部			6	体下半含み実測1	
	不明	1				
	計	25				
	土師器計	36				
	安	B 群	坏	口辺部	11	
				体部	12	
底部				13(うち高台2)		
計		36				
土 器		ツボ・ カメ	口辺部	1		
			体部	0		
	底部		0			
計	1					
B群土器計	37					
期	須 恵	坏	口辺部	0		
			体部	0		
			底部	0		
			計	0		
	土 器	ツボ・ カメ	口辺部	0		
			体部	7	下半部実測1	
			底部	1		
			計	8		
須恵器計	8					
平安期計	81					
中 近 世	陶 器	ツボ・ カメ	口辺部	0		
			体部	3		
			底部	0		
			計	3		
中近世計	3					
遺物総計	84					

※ 同一個体のものと思われる破片は数片まとめて1点とした。

橙、黄灰色など呈する。器形としては内黒処理された坏、皿類とか、ツボ、長胴カメ類、小型カメ類などが見られる。胎土は坏、皿類では肌目細かく、混入物も少ないが、ツボ・カメ類では砂の混入が多くなり、肌目も粗いものが多い。従来土師器として分類されている一群である。

B群 A群の土器と同じか、それよりやや硬い非内黒の素焼き土器で、色調は橙ないしにぶい橙色が多い。胎土中の混入物は少なく、肌目も概して細やかである。この土器類は器形がほとんど坏類で占められる。胆沢域などで土師質土器と称されている土器類を含む一群である。

C群 A、B群よりも硬く、たたくと石質の音を発する素焼き土器で、その色調は全て灰色である。胎土中には混入物の見られる場合もあるが、概して少なく肌目のしまりは密である。この土器群は従来須恵器として分類されている一群である。

以上3分類した土器群のうち、B群の土器群はA、C群の中間的な特徴を持っているが、その器種分類上の位置については未だよく解っていないようである。したがって、この土器群は将来的にはAまたはC群の土器群に含まれる可能性も考えられるが、ここでは一応A・C群の土器群から独立させて扱った。

3種の土器群の各々に見られる形態、成形技法上の特徴については、大部分の資料が破片であるため十分な観察はできなかった。そこで、ここでは主として比較的形状の保存状態の良い資料をもとに各土器群の形状について述べる。

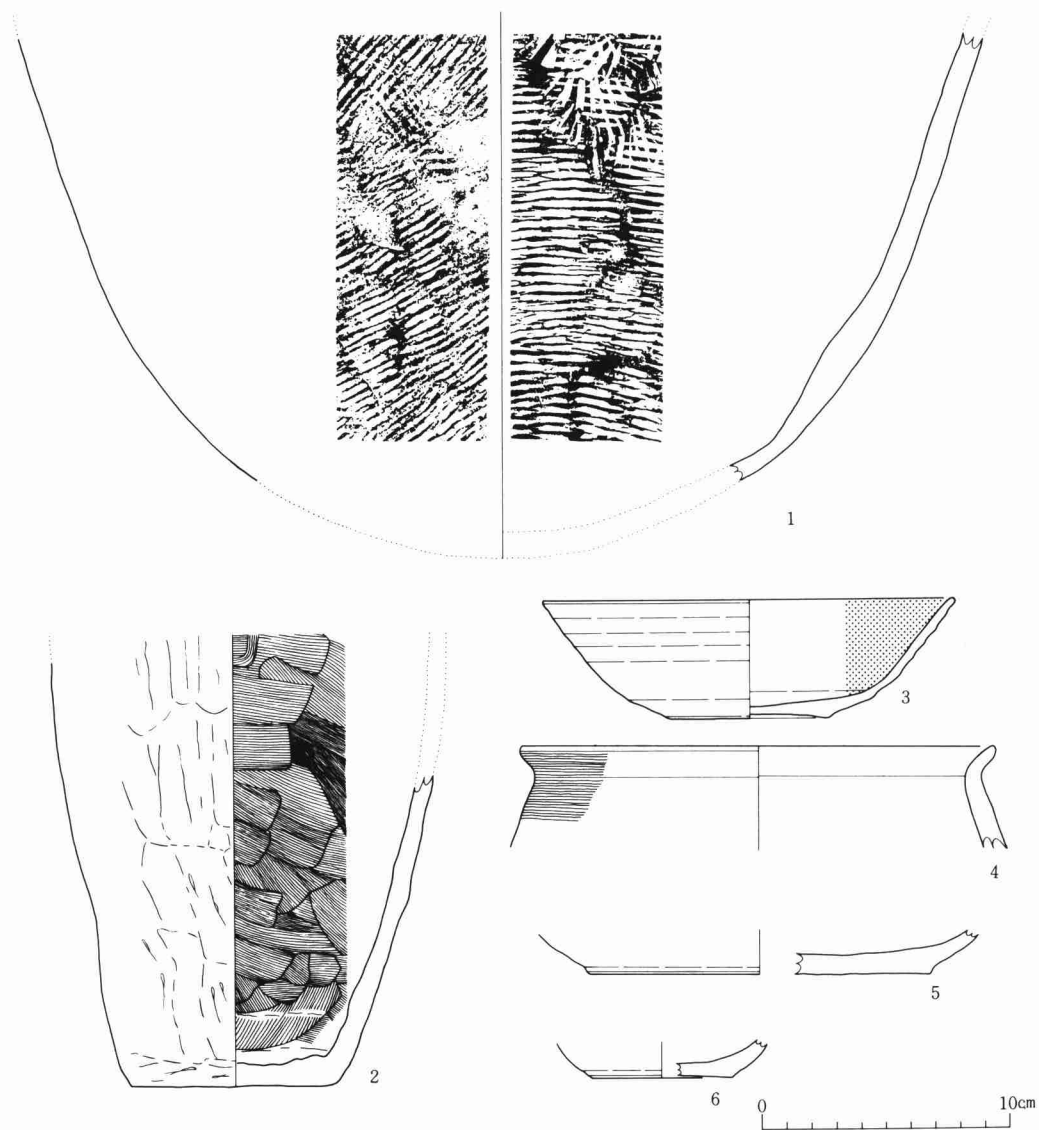
A群の土器

土師器として分類できる資料は37点であるが、その中には内黒処理された坏、ツボ、長胴カメなどの器形が見られる。

内黒杯 (第4図3、写真3-1) この内黒杯は調査区南端のHJ 50グリッドから出土した坏である。坏は口径16.7cm、底径6.6cm、高さ4.8cmを測り、見た感じとして、丈の割に口が大きく外に開いている。器壁は全体的に薄手に作られ、その厚さは体部で0.4cm内外、底部で0.3~0.7cmを測る。器体の成形にあたってはロクロが使用されており、底部に回転糸切痕が見られる。しかし底部切り離し後のヘラケズリなどの調整痕は認められない。また器体の外側の色調は橙色で、焼きが甘く、非常に柔らかい。そのため、摩滅が著しく、内側に施こされたヘラミガキの痕跡はほとんど消えてしまっている。

この坏の他にも同様の坏の破片が11点出土しているが、その中には高台を伴うものも見られる。

長胴カメ (第4図2、写真3-3) このカメはED 53グリッドから出土した。カメの全形は知り得ないが、その底径は8.3cm、残存胴部の最大径は15.9cm、残存部の最大高は18.5cm、



(第4図) 各グリッド出土遺物実測図

第2表 実測遺物一覧表

図面番号	写真番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	出土グリッド	備考(調整、その他)
4-1	3-4	須恵器	大型ツボ	-	-	残存約 17.0	ED 53	
4-2	3-3	土師器	長胴カメ	-	8.2	約 18.0	ED 53	
4-3	3-1	"	内黒坏	16.6	6.4	4.8	H J 50グリッド	
4-4	-	B群土器	カメ	19.0	-	残存約 4.0	E I 03	
4-5	-	"	坏?	-	(推) 13.7	-	DF 53	落合IのAⅢ-1a類と同じ
4-6	-	"	坏	-	(推) 5.6	-	CE 03	"

器厚は0.7cm～1.2cmをそれぞれ測る。器壁の色調は内外とも黒褐色を帯びており、胎土には砂が多く混入している。器体は輪積みないし巻き上げによって成形されており、その痕跡が内側の底辺部に見られる。さらに器体の内面には全面にわたって、横方向の刷毛目が時計廻りに施されているが、一部にはたて方向の指ナデ痕も認められる。また外側には全面にわたって、たて方向のへら削りが底から口辺部に向って施されている。以上のように器体の上部にどのような口辺部が着いているのかは、今回の調査で良好な資料が得られなかったため解らない。

本例以外のツボ、カメ類の資料は細片で摩滅が著しく、その製作技法の知られるものはほとんどない。ただ底部資料の中に小型のカメ類の底部と思われるものがあり、その資料には糸切痕が見られる。

B群の土器

ここに分類された資料は36点あり全て細片であるが、その器形はほとんど坏類である。

杯類 全形の知られる資料は発見できなかった。器厚は体部で0.4cm内外、底部で0.4～0.8cm内外を測る。その色調は先の分類の項でも述べた通り橙色から、にぶい橙色を呈しており、一部には黄灰色の個体も見られる。ほとんどの器体にはロクロ成形の痕跡が認められ、底部には糸切り痕を有し、高台を伴うものもある。内黒処理は全く見られない。

カメ類 (第4図4) カメ類の口辺部と思われる資料が1点ある。このカメはEI03グリッドから出土した。その残存器厚は0.4～0.8cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。器体の内外には横方向のナデ痕を有する。その成形技法は輪積みと思われるが、はっきりわからない。このカメは上端部の縁が1cm内外の巾で外反してくびれ、口辺部を形成している。その硬さはほとんど須恵器に近い。

C群の土器

須恵器として分類された資料は8点ある。そのうち6点は叩き目などの存在により大型壺類の胴体部破片と推定された。残りの2点はやや小振りのツボ、カメ類ないしは長頸瓶の底部と推定された。

大型ツボ (第4図1、写真3—4) ED53グリッドからは大型ツボの胴体下部の破片が出土している。このツボの全形は不明であるが、器厚は0.9～1.4cmあり、色調は灰色を帯び、よく焼きしまり、叩くと石質の音がする。器体の内外両面には全体にわたって叩き目が見られる。その叩き目は外側では主として右上がりの平行叩き目であるが、ところどころに、それに直交する叩き目も見られる。また内側では底辺部に横方向の平行当て痕だけが見られ、それより上では菊花状当て痕が主体を占めている。

この資料以外の大形ツボ類の破片にも同様の叩き目が見られる。しかし、1点だけであるが、外部に叩目がなく、へらケズリが施されているものもある。

—中屋敷遺跡—

その他の破片 前述のように、小型のツボ、カメ類あるいは長頸瓶の破片と思われる細片である。2点出土しているが、そのうちの1点には糸切痕が見られる。

(b) 近世以降の陶器類

近世の陶器と考えられる土器は、調査区域北側から3点出土しているが、全て破片である。そのうち1点は小型のツボ類の胴体部で、もう2点は火鉢の口辺部の破片である。

ツボ類の破片の胎土は、緻密でよく焼きしまり硬くなっている。器壁の外側には暗赤褐色 (Hue 5 YP³/₆) の釉がうすくかかっており、無文である。産地は今のところどこかの地方窯であるという以外不明である。

火鉢の破片はBG 53、BH 53より出土している。その胎土は灰白色であるが、素地のしまりは前者よりやや粗である。この破片は器壁の内外に透明なガラス質の釉がかけられ、外側には、沈線によって松葉状および枝状の文様が施されている。この火鉢の産地は、瀬戸ないし美濃窯である可能性が強い。(写真3-2)

4. まとめと考察

(1) 中屋敷遺跡は昭和47年度の分布調査によって、古代集落跡の存在が予想されていた遺跡である。しかし、今回の発掘調査では平安時代の土器片の出土を見たものの、集落に関連した遺構は発見できなかった。したがって今のところ、この遺跡が古代集落跡であるかどうか不明である。しかし、調査区全域に涉って土器片が広く分布することから、付近に平安時代の遺構の存在する可能性が大きいと考えられる。

(2) 土器片の出土状況を見ると、ほとんどの土器片が分散した形で出土している。そのため、これらの土器片が、全て同一時期内に含まれる遺物かどうかは即断できない。むしろいくつかの異なる時期の遺物である可能性が強い。例えば先にのべたA群の長胴カメは製作技法から見ると、江釣子村猫谷地遺跡の第一様式ないし第二様式のそれに類似している。この様式の長胴カメは現在のところ、8世紀中頃以降、9世紀後半に到る期間内に属すると考えられている。

さらに坏について見ると、坏には土師器の内黒坏と土師質土器の坏の二種が見られ、須恵器の坏は全く見当たらない。二種の坏に類似した坏は、先の猫谷地遺跡の第三様式の土器群の中に認められる。この土器群には現在のところ、9世紀後半～10世紀初頭頃の年代が与えられている。ところで猫谷地第三様式の土器群には須恵器の坏を伴うが、今回出土した坏類には須恵器の坏が見られない。この事は中屋敷遺跡の坏群が、上記年代よりさらに下降した土師質土器盛行期に入る可能性を示唆するものと思われる。

その時期としては平泉の寺院跡の坏などの年代的な関係から、広く、10世紀後半以降11世紀後半くらいの年代が考えられる。

このように出土遺物の間に所属年代の差が認められるという関係から、この遺跡の営まれた時期が少なくとも2時期に渡る事が推定される。ただしこの推定は、遺物間の共存関係を充分確認しないまま行なったものであり、今後、各種の資料をもとに再検討してゆく必要がある⁽²⁾。

(3) また、胆江地方の古代遺跡の性格を考える上で、是非とも考慮しておかなければならない重要な問題は、胆沢城跡との時間的前後関係、あるいは地理的位置関係である。しかしこの問題についてはさまざまな資料的な検討が必要である。そこで、今回の報告では、この点についての意見を保留し、類似遺物が胆沢城からも出土しているという事を指摘するに留めたい。なお、この問題については、後日発刊される、落合Ⅱ、宮地などの報告書で包括的に触れられるであろう。

参考文献

- (1) 小山 正忠、竹原 秀雄 「新版標準土色帖」5版 日本色研事業株式会社 1976
- (2) 阿部 義平 「東国の土師器と須恵器 一多賀城外の出土土器をめぐって—」
『帝塚山考古学』No.1 帝塚山考古学会 1968
工藤 雅樹、桑原 滋郎 「東北地方に於ける古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第3号
日本考古学会 1972
伊藤 博幸 「岩手県の古代土器生産について 一須恵器とロクロ土師器の素描—」
『岩手史学研究』No.61 岩手史学会 1976
高橋 信雄 「岩手県のロクロ使用土師器について」『考古風土記』 1977
沼山源喜治 「北上市出土土師器考 一北上川中流域を中心として—」『北上市史』
第一巻原始・古代 1968 北上市史刊行会
佐久間 豊 「奈良・平安期土器の型式学的分析」『考古学研究』98 1978 考古学研究会
沼山源喜治 「東北北部の歴史時代の土器」 東日本に於ける古代土器シンポジウム発表資料
1978.1.8 (於 宮城県多賀城市東北歴史資料館)
沼山源喜治 「胆沢城址出土の糸切轆轤土師とその編年的考察」『北奥羽古代文化』第2号 1969
北奥羽古代文化研究会
- (3) (2)と同じ文献による。

ちから いし 遺 跡
力 石 遺 跡

遺 跡 記 号 : C I

所 在 地 : 江 刺 市 愛 宕 字 力 石 433 他

調 査 期 間 : 昭 和 49 年 4 月 8 日 ~ 4 月 18 日

調 査 対 象 面 積 : 2240m²

平 面 測 量 基 準 点

東 京 基 点 : 430.960km (B A 50)

1. 遺跡の位置と立地（第V図P.51 第VI図P.53）

力石遺跡は江刺市愛宕字力石にあり、江刺市の中心部（岩谷堂）から南方1.5kmの地点に位置する。

県北に源を発する北上川は、かつては胆沢地方に入り大きく蛇行をくりかえし、広範な河谷平野を形成している。両岸にわたる幅は1～4kmに及び、東岸沿いにより広く発達する。当該地は通称江刺平野と呼ばれ、県下有数の米の主産地として名高い。

愛宕地区は江刺平野の中心部を占め、北上川とその支流である広瀬川・人首川・伊手川の氾濫原となっている。周囲には多くの旧流水路が残っており、北上川の流路の変遷をしのばせている。また、度重なる氾濫の作用として自然堤防もよく発達しており、数多くの微高地を形成している。

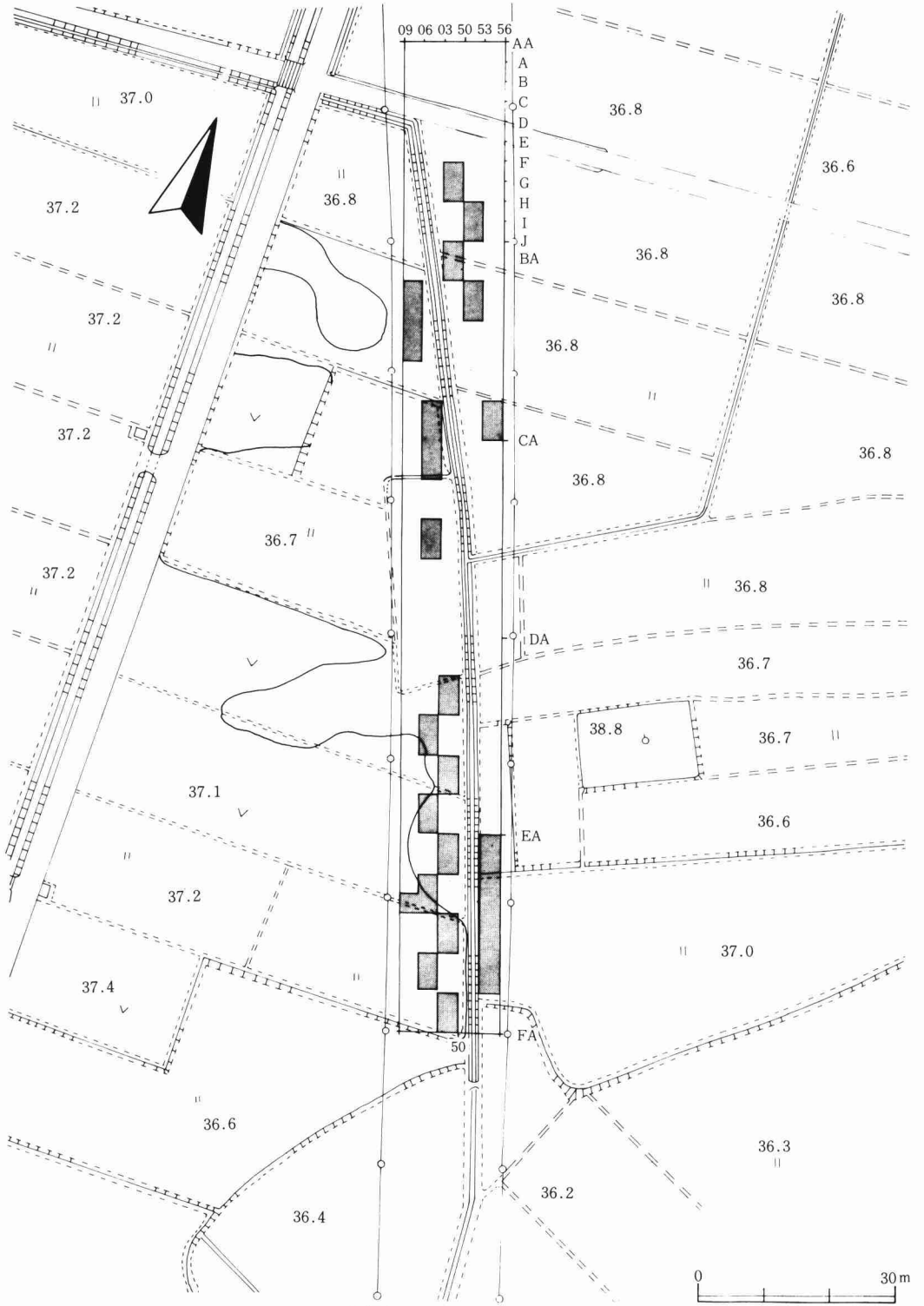
弥生時代に始まる多くの集落がこうした微高地上に営まれており、力石遺跡もその一つである。本遺跡の立地する微高地の中央部の標高は38m±であり、周辺に向かって緩やかに傾斜している。今回の調査区域は東縁の緩斜面に限られ、標高は37m±となっている。遺跡の現況は水田と畑地であり、低位の水田面との地高は50cmにみたない。

2. 調査の経過（第1図）

路線敷内の東西18m×南北132mの範囲に、新幹線の2本の中心杭（430.86km・430.96km）を基準として1辺3mのグリッドを設定し、2グリッドを1つの単位として粗掘を行なった。当初は微高地上に限って調査の対象としたが、低位の水田面も水田化に際して遺物が出土したとの説明を受け、合わせて調査の対象に加えた。合計2,240㎡に及ぶ対象面積のうち約423㎡を発掘した。

発掘の結果、遺物破片の出土のみで遺構は検出されず、11日間という短期の調査期間をもって終了した。

—カ石遺跡—



(第1図) カ石遺跡グリッド配置図

3. 調査の結果

(1) 基本層位 (第2図)

力石遺跡の基本層序は3ヶ所の試掘坑の調査結果から、基本的には次下の4層に大別される。

第Ⅰ層：褐色(10 YR 4/4)を呈するシルト質土で2層に細分される。

Ⅰa—耕作土であり、水田・畑地として利用されている。層厚20cm±。

Ⅰb—遺物の出土する層。場所によって層厚が異なり、ほとんど確認されない箇所もある。層厚10cm±。

第Ⅱ層：シルト質土で3層に細分される。

Ⅱa—にぶい黄褐色(10 YR 5/4)土。シルト。Ⅰb層に含まれる遺物はこの層には認められず、遺構検出面にあたる。下部に暗褐色の植生痕を多量に含む。層厚15cm±。

Ⅱb—褐色(10 YR 4/6)土。粘土質シルト。下部に向かうほどシルト分が強まり、色調も暗くなる。層厚50cm±。

Ⅱc—褐色(10 YR 4/6)土。シルト。Ⅱb層との境界は不明瞭。Ⅲa層との層理面上では砂分が強まる。層厚35cm±。

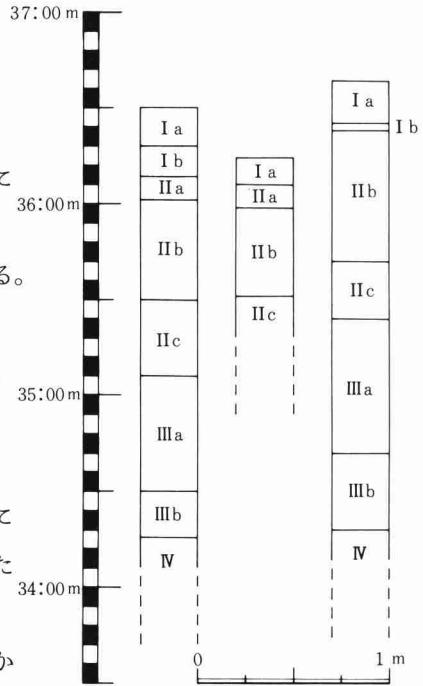
第Ⅲ層：砂層で2層に細分される。

Ⅲa—褐色(10 YR 4/6)土。砂質粘土。砂は細砂。下部に向かうほど粘土分が強くなり、色調が黄褐色(10 YR 5/6)に近くなる。層厚70cm±。

Ⅲb—黄褐色(10 YR 5/6)土。砂。Ⅲa層の砂より若干荒くなる。層厚25cm±。

第Ⅳ層：砂礫層。湧水のため観察不可能。

なお、粗掘はⅡa層上面まで行なった。ただし、遺物が比較的少量に出土したグリッドはⅡa層をも部分的に掘り下げている。



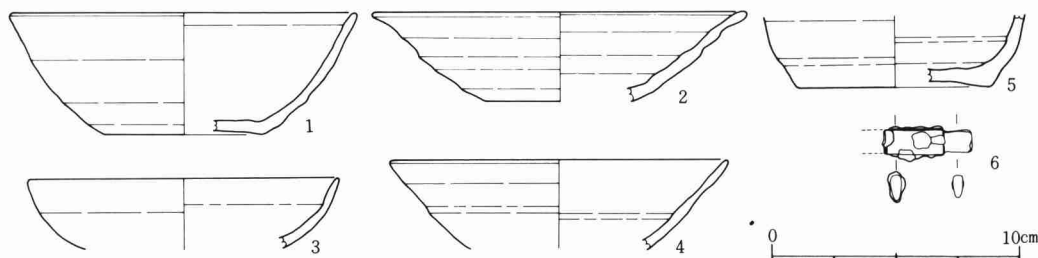
(第2図) 土層柱状模式図

(2) 出土土器 (第3図・第1表)

〔土器〕

出土土器は土師器、須恵器、赤焼土器^{注1)}からなり、破片数で合わせて200片を越える。これらの小破片数を個体数におきなおい、器種ごとの分類を試みたのが第1表である。しかし、対象

一カ石遺跡一



(第3図) 出土土器実測図

- 1. 須恵器 坏 (EAB03)
- 2. 赤焼土器 皿 (EF03)
- 3. 赤焼土器 坏 (BC50)
- 4. 赤焼土器 坏 (EB56)
- 5. 土師器 甕 (EAB03)
- 6. 刀子 (EB56)

第1表 出土土器分類表

土 器		グリッド		B	B	C	D	D	D	E	E	E	E	E	E	計	比 率 (%)	
				C	E	H	C	E	G	I	A	A	B	C	F			G
				5	0	5	0	F	H	0	A	5	5	0	0			
				0	9	3	3	0	6	6	3	6	6	3	3			
土 師 器	坏	個 体 数				4	1			1	5	2	1		7	21	12.9	
		ロクロ使用	有	再調整有			(2)	(1)				(1)				(3)	(7)	(4.3)
				再調整無												(1)	(1)	(0.6)
				不明			(2)					(4)	(2)	(1)	(2)	(11)	(6.8)	
			無							(1)				(1)	(2)	(1.2)		
	高台付坏	個 体 数												1	1	0.6		
	甕 (大)	個 体 数					1		3	2	3	12	11	4	12	2	50	30.9
		ロクロ使用	有							(1)	(1)	(3)	(1)	(2)		(8)	(4.9)	
			無				(1)		(2)	(1)	(2)	(8)	(10)	(1)	(10)	(1)	(36)	(22.3)
			不明						(1)			(1)		(1)	(2)	(1)	(6)	(3.7)
甕 (小)		個 体 数					1				1	2			1	5	3.1	
	ロ使用	有								(1)	(1)			(1)	(3)	(1.9)		
		無				(1)					(1)				(2)	(1.2)		
赤 焼 土 器	坏	個 体 数		1		3	1		1	7	1	5	1	7	27	16.7		
	高台付坏	個 体 数								2					2	1.2		
	皿	個 体 数								1	1			1	3	1.9		
須 恵 器	坏	個 体 数				1				6	1			3	11	6.8		
	高台付坏	個 体 数								1					1	0.6		
	甕 (大)	個 体 数		1	1		7	1	2	1	3	5	2	6	5	34	2.1	
	甕 (小)	個 体 数										1	1	4	1	7	4.3	
計				2	1	8	11	1	6	4	29	25	20	5	42	8	162	100
比 率 (%)				1.2	0.6	4.9	6.8	0.6	3.7	2.5	17.9	15.5	12.4	3.1	25.9	4.9	100	

注(1) 赤焼土器の坏と皿の器種分類は、口縁径と器高の比が3.33以上になるものを皿として分類してある。

(2) 須恵器の甕としたもののなかには他の器種が含まれる可能性がある。

となる土器がすべて細片であることから、かなり内容の粗い表となっている。

土師器は全体の出土個体の約半数を数え、そのなかで大形の甕が大部分を占める。坏はロクロ未使用のものも2点含まれるが、そのほかはロクロによる成形であり、底部の残る破片のなかでは1点を除き手持ちのヘラケズリを施している。甕は大形の甕が圧倒的に多いが、全体の器形を知りえるものはない。残存部が体部に限られるものが多いため、ロクロの使用の有無は正確には把握できないが、おおむねロクロ未使用のものが多数を占める。ロクロを使用しているものは、体部上半の破片には刷毛目状のロクロナデ痕を残し、下半の破片にはヘラケズリの調整痕を残している。小形の甕は絶対量は少ないが、ロクロ整形によるものが多い。そのほか、高台付の坏が1点出土している。

須恵器の坏は出土数も少なく、さらに小破片であることから細部の観察は困難であるが、底部の残存するもの4点のうち、1点が回転ヘラ切り無調整、2点が回転糸切り無調整となる。残りの1点は体部下端より底部全面に手持ちのヘラケズリを施している。甕数は口頸部の破片がなく、体部の小破片に限られる。したがって他の器種を含んでいる可能性もあるが須恵器のなかで大半を占める。厚手のものと薄手のものがあり、さらに叩き目文などにより数種類に分類できる。

赤焼土器として分類したものには坏・高台付坏・皿の2種3器形がある。色調は赤褐色ないし明褐色を呈し、坏の口縁部形態等において若干の違いはみられるがすべて一括してある。出土個体数は相対的に少なく、そのなかで坏が最も多い。

〔陶器〕

中世陶器と思われるものがEF03グリッドより1点出土しているが特徴的なものがないため具体的なことはわからない。

〔鉄器〕

EB56グリッドより刀子の破片が1点出土している。

以上概観的にみてきた出土土器のなかで中心を占めるのが、再調整のある土師器坏とロクロ未使用で外面に刷毛目等の調整痕を残す大形の土師器甕、ないし上半がロクロ調整で下半がヘラケズリ調整の土師器甕という組み合わせである。さらに小量ではあるが回転糸切り無調整の須恵器坏に混って、回転ヘラ切り無調整の須恵器坏も出土している。こうした組み合わせの土器を出土する遺跡は本遺跡^{注2)}の周囲にも多くみられ、9世紀の中頃を中心とするものと考えられる。

4. ま と め

力石遺跡は過去の発掘調査において集落址であることが確認されており^{注3)}、何らかの遺構の検出が想定されていた。しかし、今回の調査結果は遺物の出土のみで遺構の検出には至らなかった。出土した土器がすべて摩滅した破片であること、さらには調査区域が微高地上の東側緩斜面の東縁から低位水田面にかけて設立されていることから、今回の出土遺物は上部平坦面の遺跡中心地からの流れ込みと思われる。

出土遺物からみる限り、遺跡の絶対年代は9世紀の中頃から後半代にかけて求められるものであろうが、遺構に伴う遺物が皆無であり、それ以上のことは不明である。

注1) 赤焼土器としたものは、色調が赤褐色ないし明褐色を呈し、成形・調整はロクロを使用し、底部切り離しは回転糸切技法によるもので、内外面とも黒色処理やヘラミガキ等の再調整が施されていないものである。

注2) 本遺跡と同一微高地上に立地する力石Ⅱ遺跡①、北方約0.7 kmの地点に位置する落合Ⅲ遺跡②、北方約1.2 kmの朴ノ木遺跡③、及び北方約2 kmの宮地遺跡④などが知られている。

① (財)岩手県埋蔵文化財センター「力石Ⅱ遺跡現地説明会資料」1978

②③ ” 「落合Ⅲ・朴ノ木遺跡現地説明会資料」1978

④ 岩手県文化課 「宮地遺跡現地説明会資料」1976

注3) 江刺市教育委員会が、1972年に発掘調査を行なっている。未報告

おち
落

あい
合

I 遺 跡

遺 跡 記 号 : OAI

所 在 地 : 江刺市愛宕字落合99他

調 査 期 間 : 昭和49年4月18日~8月6日

調 査 対 象 面 積 : 2560m²

平 面 測 量 基 準 点

東 京 基 点 : 431.600km (DA50)

基 準 高 : 海 拔 38.60m

I 落合 I 遺跡の位置と地形 (第 V 図 P 51 第 VI 図 P 53)

落合 I 遺跡は江刺市の中心街から南方に約 2 km 離れた同市愛宕^{おだか}字落合地内に位置している。遺跡所在地は落合の集落のある微高地の西辺部にあたり、近くには落合 II、III、兎^{うさぎ}、力石などの各遺跡が南北に並んでいる。

遺跡付近の高度は海拔 38 m 前後で、まわりの水田面より 1 m 内外高くなっている。微高地上は現在畑地や宅地として利用されているが、一部はポンプ揚水によって開田されている。

II 調査の方法と経過

1 方法

調査の方法は全て序文の 2 で述べた方法に準じた。なお調査区内の平面測量基準原点は東北新幹線ルート中軸線上の東京起点 431 K 600 m の地点上に設定し DA 50 と名づけた。さらにこの点と東京起点 431 K 580 m を結ぶ直線を想定し、この直線を調査区全体の地割基準線とした。

以下、DA 50 とこの直線を基準にして、調査区全体に 3 m × 3 m 単位の方眼地割を設定した。また高度測量に当たってはその基準高度をできる限り海拔 38.60 m に統一するよう、心がけた。

2 経過

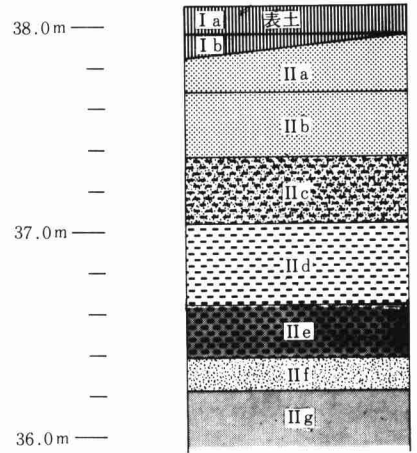
今回の調査の対象になった区域は昭和 47 年度の分布調査の際、確認された遺跡範囲のうち、東北新幹線用地にかかる遺跡西側部分の長さ 175 m、巾約 15 m、総面積 2,560 m² の部分である。

調査は昭和 49 年 4 月 19 日から 8 月 5 日まで行なった。そのうち 4 月 19 日から 6 月 10 日までは遺構検出のために粗掘りを行なった。調査区内の基準測量は粗掘り作業と併行する形で 19 日から 5 月 10 日まで断続的に行なった。さらに検出遺構の調査を 4 月 23 日から始めた。各遺構の調査は江刺地方の平野部一帯に特有の土層堆積のため、遺構の範囲確認が難しく、著しく難行した。その上調査期間が春先の乾燥期から梅雨期にかかっていたため、当初は土の乾燥に悩まされ、後には降雨や水田浸透水のため、度々遺構の水没に悩まされた。以上のような理由から、各遺構の調査期間が予定より大巾に延びて、調査開始後 3 ヶ月半を経た 8 月 5 日ようやく終了した。また同様の理由により、調査記録上、いくつかの不備が生じた。

Ⅲ 調査の結果

1 基本層序

遺跡付近の土層堆積状況を知るため、調査区の北部に1ヶ所、南部に1ヶ所の計2ヶ所に土層観察用トレンチを設けた。その結果、土層の構成上、北部と南部では若干の違いが認められるものの、大差のない事が知られた。そこで、ここでは今回の調査で遺構が多く検出された北部の土層堆積状況について見てゆく事にしたい。調査区北部の遺構集中区域に設けられたCH50グリッド内の土層を柱状模式図で表わすと第1図のようになる。各土層の特徴について述べるとおおよそ次の通りである。



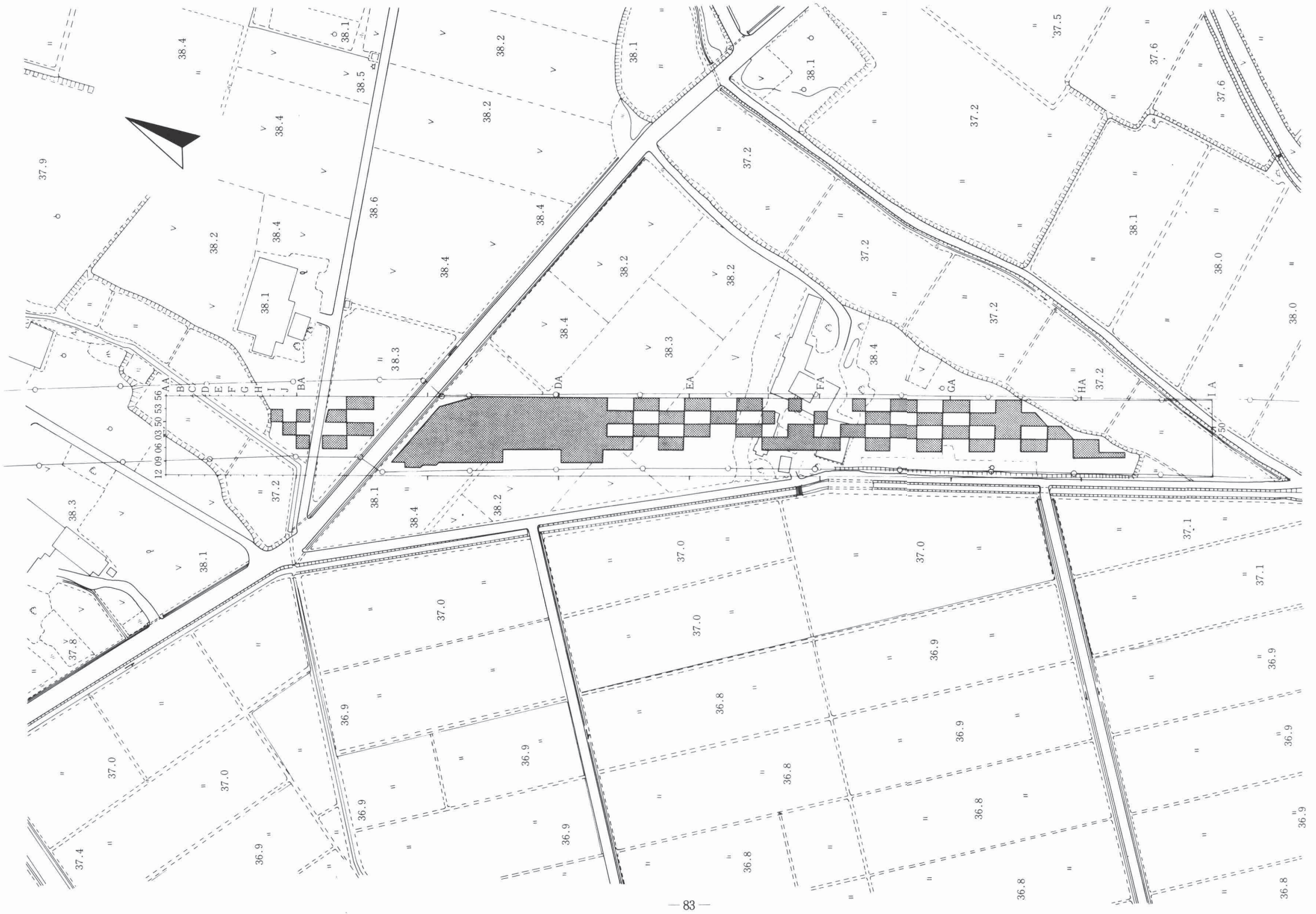
(第1図) 土層柱状模式図

I 表土層(耕作土層)

- Ia 黒褐色 (Hue7.5 YR3/1) 軽埴土。水田耕作土で植生根が多く含まれ、遺物としては土器片が少量含まれる。層厚 0.08 ~ 0.12 m
- Ib 暗褐色 (Hue7.5 YR3/4) 軽埴土。水田耕作土であるが a より攪乱されていない。植生根も a より少ない。遺物としては炭化物、土器片が含まれる。層厚 0.12 m 内外。

II 攪乱されていない土層

- IIa 褐色 (Hue10 YR4/6) シルト質軽埴土であるが粘りは弱く、層全体のしまりはやや粗で、指で押すと圧痕がつく。遺物を含まない。層厚は 0.15 ~ 0.28 m。
- IIb 褐色 (Hue10 YR4/4) IIa、IIc 層より暗い褐色の砂土層。粘土とシルトを少量含む。遺物は含まれず、下部では IIc 層に漸移していくように見える。層厚 0.3 m 内外。
- IIc 褐色 (Hue10 YR4/6) IIb 層より明るい褐色のシルト混じり砂質埴土層である。遺物は含まれない。層厚は 0.32 m 内外。
- IId 明褐色 (Hue10 YR5/6) 埴土層。遺物は含まれない。層厚 0.4 m 内外。
- IIe 褐色 (Hue10 YR4/4) シルト質埴土。砂が少量混っている。層厚 0.25 m 内外。



(第2図) 落合I遺跡グリッド配置図

II f 暗褐色 (Hue7.5 YR3/4) 粗砂層である。層厚 0.15 m内外。

II g 褐色 (Hue10 YR4/3) シルト質軽埴土。砂の混入量がやや多い。厚さは 0.25 m以上であるが、その下限は不明である。

以上の土層のうち、発見された各遺構の検出面は主としてII a 層上面に集中しており、多くの遺構はそこからII a～II c 層中に切り込まれている。また遺構外の出土遺物も表土層のもの以外、ほとんどII a 層上面～上部付近から発見されている。

なお層序説明の項で特記すべき事は遺構の埋土と地山層との関係である。つまりこの遺跡では遺構の埋土と地山がほとんど同質同色である。そのため、経過説明の項でも述べた様に遺構の検出や範囲確認が非常に難しい。なお同様の遺構、埋没状況は落合 I 遺跡ばかりでなく江刺平野に立地する各遺跡に共通して見られる。その成因については洪水、その他の要因が考えられるが、確実な成因は今のところよく解らない。

2 発見された遺構と遺物

〔1〕 弥生時代の遺構と遺物 (第3図、写真13-1～6)

今回の調査では弥生時代の遺構の存在が確認されていない。しかし弥生時代の遺物は調査区内の各所で後世の遺構の埋土中に粉れ込んだり、あるいは遺構外から遊離した形で単独に出土している。これらの遺物は出土点数も少なく、確実に遺構に伴うと認められるものでもない。従って、ここではその中から代表的な資料を選び、それを中心に出土遺物の説明を行なう。

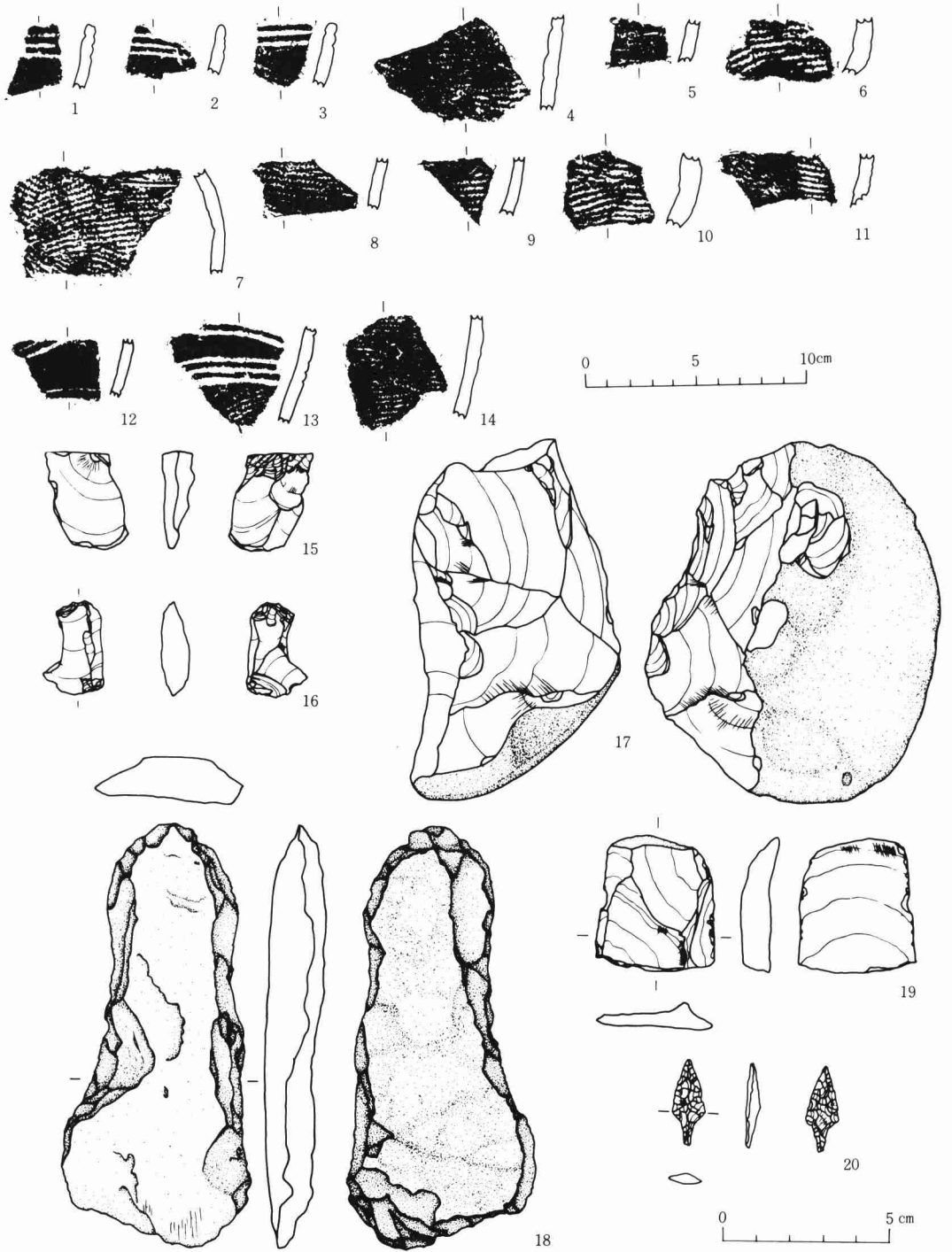
〈土器〉 弥生時代の土器は全て破片で、合計 103 点出土している。そのうち摩滅が少なく器面に施された文様の残りが比較的良好な資料を第3図 1～14に掲げた。これらの土器片は、いずれも鈍い橙色～赤褐色を呈し、胎土は砂混りでややもろくなっている。

文様はほとんど土器の外面に施されているが、口辺部の内側に沈線の見られる場合もある。文様の種類としては口辺部や脚部の資料では無文の地に 1～3 条の平行沈線の施されている例が見られる。(1、2、3、12、13) そのうち 1、3 ではさらに土器の内側に口辺に平行して 1 条の沈線がめぐっている。また胴部の破片では器面全体に単節の斜縄文が隙間なく施されている。この斜縄文は $L < \frac{R}{R}$ の原体が斜め方向に転がされ、その圧痕が横方向に並ぶ様に調整施文されている。(4、5、6、7、8、9、10、11、14)

以上の様な特徴を有する土器類は江刺市沼の上¹⁾、一関市谷起島²⁾などからも出土しており、弥生時代中期前半に属するものと推定される。

〈石器〉 弥生時代の石器類と思われる資料は 4 点出土している。そのうち 18 (写真 13-5) は CE 15 グリッドから出土した掘具と思われる打製の石斧状石器である。この石器は粘板岩の扁平な礫を打ち欠いたもので、片面には礫の自然面を残している。器面の小剝離調整は頭部及

—落合 I 遺跡—



(第 3 図) 弥生時代遺物実測図

第 1 表 弥生時代の土器類の説明表

図版番号	写真番号	出土遺構名・層位	推定器形	残存部	施文状の特徴
3-1	13-6	B J 06 住 I 期 P ₁ 埋土	小型浅鉢類か	口辺部	三条の平行沈線、さらに内側に一条の沈線
3-2	"	B J 09 住 II 期埋土	台付土器	脚部	三条の平行沈線
3-3	"	B J 09 住 II 期埋土	小型浅鉢類か	口辺部	二条の平行沈線、さらに内側に一条の沈線
3-4	"	"	ツボ深鉢類	胴部	横位の縄文、L< ^R _R 原体の斜め回転
3-5	"	C D 50 住居跡埋土	浅鉢、台付土器類	"	横縄文、L< ^R _R 原体の斜め回転
3-6	"	C B 03 ビット埋土	ツボ、カメ類	胴下部	"
3-7	"	C C 03 ビット埋土	ツボ	胴上部	"
3-8	"	C D 50 住居跡埋土	ツボ、カメ類	"	"
3-9	"	"	"	"	"
3-10	"	C J 06 ビット埋土	"	"	"
3-11	"	B I 09 溝西部埋土	"	"	"
3-12	"	"	小型浅鉢類	口~胴上部	斜めに二条の沈線、平行に一条の沈線
3-13	"	B I 09 溝東部埋土	"	口~胴上部	斜めに一~二条の沈線、水平に三条の沈線、斜縄文、L< ^R _R 原体の横回転
3-14	"	"	ツボ、カメ類	胴部	横縄文、L< ^R _R 全体の斜め回転

第 2 表 弥生時代の石器・石材一覧表

<石器>

図版番号	写真番号	出土遺構	器種	最大長	最大巾	最大厚	重さ	材質
3-18	13-5	C E 53 グリッド	石斧状打製石器	12.7cm	5.7cm	1.7cm	125.5g	粘板岩
3-19	13-4	C B 09 ビット(1)	ナイフ類?	4.0	3.5	0.9	11.6	硬質頁岩
3-20	13-4	C D 50 住居跡	石鏃	2.6	1.7	0.4	0.6	"

<石材>

石材	写真番号	出土遺構	種別	最大長	最大巾	最大厚	重さ	材質
3-15	13-3	C B 03 ビット(1)	フ レ ー ク	2.9cm	2.5cm	1.0cm	4.9g	硬質頁岩
3-16	13-3	C D 50 住居跡	"	2.8	1.8	0.9	3.5	"
3-17	13-1.2	B E 53 グリッド	コ ア	10.0	9.5	5.4	539.0	"
-	13-1.2	C G 03 グリッド	"	9.5	10.0	5.5	456.0	"
-	13-3 ^(上右)	C B 09 ビット(1)	フ レ ー ク	3.7	3.5	0.9	10.6	玉ずい
-	13-3 ^(下左)	C D 50 グリッド	"	4.6	4.1	0.9	17.0	硬質頁岩
-	13-3 ^(下右)	C J 06 ビット(1)	"	2.7	2.6	1.0	7.4	"

—落合 I 遺跡—

び左右両側面に対して行なわれ、刃部には見られない。なお刃部の自然面の残る側には縦方向の擦痕が認められる。

19 (写真13-4 左) は C B09ピット(1)から出土した扁平なフレークで、片面に大剝離面を残している。その裏面の片側にはチップングが施されている。おそらくナイフ状石器の破片であろう。

20 (写真13-4 右) は C D 50住居跡の埋土中から出土した細長の有茎石鏃である。この石鏃はほぼ完形で、その両面全体に細かな剝離加工がなされている。

その他、図示しなかったが C E03グリッドからは硬質頁岩製の打製石槍の先端部と思われる資料が出土している。その残存長は 2.6 cm、最大巾 1.5 cm、最大厚 0.2 cmを測り、全体に剝離加工が施されている。

<石材> 石器の素材と思われるフレークやコアは合計 7 点出土している。そのうち 5 点はフレークで、残り 2 点がコアである。これらの石材の石質はめのう 1 点を除いて、あとは全て硬質頁岩類で占められている。15、16 (写真13-3 左上) は、各グリッド内から出土したフレーク類である。いずれも二次的な加工の痕跡は見られない。17 (写真13-12左) は B E53グリッドより出土したコアである。このコアは自然礫を素材にしたもので、一部に自然面が残り、その反対側には大剝離面が見られる。

〔2〕 平安時代の遺構と遺物

(1) 平安時代の土器類の分類基準

今回の調査で遺構に伴って発見された遺物の大部分は平安時代の土器類である。土器類の大半は全形修復の困難な細片であるが、発見された遺構の所属時期や性格を知る上で最も重要な資料の一つである。そればかりでなく土器類は遺跡に於ける人間生活の実態を詳細に把握する上でも欠く事のできない資料である。

以上の様に考えた場合、遺跡出土の土器類を形態別、製作技法別に分類する事、そして分類された個々の要素と組成の実態を知る事は極めて重要な作業であると云えよう。何故ならば、この様な作業を基礎にしてこそ土器による遺跡と遺構の編年が確実になり、過去の人間生活の様相がより明確に把握できると予想されるからである。

ただ、この作業を進めるためには、その前提として土器類のより客観的な分類基準が設けられていなければならない。以上の理由から、落合 I 遺跡の平安時代の土器類については主として器形から大きく A～H の 8 群に大別した。さらに焼成技法および調整技法上の差に注目し、各群毎にいくつかの細分を試みた。その結果は以下に示す通りである。

A 群 坏類である。一部に皿型土器を含み、形状にいくつかの変移が見られる。I～VII 類に細分された。(焼きぶくれした坏—Aa、脱色した I 類の坏—Ab は一応分類から除いた。)

第3表 平安時代の土器の分類基準表

器種	焼成	硬さ	ロクロ	調整		数量	種
				底部	口縁部 ~ 胴部		
A I-1a	酸	軟	使用	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理	◎	な
				回転ヘラケズリ			
				回転糸切りのみ			
2b, 2c	酸	軟	使用	〃	内面黒色処理	◎	な
3							
A II-1							
2	化	やや軟	使用	高台あり	内外面黒色処理	±	し
				高台なし			
A III-1a	炎	やや軟	使用	高台あり	ロクロ成形痕のみ	◎	し
1b							
2a							
2b	炎	やや硬 ~ 硬	使用	高台あり	ロクロ成形痕のみ	○	し
A IV-1							
2							
A V	還元炎	硬	使用	高台あり	ロクロ成形痕のみ	±	し
A VI							
A VII							
B-1a	酸	軟	不使用	糸切りなし	口縁部(外)横ナデ(内)横ナデ 胴部(外)ヘラケズリ(内)?	○	な
				2a			
				2b			
3	還元炎	硬	?	?	胴部ヘラケズリ	±	な
				C-1			
				2			
D-1	酸	軟	使用	糸切りなし	口縁部~胴部(外)ロクロ調整 (内)ロクロ調整 胴部ヘラケズリ	±	し
				2			
				E			
F-1	還元炎	硬	使用	?	胴部ケズリ痕	±	し
				2			
				G			
H	酸化炎	硬	使用	高台なし	口縁部ロクロ仕上げ、体部~底部 ヘラケズリ	+	し
				2			
				F			

硬 爪ではじくと石質の音がする ◎ 多
 やや硬 爪で傷がつかない ○ やや多
 やや軟 爪で少し傷がつく + 少
 軟 爪ですぐ傷がつく ± 極少
 なし - なし

縮尺 AI~AIII 1/4
 C ~F 約1/6

- I-1 類** A群の坏類のうち I 類で表わされるグループは全て内黒処理された土師器の坏類である。この種の坏はロクロ成形され、底部の切り離しは基本的には回転糸切り技法によっている。I-1 類はそのうちでも底部切り離し後に底部ないし底辺部一帯にヘラケズリ調整が施され、糸切り痕が一部ないし全部消失しているものである。この種の坏はさらにヘラケズリの仕方により、a一回転ヘラケズリ、b一手持ちヘラケズリの坏の2種に分類されるが、形態上、さらに細分可能である。
- I-2 類** 前者と同様にロクロを使用して作られた内黒の坏であるが、底部に切離し後の調整が行なわれず、そのまま糸切り痕の残っているものである。この種の坏は形態上変化に富み、さらに a 一器高が低く器壁の立ち上がりが非常にゆるいもの、b 一器壁の立ち上がりが比較的急なもの、c—その中間のものなどに細分することが可能である。
- I-3 類** 前二者と同様の内黒坏であるが底部に高台の付けられたものである。この種の坏にも高台部や坏部の形にいくつかの変化が見られ、細分が可能である。
- II 類** II 類で表わされるグループは内外ともにヘラミガキされ、黒色処理された土師器の坏類である。この種の坏にも前述した I 類の坏と同様、高台のないもの II-1 類、高台のあるもの II-2 類などいくつかの変化が予想される。しかし、この種の坏は今回の調査では少数しか出土せず、その様相がよく解らない。したがってここでは、これ以上の細分は行なわない。
- III-1 類** III 類で表わされるグループは、ロクロ成形された非内黒の土師器ないしは土師器類似の酸化炎焼成された軟質土器の坏類である。そのうち、底部に回転糸切り痕の見られるものを A III-1 類とした。これは口径が 10cm 以上のもの a と 5 cm 内外のもの b の 2 種類が見られる。そのうち b に分類されるものは、a に比してはるかに少ない。
- III-2 類** III-1 類と同様の坏であるが、高台を有するものを A III-2 類とした。この種の坏はさらに坏部の形態や大きさにより、坏部の器高の比較的高い皿形のもの a と、小振りの皿形のもの b などにさらに細分される。
- IV 類** IV 類で表わされるグループはロクロ成形され、底部が糸切りされた坏類であるが酸化炎焼成された須恵器ないし須恵器類似の硬質土器の範疇に入る種類のものである。この坏にも底部糸切のままのもの 1、高台の付くもの 2 などいくつかの変化があるらしい。しかし、この種の破片は出土点数が比較的少なく、細片が多いため、ここではこれ以上の細分は行なわない。
- V 類** V 類で表わされるグループはロクロ成形され、底部に回転糸切り痕を有する坏類で、

—落合Ⅰ遺跡—

還元炎焼成された須恵器ないし須恵器類の硬質土器の範疇に入るものである。この種の坯は出土数が少なく、これ以上の細分は今のところできない。

Ⅵ類 緑釉の施された坯類をAⅥとした。この種の資料は口辺部資料1点だけなので詳細な製作技法は解らない。

Ⅶ類 灰釉の施された坯類をAⅦとした。この種の資料は落合Ⅱ遺跡では1点出土している。この場合も詳細な技法は不明である。

B群 器高が10～20cm、口径10～20cmくらいの範囲に入る小型のカメ類である。この種の資料は今回の調査では出土数が少なく、しかも出土資料の大部分が、次に掲げるC群との区別の難しい体部破片であった。これらの破片は焼成技法から見るとほとんど土師器として分類し得るもので、2分類される。以上の2分類以外さらにC群の2類との対応から須恵器ないし順恵器類の小型カメ類を考え、3類とした。しかし3類に相当する器種として確実なものは見られなかった。

1類 ロクロを使用せず巻き上げなどの技法によって作られた土師器ないし土師器類の軟質の土器のカメである。この種のカメには完形品がないので、その詳細は不明であるが、破片資料の観察によると口辺部は比較的簿手に作られ、折り返しなどは見られない。そしてやや外反し、指などによる横ナデ痕が見られる。また胴部の外面には、たて方向のヘラケズリ痕が見られ、内面には横ないし斜め方向の刷毛目や指ナデ痕の見られるものもある。なお、この器種は大きさや調整技法からさらに細分できる可能性もある。

2類 ロクロを使用した痕跡の認められる土師器ないし土師器類の軟質土器の小型のカメ類である。この中にはあらかじめ巻き上げなどにより大体の形を作ってから、ロクロを使用して胴体上部から口辺部にかけて仕上げ調整を行なったもの—aと最初からロクロによって成形したもの—bの2種が見られる。aの胴部外面にはしばしばヘラケズリの痕跡が認められ、底部には切り離しの痕跡が見られない。それに比べてbではヘラケズリ痕は見られるほか、底部に糸切り痕が残っている。内面の刷毛目その他の調整はa、b両者とも認められなかったが、aについては今後発見される可能性も考えられる。口辺は、a、b、両者とも断面が個有のカギ形を呈したものが多い。

3類 前記のような、須恵器ないし、それに類似した硬質の小型カメ類である。今までの観察ではほとんど出土していないように見える。

C群 器高が20cm以上、口径が15～25cmくらいの大型のカメ類である。長胴のものが多い。C群の資料も出土数は比較的少なく、全て破片である。しかもその大半は先のB群と判別の難しい体部破片である。焼成技法から見るとC群もB群と同様、やはり土師器がほ

とんどを占める。しかし、ここでは明らかに須恵器と思われる破片もごく少数ではあるが認められた。

1類 ロクロ使用の痕跡の認められる土師器ないしは土師器類似の軟質土器の長胴カメ類である。このカメ類はあらかじめ巻き上げ等によって成形された後、ロクロを使用して胴体上部から口辺部にかけて仕上げ調整が施されている。胴部外面には縦方向のヘラケズリ痕が見られる。内面には横方向の手擦れ痕が見られるが、刷毛目やヘラミガキの痕跡は認められない。口辺部はやや外反し、折り返した形になっているが、その断面形はB-2類と似たカギ状を呈している。

2類 この種のカメは成形技法から見るとほとんどC群1類のカメ類と変わらないが、焼成技法上、須恵器ないし須恵器類似の硬質土器に分類される種類のものである。ただし、この種のカメは落合Ⅱ遺跡で比較的良好な資料が見られるものの、落合Ⅰ遺跡では破片がわずかに例外的に出土しているに過ぎない。

以上、C群の土器類については2分類を試みたが、この分類の枠内に収まらない器種の存在も想定される。しかし、今回の調査で得られた資料を見る限り、上記2分類に含まれない長胴カメ類の確実な例は知られなかった。したがって分類上、多少不明を残すものも2類以外は一応1類に仮分類した。

D群 この群の土器はA群の土器の3～5倍大の口広浅底の土器類で器形分類上、埴-1類ないし盤-2類に含められるものである。埴と盤は本来それぞれ機能を異にする器種である。前者はいわゆる土鍋として調理や煮沸に用いられる土器であり、後者は大皿として食器ないしは供献具として用いられる土器である。しかし小破片で見た場合、両者の判別は著しく困難である。さらに、今回の調査で得られた資料は点数も少ない上に、そのほとんどが判別不能な細片である。以上の理由から、埴、盤の両者を一括してD群に分類した。

D群の土器は焼成技法上、全て土師器ないしは土師器類似の軟質土器の範疇に含まれる。その成形技法は大破片が少ないのでよく解らないが、いずれもロクロが使用されている。その中で明らかに埴として分類し得る一例では、粘土紐を巻き上げなどの技法で成形し、その後ロクロ使用によって口辺部の仕上げをした形跡が認められる。この資料で見ると外面の体上半部から口辺部および内面全体にはロクロ使用時の手擦れ痕が横方向に走り、外面の体下半部から底部にかけては主として縦方向のヘラケズリ痕が見られる。その口唇部はB群2類やC群1類と同様、外側に対して小さく折り曲げられているが、B群2類の一部に見られるようなカギ状の段にはならないで、一気に折れ曲る形になっている。底部は残っていなかったが、他の遺跡の例から類推して、やや平たい丸底であ

—落合 I 遺跡—

ったと思われる。

盤に分類される器種には良好な資料は見られないが、高台を伴う例が認められる。

E群 鉢類である。この群に含まれる土器は破片がごく少数発見されているに過ぎない。発見された資料で見る限りこの群の土器は全てロクロ成形された後、内黒処理された土師器である。

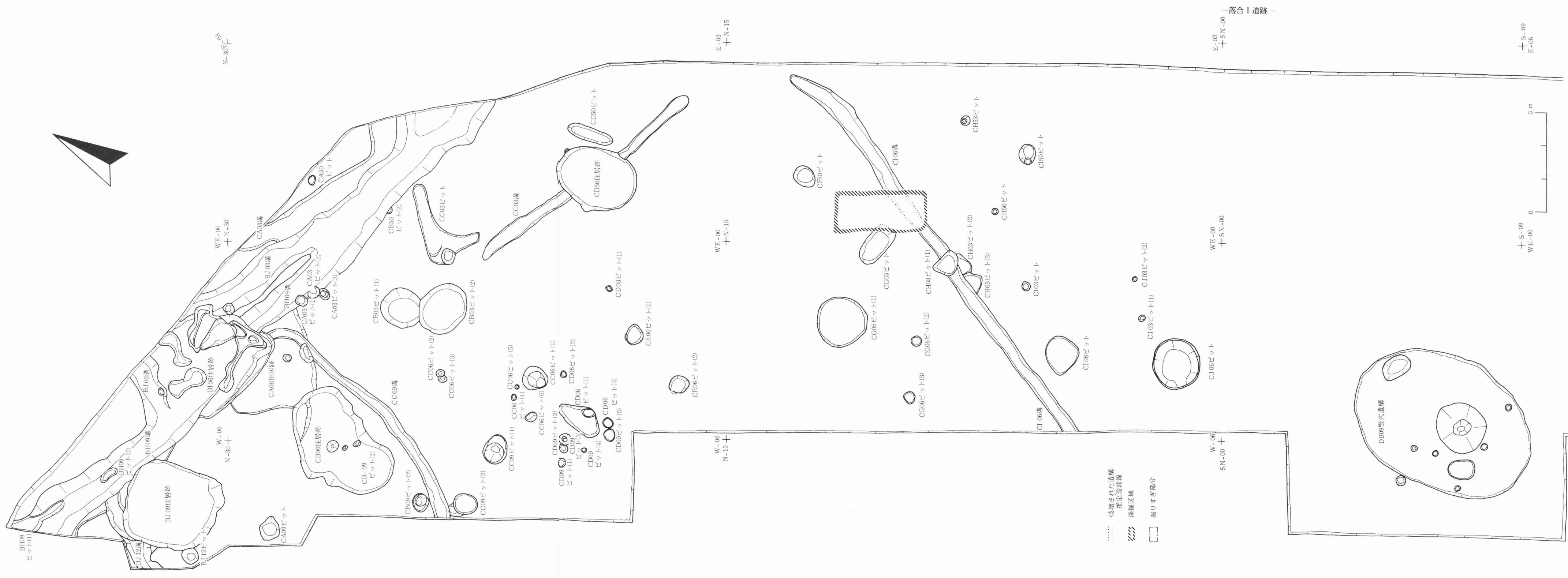
F群 大型壺類である。発見された資料は全て須恵器の細片である。この群の土器片は完形資料が出土していないので、その全形は不明であるが、他の遺跡の例から、高さ40～50cm内外、巾35～40cm内外、口径25～30cm内外、器厚0.5～1.0cm内外で、やや口が大きく、肩の張った丸底—1類ないし平底—2類の器形が考えられる。成形はほとんど粘土紐の巻き上げによったと思われる、器体の外面、肩部から底部にかけては一面に叩き目が見られる。叩き目にはいくつかの種類が見られるが、この遺跡の場合、平行叩き目が主流を占める。しかし、叩きの方向については資料の大部分が体部のみの細片であるため良く解らない。器体の内面には当て痕の見られる場合もあるが、ほとんどは消されて残っていない。いずれ成形技法および調整技法上、今回の調査で得られたF群の土器資料は大きく1器種の中に類別できよう。

G群 長頸瓶類である。この土器類もF群と同様、全て須恵器の細片である。発見された資料からはやはり全形は伺えなかったが、他の遺跡の出土品との対比から、器形の存在を予想した。それによれば、この土器類はロクロ使用によって成形されているが、胴体下半部にヘラケズリの痕跡の見られる場合もある。しかし、その成形技法上の詳細は大部分が小破片であるためよく解らない。一応、ここではA群V類、F群に含まれる以外の須恵器のうち、ロクロ使用の痕跡の認められる瓶子状の破片資料をこの中に含めた。

H群 A～G群に分類した以外の土器類を整理の都合上、仮にH群とした。したがってここには雑多な器種の含まれる可能性が考えられる。しかし、実際には、この中に含まれる個体数はごく少数であった。

以上が、今回の調査で発見された平安時代の土器類の分類基準である。ただ、この分類基準は当面の整理のための暫定的な基準であり、いくつかの不備がある。例えば以上に述べた土器の分類基準によれば、焼き損じの須恵器や二次的に高温度にさらされた土師器をどうやって判別するかという方針が不明である。そういう多少の問題点はあるが、一応今回発見された平安時代の土器類は、この基準に沿って分類してゆくことにしたい。

なお、土器を分類する場合には胎土の質や硬さの基準も問題になるが、ここでは一応胎土の問題については触れず、主として硬さを基準にして、須恵器、その他の硬質土器類と土師器、その他の軟質土器に分類した。その場合、一応爪で傷つくものを軟、つかないものを硬とし、さらに



(第4図) 落合I遺跡遺構配置図

それらの中で硬度差により各々2段階に区分した。その他分類基準の説明で問題になるのは土器の色調の問題であるが、落合 I 遺跡の分類では、A群V類などの還元炎焼成された土器類の色調として灰褐色、灰～灰白色を想定し、A群II類やその他の酸化炎焼成された土器類の色調には黄白、にぶい黄白、にぶい橙、橙、赤褐色、茶褐色などの各色を想定した。また、土器類の実測図の一部、例えば坏類では大半の実測個体の風化、摩滅が著しく、図示する事が困難なため、ヘラケズリなどの調整痕を記号化して表示した。

(2) 遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構数は全部で67を数える。その内わけを示すと次の通りである。

- 竪穴住居跡および類似遺構…………… 6 (うち2遺構は2時期の重複)
- 単独に散らばるやや大型のピット…………… 25
- 単独に散らばる柱穴状ピットやその他の小ピット…………… 28
- 溝状遺構…………… 8

上記の各遺構の底面ないし埋土中からは大抵の場合、平安時代の遺物が出土している。これらの遺物は、明確でない場合もあるが、その出土状況から見ると、ほとんどの場合、それぞれの遺構に伴うか、遺構と時期的に近接した遺物であると考えられる。したがってここでは伴出遺物がなくて時期決定の困難な幾つかの遺構も含め、一応、これらの遺構を全て平安時代の遺構と仮定し、分類別に一括して述べてゆくことにしたい。

A 竪穴住居跡および類似遺構

BI06 住居跡 (第5図 写真 2-1、2)

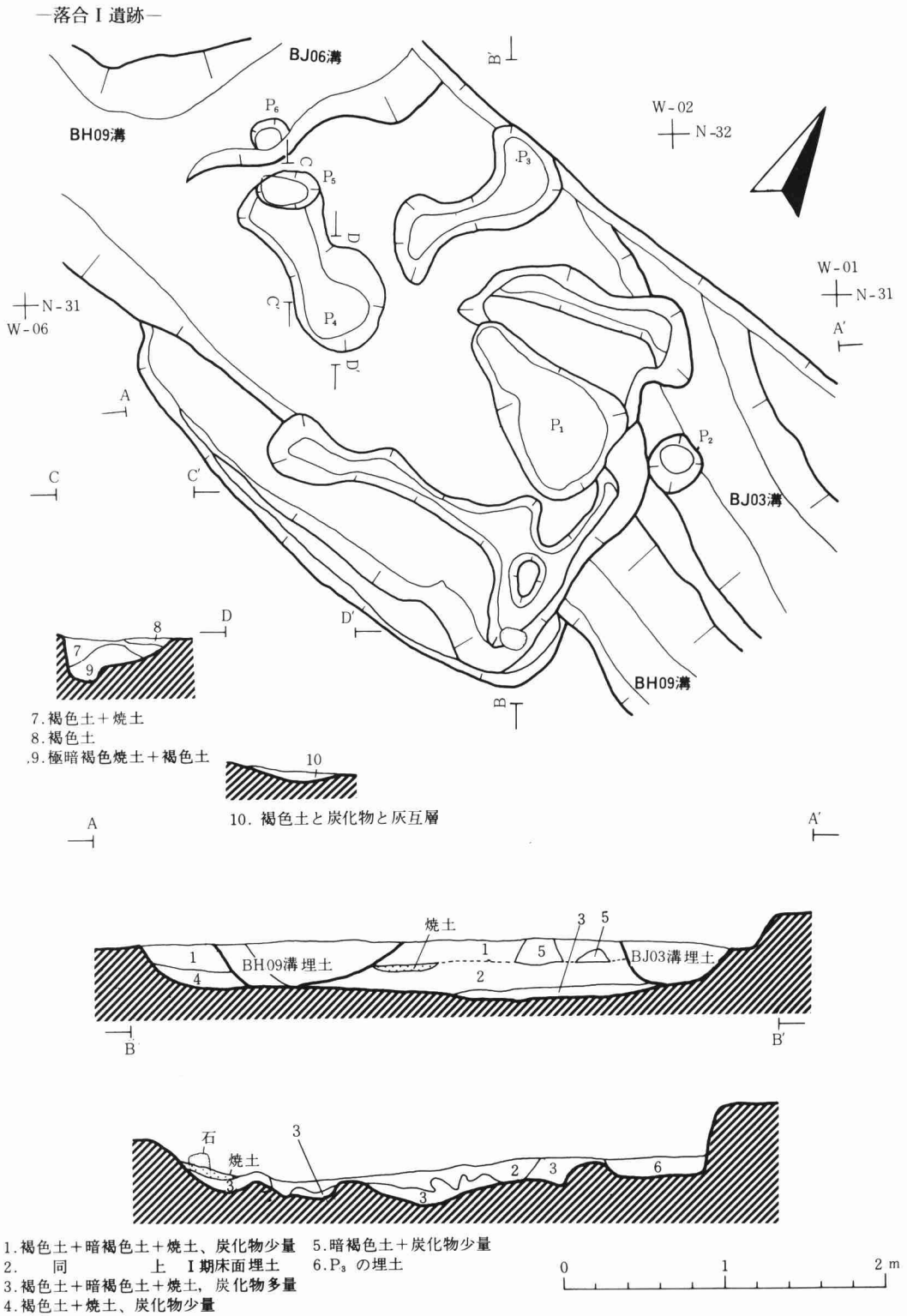
〔位置〕 この住居跡は第4図遺構配置図の北端中央部に位置している。

〔重複関係〕 この住居跡は、ほぼ同一のプラン内に二時期の床面を有する竪穴住居跡であるが、遺構はCA06住居跡を切って掘られており、BH09溝、BJ06溝、BJ03溝の3条の溝によって、主要部分が大きく破壊されている。

〔形状、規模〕 住居跡の正確な形状や規模は、遺構の主要部分が破壊されているため不明である。ただ遺物出土状況や部分的に残る遺構の壁面の状況から推定すると、この住居跡は東西方向にやや長い、長さ約3.2m、巾約3.0mの隅丸長方形のプランを有するらしい。床面の深さは新期の床面では約0.14m、旧期の床面では約0.3m、それぞれ検出面より下に位置する。

〔付属遺構〕 住居跡の付属遺構は床面の新旧により幾分異なる。古い時期の遺構をI期、新期の遺構をII期とした場合、それぞれ次の様な遺構が伴う。

(I期) I期の床面に伴う付属遺構としては、ピット6と小さな溝状遺構1が考えられる。そのうちP₆はBJ06溝にかかっており、確実に住居跡に伴うとは考えられないが、



(第5図) BI06住居跡II期遺構平面断面実測図

一応、その位置関係から I 期の付属遺構に含める事にしたい。

P₁ 住居跡の東壁に接して設けられた南北 1.5 m、東西 1.5 m の平面不定形の浅いピットである。このピットは底の凹凸が著しく、深さは最深部で床面から 0.1 m を測る。ピット内の埋土は炭化物や焼土の多量に混った暗褐色土層で、その中には土器片が多く含まれている。

P₂ P₁ の東側の住居跡外に位置するピットであるが、その埋土は P₁ と同質の土であり、P₁ との関連が考えられる。その大きさは直径 0.18 m 内外で、深さは検出面より 0.16 m を測る。

P₃ 住居跡の北側に位置する長さ 1.2 m、巾 0.02 ~ 0.07 m の不定形のピットで深さは床面より 0.02 ~ 0.09 m を測る。このピットの埋土は住居跡埋土と同様の炭化物や焼土の混った褐色 ~ 暗褐色のシルト質軽埴土層で、その中に土器片が 1 ~ 2 点混入している。

P₄ 住居跡の西側に位置する円形の浅い皿状ピットである。その大きさは直径 0.55 ~ 0.65 m で深さは床面より最大 0.1 m を測る。埋土は褐色のシルト質軽埴土層と炭化物と灰の混合した土の互層よりなり、その中に炭化米が含まれている。この遺構は次に述べる P₅ を切っている。

P₅ P₄ に切られ、その北西部に継がる不整隋円形のピットである。その大きさは長径 0.75 m、短径 0.55 m、最大深さは床面より 0.23 m を測る。埋土は上下 2 層よりなるが、そのうち上層は暗褐色のシルト質軽埴土に煤を多量に含んだ黒褐色の焼土塊が少量混入している。下層は黒褐色 ~ 極暗赤褐色の焼土の塊を主体とした層で、それに褐色のシルト質軽埴土を少量混えている。この下層土中からは土器片が 2 点出土している。

P₆ BJ 06 溝にかかるピットで、P₄、P₅ の北西に位置している平面円形の柱穴状ピットである。その大きさは直径約 0.2 m、床面からの深さ 0.16 m を測る。このピットは BJ 06 溝の調査中に発見されたもので、BI 06 住居跡との関連は不明である。

L₁ 住居跡の南東壁面から北西方向にかけて T 字状に延びる浅い溝状遺構である。その長さは壁に接した部分で約 1.3 m、それに直交した部分で約 1.9 m、深さは床面より 0.03 ~ 0.08 m を測る。埋土は P₁、P₂ と同様、炭化物や焼土の混った暗褐色土層である。遺物としては、土器 2 ~ 3 片が出土している。遺構の性格は今のところ不明である。

以上、I 期の付属遺構について述べてきたわけであるが、この中にはかまどと思われる遺構が見られない。しかし、発見された付属遺構の中には P₁、P₂ の様にその位置関係や埋土の類似から、I 期のかまど施設の痕跡と思われる遺構も見られる。

(II 期) II 期の遺構としては、かまど跡と炉跡状の遺構が発見された。そのうち、かまど跡は住居跡の南東隅に位置しているが、この部分には焼土の集積が見られ、中心部には支脚に使用された、長さ 18 cm、巾 16 cm、厚さ 12 cm の川原石が立っていた。さらに、川原石の周辺には土器片の散布も見られた。しかし、かまど部付近は既に BH 09 溝によって大きく破壊されてしま

—落合 I 遺跡—

っており、正確な形状や規模はほとんど不明である。

炉跡状の遺構は、かまどの北西部の床で検出されている。ここでは直径約 0.5 m の円形の範囲内の床土が約 0.08 m 内外の厚さで火を受けている。その周囲には粉末状の炭化物が広く散らばっている。

〔埋土状況〕 I、II 両期床面を覆う埋土の関係を見ると、両期の床面とも、それを覆う主要な埋土は炭化物や焼土を微量に含んだ、暗褐色のシルト質軽埴土であるが、色調や土性にはほとんど差が見られなかった。しかも、ここには両期遺構を隔てる介在層も見られなかった。そのため II 期遺構の床面は主として、遺物の分布状況と出土レベル、および付属遺構の検出レベルなどから推定復元した。

同様の埋土状況は住居跡と 3 条の溝の埋土の關係に於ても見られる。しかしこの場合、溝の埋土は住居跡の埋土より幾分暗色を呈し、含有物が少ない事、それに埋土中の遺物が住居跡の遺物と比べて数が少ない上に、細片が多い事から遺構の区別が可能になった。

〔出土遺物〕 (第 6 図、第 4 表、写真 14-1、8、15) I、II 両期の遺構とも遺物が出土している。遺物は主として床面ないしは埋土の下部から出土しているが、付属するピットなどの遺構からも少数出土している。出土遺物のほとんどは土器類であるが、大部分破片である。

(I 期) I 期の住居跡に伴う主な遺物は土器類であるが、特記すべき遺物としてはその他に炭化米が P₄ から出土している。

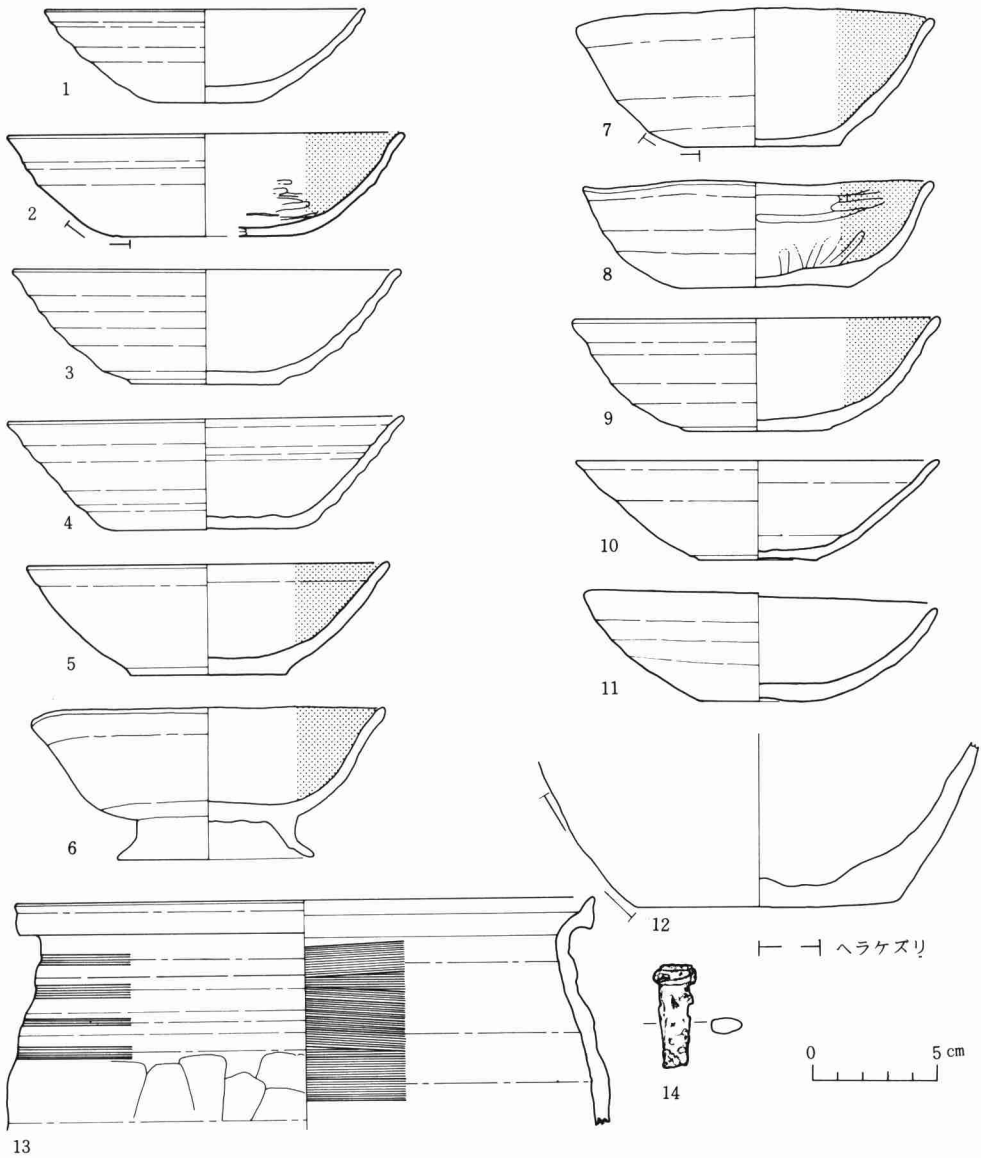
・土器類 大部分は破片であるが、その中では A 群の破片が圧倒的に多く、その他に B、C、D、F 各群の破片が少数見られる。A 群の中では I、III～VI 類の各器種が見られるが、そのうちでも I-2 類が最も多数を占め、次いで III-1 類、IV-1 類が比較的多い。I-1 類、V 類はごく少数で、VII 類は紛れ込みと思われる口辺部の細片資料が 1 点出土したのみである。

A 群以外の土器としては B、C 群に入る破片が少数出土している。その中には B 群 1 類、C 群 1 類に分類される資料も見られる。

上記の土器は主として P₄ の埋土中やその周辺の床の埋土の下層部から分散した形で出土しており、他のピットや床面からはごく少数しか出土していない。

以上の土器類のうち、代表的な資料を第 6 図、1～4 に掲げる。これらの坯はいずれも A 群の土器であるが、1 は III 類、2 は I-1 類、3、4 は V 類の各器種に分類される。この図でみるといずれの器形も器高が底く、口径がやや大きく、器壁がやや外開き気味になっている。A 群の土器に見られるこのような形態上の特徴は、以下に述べる各遺構の A 群土器にも多くの場合、あてはまり、この遺跡の A 群土器の一般的特徴になっている。

・炭化米 P₄ の炭化物を含んだ埋土中からは炭化米が 32 粒採集されている。この炭化米は主



(第6図) BI06住居跡出土遺物実測図

として草本類からなる炭化物の薄層中に混在していたものであるが、一部に粃穀の付着が見られるものの、ほとんどの個体には付着が認められない。炭化米の長さは平均約4.4mmで、巾は約2.5mm、厚さは1～1.5mmを測る。その全体形状は大まかに見て、インド種などより日本種とされるものに近いように思われる。しかし、この資料については今後専門家の鑑定を待って再度検討を加えたい。(写真14-8)

—落合 I 遺跡—

(Ⅱ期) Ⅱ期の住居跡に伴う遺物としては、やはり土器類がほとんどを占めるが、他に鉄器 1 点が発見されている。土器類はⅠ期と同様、破片が多いが、この中には A、B、C、D、F、G 各群の器種が見られる。そのうちでも破片数の多いのは、Ⅰ期同様 A 群の土器類で、中でもⅠ-1、2、3 類、Ⅲ-1 類に含まれる器種の破片が多い。

B、C 群の土器片は大抵摩滅が著しく、成形、調整技法の知られる資料は少なくないが、B 群 1、2 類、C 群 1 類などの破片が見られる。C 群 2 類に入る資料も 1 点出土している。D~G 群はほとんど痕跡程度に破片が見られるだけである。

これらの土器類は、かまど周辺その他の床面から比較的広く分散した形で出土している。しかも、床面にほぼ近い位置から、復元可能個体が 3 点ほど出土している。

以上の土器類のうち、代表的なものを第 6 図 5~13 に掲げた。そのうち、5~11 は A 群の土器類であり、12、13 は C 群の土器類である。5~11 のうち、5、7、8、9 は A 群Ⅰ-2 類

第 4 表 B I 06 住居跡出土遺物一覧表

< 坏 類 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口 径	底 径	高 さ	色 調	備 考
6 - 1	15 - 1	BI 06 住Ⅰ期	A Ⅲ-1	12.8cm	3.9cm	3.8cm	灰 白	
6 - 2	—	” ”	AⅠ-1a	15.8	⑥ 6.3	4.1	浅 黄 橙	
6 - 3	15 - 2	” ”	A V	15.5	5.9	4.6	灰 白	
6 - 4	—	” ”	”	15.9	7.0	4.4	灰	
6 - 5	15 - 5	” Ⅱ期	AⅠ-2	14.5	6.3	4.4	浅 黄 橙	ゆがみ強
6 - 6	15 - 4	” ”	AⅠ-3	14.1	(高台) 7.8	6.0	にぶい橙	”
6 - 7	15 - 6	” ”	AⅠ-1	14.2	6.2	5.5	にぶい橙	”
6 - 8	15 - 3	” ”	AⅠ-2	13.9	7.1	4.1 ~4.3	にぶい橙	
6 - 9	15 - 7	” ”	”	14.5	6.0	4.5	暗 褐 色	
6 - 10	15 - 8	” ”	AⅢ-1	14.4	4.7	4.0	暗 褐 色	
6 - 11	—	” ”	”	14.0	4.5	3.7 ~4.3	橙	

< カメ類 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口 径	頸部径	胴張部径	底 径	高さ	色 調
6 - 12	15 - 10	BI 06 住Ⅱ期	C - 1	—cm	—cm	—cm	10.5cm	—cm	にぶい黄橙
6 - 13	15 - 9	” ”	C - 1	23.2	—	—	—	—	浅 黄 橙

< 鉄 器 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器 種	長 さ	最 大 厚	横断面形	備 考
6 - 14	14 - 1	BI 06 住Ⅱ期	刀子 ?	4.1cm	1.1 × 0.6 cm	楔 形	破 片

6 は I-3 類、10、11 は III-1 類である。12、13 はいずれも C 群 1 類であるが、12 は底部破片であるが、摩滅が著しく、ヘラケズリなどの痕跡は消失している。13 は口辺部破片であるが、比較的硬くて、ロクロ目やヘラケズリ痕のよく残っている資料である。この土器は口辺部が「く」の字形に折曲がり、口唇部の外壁は独特のカギ形を呈しており、器壁外面の凹凸が著しい。

・鉄器 かまど部の焼土中からは第 6 図 14 に掲げたような鉄器の破片が出土した。この破片の横断面形は錆化が著しいので詳しくは解らないが、楔状を呈している。おそらく刀子の破片であろう。(写真 14-1 右下)

BJ 09 住居跡 (第 7 図、写真 3)

〔位置〕 この住居跡は BI 06 住居跡の南西側、BH 09 溝の南側に位置する住居跡である。

〔重複関係〕 住居跡は I、II、2 時期の床面を有する。さらにこの遺構は BJ 09 溝、BJ 12 溝、BJ 12 ピットと切り合っているが、その重複関係はいずれも不明である。ただし BJ 12 ピットについては出土遺物の類似性から、II 期遺構との共伴関係が推定された。

〔形状、規模〕 この住居跡は南北方向にやや長い不整な隅丸長方形のプランを有する竪穴住居跡である。その規模は長さ 2.8 ~ 3.3 m、巾は約 2.6 m で、床面の深さは I 期では検出面より約 0.1 m、II 期では約 0.3 m をそれぞれ測る。

両時期の遺構のプランはほぼ同一であると予想されたが、調査時には十分な確認ができなかった。しかし、実測図から推定すると、II 期遺構は I 期遺構より北側に、長さにして約 0.4 m 広がる可能性がある。

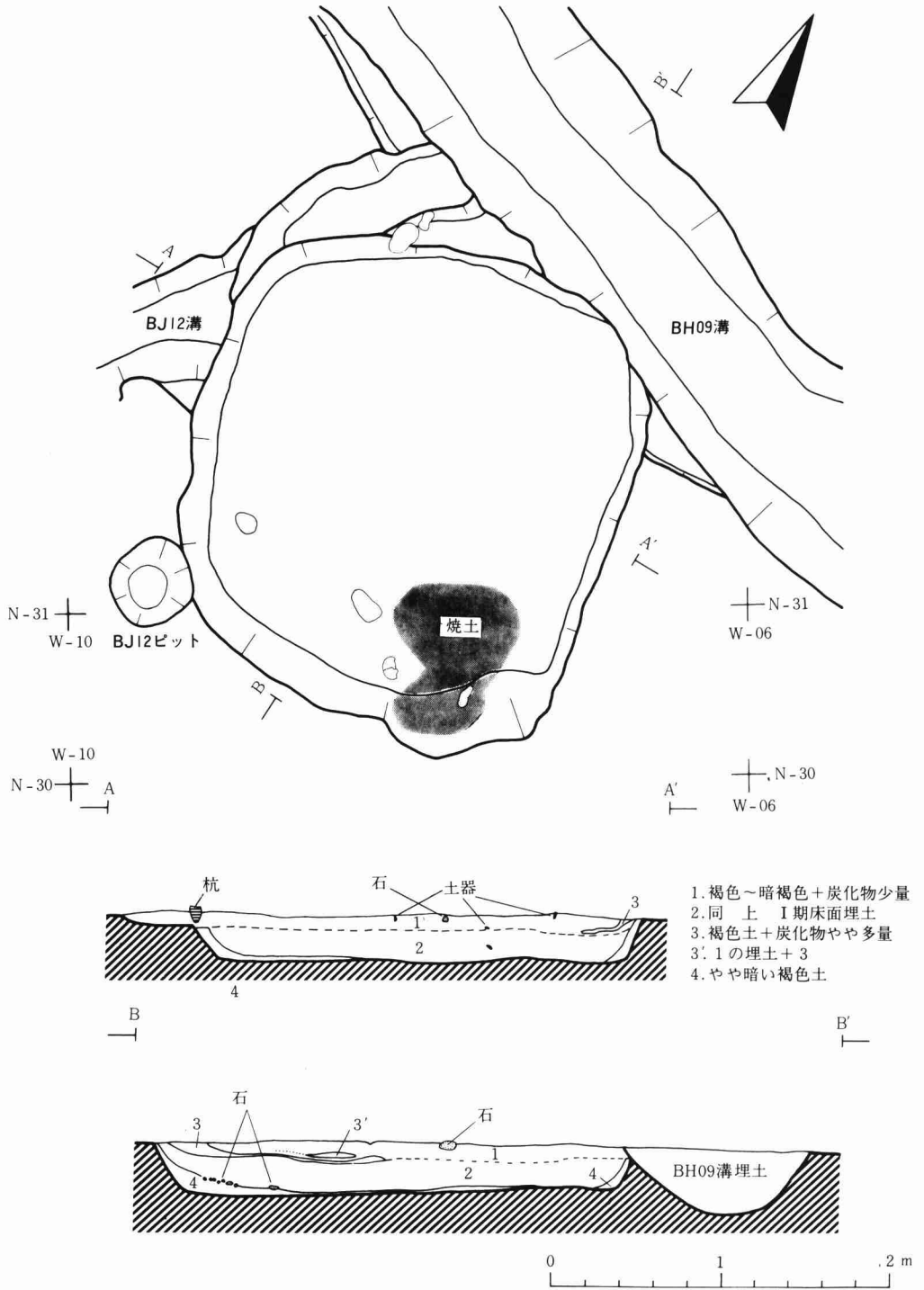
〔付属遺構〕 付属遺構としては、下記のもので発見されている。

(I 期) I 期住居跡に伴う遺構としては、南壁東側部分にかまど跡と思われる焼土集積遺構が発見されている。この遺構は東西 0.55 m、南北 0.5 m、焼土層の厚さ 0.05 ~ 0.15 m を測り、その東西両脇部分にはこぶし大かそれより幾分大きめの川原石が 3 個ほど散らばっていた。

焼土部分の中央部からは支脚に使用したと思われる完形の坏が一個体正立した形で発見された。焼土層はさらに住居跡の壁面に沿って南側にせり上がっているが、それに伴う煙道などの施設は検出されなかった。焼土部分の北側には床面一帯に粉末状の炭化物の薄層が広がり、その規模は東西 1.7 m、南北 1.55 m の不整楕円形の範囲内に及んでいる。以上の事以外、調査時の土層観察から、このかまどの直上に II 期のかまどが重複している事が解った。

(II 期) II 期の床面に伴う遺構として、かまど跡と炉跡状遺構および溝状遺構が発見された。

—落合 I 遺跡—



(第7図) BI 09住居跡、平断面実測図

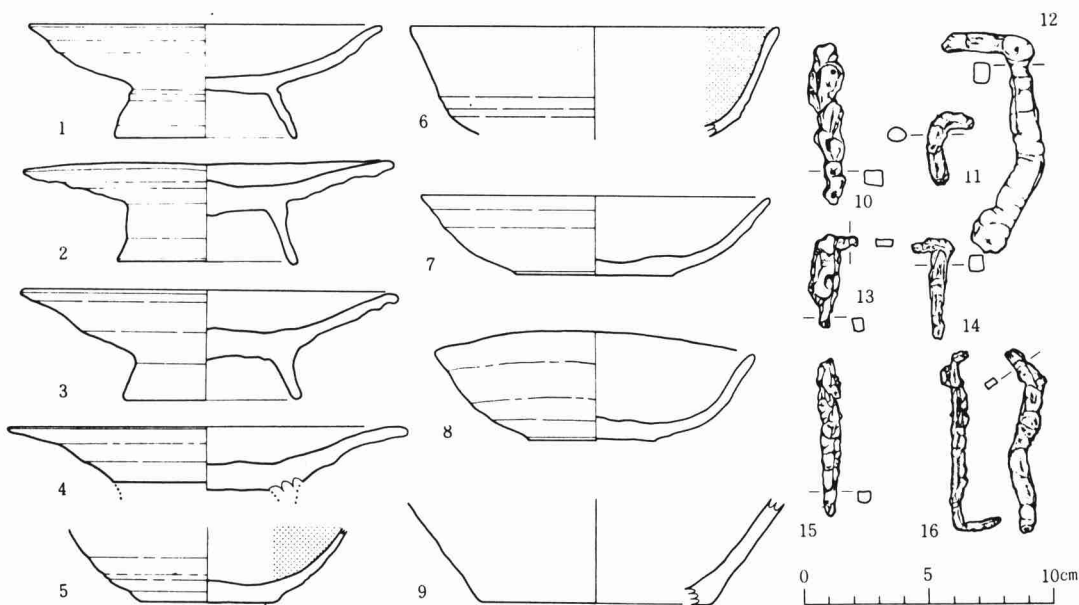
・かまど跡 II 期のかまど跡は I 期のかまど跡の上に重複して築かれている。その保存状態は良好ではなく、その正確な規模は不明であるが、焼土層の広がり東西 0.55 m、南北 0.5 m の楕円形の範囲に及び、厚さ 0.05 m 内外を測る。

・炉跡状遺構および溝状遺構 この二つの遺構は住居跡の北壁際の中央部で検出されている。炉跡状遺構は東西 1.1 m、南北 0.75 m で焼土層の厚さは 0.05 m 内外を測る。この焼土層中には直径 1～2 cm 大の焼けた粘土の塊が多数混入しており、長さ 5 cm、巾 5 cm、厚さ 3 cm 大の炭 2～3 個が点在している。さらにこの遺構の東側には、こぶしよりやや大きいくらいの川原石が 2 個並んで発見されている。

さらに、この焼土遺構の下からは浅い溝状の遺構が発見されているが、炉跡状遺構との性格的な関連については確認できなかった。また BJ12 溝との関連も埋土の状況からは明確にする事ができなかった。

・BJ12 ピット その他この住居跡の付属施設であるかは明確ではないが、住居跡の南西隅には BJ12 ピットがある。このピットは平面円形の浅い皿状ピットでその規模は長径 0.52 m 短径 0.46 m、検出面からの深さ約 0.1 m を測る。埋土は堅穴床面上層埋土と同様のやや暗い褐色のシルト質軽埴土の単層である。

〔埋土状況〕 I、II 両時期の遺構についてみると、埋土層の構成には幾分の差異が認めら



(第 8 図) BJ09 住居跡出土遺物実測図

—落合 I 遺跡—

れる。しかし、基本的には BI 06 住居跡の場合と同様、両時期床面とも炭化物や焼土を少量含んだ、やや暗い褐色のシルト質軽埴土で広く覆われている。そのため両時期床面の位置は、BI 06 住居跡の場合と同様、主として遺物の分布状況や出土レベル、付属遺構の位置関係などから推定した。

〔出土遺物〕 (第 8 図、表 5、写直 14-上、下、16) 住居跡内の出土遺物の大半は I、II 両期とも土器破片によって占められる。他に、鉄器類が合計 7 点出土している。

(I 期) I 期の遺物は余り多くないが、主として住居跡南半部の床面～埋土下層部から出土している。その中味は鉄器 5 点を除いて全て土器破片で占められている。

・土器 土器類には A、B、C、F、G 各群の器形が見られるが、最も多いのは A 群の破片

第 5 表 BJ 09 住居跡出土遺物一覧表

< 坏 類 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口径	底 径	高 さ	色 調	備 考
8-1	16-1	BJ 09 住 II 期	A III-2	14.1 ^{cm}	(高台) ^{cm} 7.2	4.6 ^{cm}	浅黄橙	高台付杯
8-2	16-2	" "	"	15.0	(高台) 7.1	3.7~4.2	浅黄橙	高台付皿 ゆがみ強
8-3	16-3	" "	"	15.2	(高台) 7.0	4.3	にぶい黄 橙	高台付皿
8-4	16-4	" "	"	15.0	—	—	橙	高台付皿 ゆがみ強
8-5	16-5・8	" "	"	—	5.3	—	橙	
8-6	—	" "	AI-2	14.7	—	—	にぶい橙	
8-7	16-7	" I 期	A III-1	18.9	6.3	3.2	橙	
8-8	16-6	" "	"	12.8	5.0	約 3.5~4.2	浅黄橙	ゆがみ強

< 壺 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口径	頸部径	胴張部径	底 径	高さ	色 調
8-9	—	BJ 09 住 II 期	C-1	—	—	— ^{cm}	9.2 ^{cm}	— ^{cm}	褐色

< 鉄 器 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器 種	長さ	最 大 厚	断面形	備 考
8-10	14-1	BJ 09 住 II 期	不 明	6.4 ^{cm}	1.3 × 1.1 ^{cm}	長方形	
8-11	14-1	" "	"	2.9	0.7 × 0.6	楕 円	釣針状の曲り
8-12	14-1	" I 期	"	8.7	1.1 × 1.2	長方形	カギ形の曲り
8-13	14-1	" "	"	3.7	1.1 × 1.2	長方形	"
8-14	14-1	" "	"	4.0	0.7 × 0.65	方 形	"
8-15	14-1	" "	不明(鏃?)	6.3	0.8 × 0.85	方 形	
8-16	14-1	" "	不 明	7.1	0.8 × 0.6	長方形	カスガイ状

で、その中には I-1 類、III-1 類、V 類などに入る器種がみられる。B～G 群の土器片は少数出土しているが、B 群の中には B 群 2 類の破片が見られる。

第 8 図 7～8 は I 期の A 群 III-1 類の坏である。そのうち、7 はかまど跡の西側の床面上に散らばっていた破片から復元したものである。8 はかまど中央部に支脚として置かれていた坏である。両者とも、やや焼き歪みの強いのが特徴的である。

また同じ図の 9 は床面から出土した C 群 1 類のカメと思われるが、摩滅の著しい小破片なので、その全形はよく解らない。

・鉄器 I 期の遺構に伴う鉄器は 5 点出土している。これらの鉄器はいずれもかまどの周辺から発見されたものである。第 8 図 12～16 はその鉄器類である。図でも解るように鉄器にはさまざまな形態が見られるが、用途については今のところ不明である。

(Ⅱ期) Ⅱ期の出土遺物は I 期の場合と同様、破片を主とする土器類で占められている。土器類の中には A、B、C 群の各器形が見られ、他に F、G 群の破片が痕跡的に混っている。ここでも多数を占めるのは A 群の土器類で、その中には I-1、2、3 類、III-1、2 類、V 類の器種が見られる。特に III-2 類の多いのはこのⅡ期住居跡の特徴となっている。

土器以外の遺物としては鉄器 2 点が出土している。

以上の遺物は I 期と同様、主として遺構南半部の床面および埋土中から分散した形で出土している。第 8 図 1、3～6、10～11 はⅡ期の遺構に伴う遺物である。1～4 は III-2 a 類の器種で高台付皿形坏とでも呼ぶべき資料である。そのうち 1、2 はほぼ完形の個体である。5 は I-2 類の底部破片である。6 は I-2 類ないし 3 類の口辺部破片である。復元実測図ではやや器壁の立ち上がりの急な器形になっている。2 は BJ 12 ピットの埋土中から出土した III-2 a 類の坏、10、11 は鉄器であるが小破片なので、その器種は不明である。

C A 06 住居跡 (第 9 図、写真 2-3)

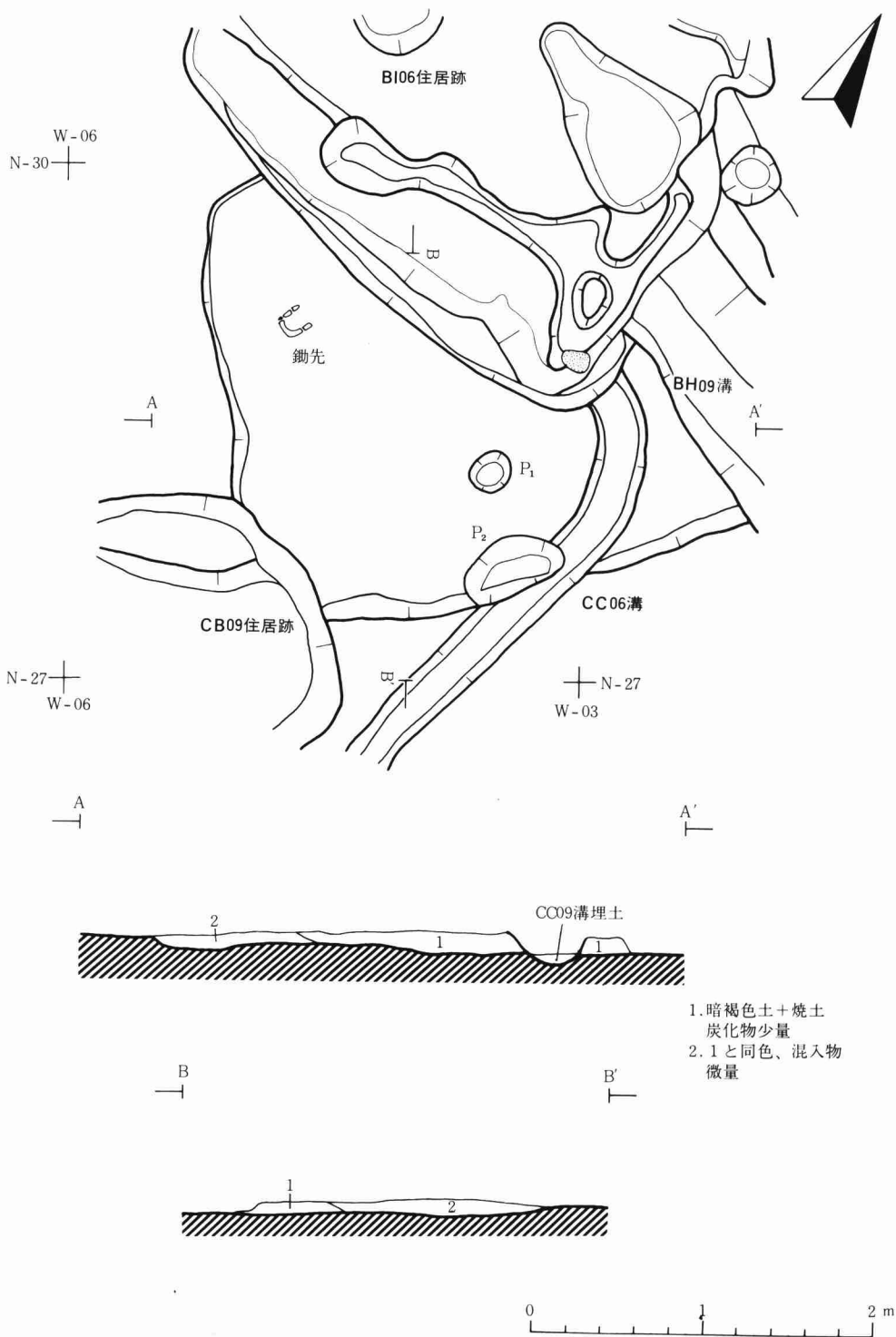
〔位置〕 この住居跡は B I 06 住居跡の南西部に重複する形で位置している。

〔重複関係〕 遺構は B I 06 住居跡、BH 09 溝、CC 09 溝によって壊され、全体の 3 分の 2 ほどが失なわれている。さらに遺構は CB 09 住居跡と重複するが、その時間的前後関係は埋土の状況からは判断できなかった。

〔形状、規模〕 この住居跡は南西～北東方向に長い隅丸長方形の竪穴住居跡で、その規模は長辺で 2.60 m 以上、短辺で 2.58 m で深さは検出面より約 0.1 m を測る。

〔付属遺構〕 遺構の南西側床部分には 2 つのピットがある。そのうち P₁ は平面円形の柱穴状ピットで直径 0.22 m、床面よりの深さ 0.24 m を測る。P₂ は南東壁に接する平面楕円形の浅い皿状ピットで長径 0.6 m、短径 0.35 m、深さ 0.08 m を測る。

—落合 I 遺跡—



(第9図) CA06住居跡平面断面実測図

これらのピットの埋土はP₁の場合は床を覆う埋土とほぼ同様の暗褐色のシルト質軽埴土の単層からなる。P₂の場合にはP₁の褐色のシルト質軽埴土にやや多量の焼土が混入した土の単層からなる。P₂からは土器片が2～3片出土している。

〔埋土状況〕 住居跡全体を覆う埋土は2層よりなる。そのうち1層はBJ 06住居跡の埋土とほぼ同質の炭化物や焼土の少量混入した暗褐色のシルト質埴土層である。2層は1層と大体同質の土よりなるが、混入物がほとんど見られない層である。

〔出土遺物〕 (第12図、13、14、表6、写真14—1下、4) 住居跡内の出土遺物は全部で7点あるが、そのうち5点は土器片で2点は鉄器である。土器はA群I・Ⅲ類・C群の細片である。

鉄器は2点であるが1つは第12図13に示した様な鋤先金具で、錆化が著しいが、ほぼ全形の知られるものである。この鋤先金具は南西壁寄りの床面で発見された。またCB 09住居跡と切り合っている場所付近の床から14に示す様な鍬と思われる鉄器が出土している。

CB 09 住居跡 (第10図、写真4—1、2)

〔位置〕 この住居跡はCA 06住居跡の南西に位置している。

〔重複関係〕 重複する遺構としてはCA 06住居跡とCB 09ピットがある。そのうちCA 06住居跡との関係はCA 06住居跡の説明でも述べた様に不明である。CB 09ピット(1)との関係については土層観察の結果CB 09ピット(1)の方が新しい事が解った。

〔形状、種類〕 この住居跡は南西～北東方向に長い不整形の竪穴住居跡で、その規模は長さ3.5 m、巾2.1 m、検出面からの深さ0.2～0.25 mを測る。遺構の北隅付近にはまわりの床面より約0.05 mほど高いテラス状の部分がある。全体的な形状から、この遺構が単一遺構ではなくて、いくつかの遺構の切り合った重複遺構である事が予想された。しかし調査時の土層や遺物出土状況の観察では、そのような事実を確認できなかった。

〔付属遺構〕 住居跡に伴なう付属遺構としては、かまど跡と3つの小ピットがある。

・かまど跡 住居跡の中央部には南東壁に接して北西～南東長約1.6 m、北東～南西巾約0.7 mの楕円形の範囲内に厚さ0.08 m内外の焼土層が見られる。そのうちでも特に南西壁寄りの直径約0.6 mの円形の範囲内に床面が強く焼けた痕跡が認められた。その南西部分はCB 09ピット(1)によって既に破壊されているが、その中央部にはA群1—2類の内黒坯が3個倒立した状態で置かれてあった。以上のような状況から、壁際の焼土遺構はこの住居跡に伴なうかまど跡と推定された。倒立したまま置かれていた坯はおそらく支脚として使用されたものであろう。かまどに伴なう煙道、その他の施設は検出できなかった。

・小ピット 焼土層の下からは3つのピットが発見されている。そのうちP₁は竪穴床部の中央に位置する直径0.35 m、深さ0.08 mの浅い摺鉢状ピットである。P₂はP₁のすぐ南西部に位